

© Kodak, 2007 TM: Kodak

42630
教科書文庫

4
810
51-1933
20000 38639

資 料 室

教科書文庫
4
810
51-1933
2000038639

325.9
Fu10

昭和八年十二月二十日
文部省檢定濟
師範學校・中學・國語漢文科用

新
制
國
文
學
史
全

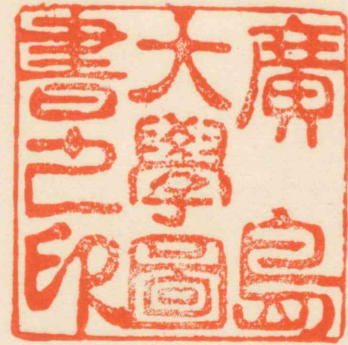
文學博士
藤井乙男
著

東京・大阪
三省堂

広島大学図書

2000038639





雜歌

泊瀬朝倉宮御宇大泊瀬御式天皇

御製歌一首

暮去者小椋山今計庭之今夜者不也寐亦
良霜

ゆゑに心をくわたりしに
ふりてはなほいづれに

我年之忘年天皇御製不害山栢目良我

例言

- 一、本書は師範學校・中學校・高等女學校・高等科等に於ける國文學史の教科用として編述した。
- 一、本書はなるべく簡潔にと心がけたが、史的重要事實は網羅して遺漏なきやうに力めた。
- 一、本書は一週一時間の授業時數を目安として編述したが、その多寡によつて敷衍要約の餘地は多寡ある筈である。
- 一、各種文學の例文は、讀本に於て豊富に接し得べきを思つて、ただ主要なものについて、一わたりこれを擧げるに止め、一括して卷末に附載した。
- 一、附録の年表は、國史重要事項と參照して、主要な作家作品の年代を一目の下に知らしめるために作り、著名な外國作家の歿年を附記したのである。

目次

緒論

第一章 上古の文學(國初から奈良時代まで)

一 序説……………五

二 古代の歌……………八

三 祝詞と宣命……………一〇

四 古傳の集成……………一四

五 萬葉集の歌……………三二

第二章 中古の文學(平安時代)

一 序説……………二九

二 漢詩文の隆盛……………三三

目次

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a table of contents and a preface.

第三章 近古の文學(鎌倉室町時代)

一	序 説	五
二	近古の歌	五
三	軍記物語	五
四	説話と隨筆	六
五	謠曲と狂言	七
六	連歌と俳諧	七
七	末期の歌壇	五
六	歴史物語と説話	五
五	枕草子と源氏物語	五
四	初期の物語・日記	五
三	歌の復興	五

第四章 近世の文學(江戸時代)

七	五山文學	七
一	序 説	六
二	儒者の文學	六
三	國學の興起	六
四	短 歌	六
五	俳 諧	六
六	浮世草子	六
七	淨瑠璃と脚本	六
八	江戸の小説	六
一	序 説	六

第五章 近代の文學(東京時代)

一	序 説	六
---	-----	---

二 評論文學……………三三

三 小説……………三六

四 歌と俳句……………三三

五 新詩……………三五

六 戯曲……………三九

附表 國文學史年表

— 目次 終 —



新制國文學史

緒論

文學國文學 すべての藝術は人の思想感情がいろいろな形で表現せられたものである。而してその一つなる文學は言語と文字とを用ひてこれを紙上に再現したもので、いづれの國でも、その國の國語を以て書き記された文學を國文學といふ。わが國文學とは即ち日本語をその表現手段とした文學をいふのである。いづれの國の文學でもその内容から分類して、普通にこれを抒情文學敘事文學及び劇文學とするが、實際作品の上について見るに、彼此相交つてゐて、さう判然と各の範疇に入れ難い。そしてほぼ抒

本邦に於ては漢文學の行はれること年久しく、漢文・漢詩の形を假りて思想を表現したのも多いため、これらを除く文學史にはゆかぬ。

緒論

情文學は律語を、敘事文學は散文を、その表現様式とし、劇文學はこの兩者相交錯してゐるもののやうである。

文學史の意義 さて文學の最も原始的なものが、どういふ形式と内容とを有してゐるかはとにかく、それは恐らく悠久の古から存してゐたものと見て可なるべく、その傳統は現代に及び、なほ無限の未來へとつづきゆくであらう。この間に制作せられた作品とその作家とを研究することによつて、それらの生れた時代の思想の傾向を知ることが出来、それを古代から近代へと述べられる時、人類の辿つて來た足跡を明確に知り得る。従つてわが國文學を對象として、その發展の跡を觀れば、われらは祖先の精神生活を闡明すると共に、次代への進展についての暗示を得ることが出来る。これが文學史のもつ重大な意義である。

國文學史の時代區分 今本邦の文學史の概要を説くに、便宜上

これを五期に分つ。この五期は大體政治史の區分を假りに用ひて、上古中古近古近世及び近代と名づける。その各の含む年代は左の通りである。

一、上古 國初から奈良時代まで、即ち神代から皇紀一四五〇年頃までで、文學の發生時代である。大體固有の國民精神の現れる時代である。

二、中古 平安時代で、皇紀一四五〇年頃から一八五〇年頃までで、唐朝文化が日本精神と融合して、文學の方面にもその傾向著しく、絢爛を極めた黄金時代を現出した。

三、近古 鎌倉室町時代で、皇紀一八五〇年頃から二二六〇年頃までで、宋元文化の移入せられた時期だが、美術に於けるほど文學には著しい影響はなかつた。この時期には文學は多く僧侶の手に成つた。

四、近世 江戸時代で、皇紀二二六〇年頃から二五三〇年頃までで、堂上文學は全く平民文學に壓倒せられた時代で、文學はあらゆる方面で舊套を脱した時代である。

五、近代 東京時代で、皇紀二五三〇年頃から二五八〇年頃までで、歐米文化の急激な移入につれて、文學も前古未曾有の進展をなし、世界の思潮と歩調を合せるやうになつた時代である。

第一章 上古の文學

(國初から奈良時代まで)

一、序 説

上古 この、に上古とは、國初から奈良時代の末までをいふ。この時代には、帝都は多く大和の地にあつて、文化の中心となつてゐたが故に、また大和時代ともよばれる。神武天皇以前は年紀を詳にし難いが、それからだけでも、一千五百年に近い。しかし太古の世、人智未だ進まず、感情素樸にして思想亦單純、従つて文學の進歩も遅遅として、見るべき作品も多くはないが、後世文學の萌芽は既にこの間に認めることが出来る。

上古の文學 應神天皇の御代に支那の文化が朝鮮を経て移入

せられ、下つて欽明天皇の御代に佛教の思想が支那・朝鮮を介して入つて来て、それぞれ多少の影響を及ぼしたとはいへ、なほ國民思想の根柢にはさしたる動搖もなく、大體に於て、この時代の作品は本邦固有の精神が強く反映してゐると見てよい。

口誦の文學 もと本邦の古代には文字がなかつた。それ故に、太古の文學は口から耳へ相傳へて後代に残されたので、古代の文學は口誦の文學であつた。語部といふ部族は、やがてさうした仕事にたづさはつてゐた者であらう。かくの如き口誦の文學が、漸次文字の普及につれて筆録せられるやうになつたのは、いつの頃ともわからないが、推古天皇の御時に聖徳太子の御撰に成つた國史のあつたことを思へば、かなり古い時代にまで溯ることが出来る。しかし文學的作品の出現は、奈良時代を待たなければならぬ。

文學の記載

抑も本邦に文字のあるは應神天皇の御代からの

天皇記・國記等
があつたといふ
が、蘇我氏の滅
亡の折に焼失し
た。

文學は奈良時代
に至つて盛ん
なつたが、造形
美術の方面には
推古天皇時代か
ら優秀な作品を
見るほど上古の
文化は進んであ
つた。而して既
印刷の術も幼稚
ながら存在し
た。

ことである。しかもその當初にあつては、書記のことは専ら歸化人の掌るところで、勿論綴られた文章は漢文であつたが、漸次これに習熟し來るや、これが音訓を假りて國語を寫し、更に扁旁等その一部を以て音を表はすべき略字を案出するに至り、奈良時代の末には、既に後世の片假名の發生を見るに至つた。

現存の文獻

今奈良時代の末までに制作せられた重なる文獻を挙げれば、史籍には古事記並びに日本書紀、地誌には諸國の風土記、歌集には萬葉集、詩集には懷風藻等がある。なほ次の中古期に入つて筆録せられた祝詞、壽詞、さては宣命等も、亦上古文學の貴重な資料である。これらの文獻の中、あるものは純漢文でものせられ、又漢文のやうに見えて、その布字法の和様なものがあり、或は後世假名交り文の源流と認むべきものもある。而して歌は大部分一字一音を以て記してある。

二、古代の歌

歌の發祥 太古に文字がなかつたといふことは、必ずしも文學がなかつたといふことではない。詩歌と物語と、そのいづれが早く生れたかは知り難いところであるけれども、古代人がその驚異の詠歎を表現したであらうことは想像するに難くなく、そこに詩歌の起源が認められるのである。かくして發祥せる歌が國文學の基調となつて上下三千年を貫くのである。

歌の形態 歌がその發祥時代にあつていかなる形であつたかは、今日では知られてゐないが、とにかく後世のやうな定型を有してゐなかつたことはいふまでもない。しかしそれが短長句の相交錯した律格をおぼるげながら持つてゐたことは、現存の文獻からでも想像せられる。而して時を経るに従つて、自然の淘汰を経

後世上古の歌を集めたものに記紀歌集(林諸鳥、天明八年「四六」刊)・日本歌選(佐佐木信綱、明治四十二年「二」刊)などがあ

て、短句は五音に、長句は七音にほぼ一定せられて來たのである。

歌の記載 古代の歌として現存せるものは、すべて記紀等後代の文獻に見えて、神話傳説と共に語られたものであり、従つて作者も所傳のままでないのは勿論、その形式も整理を経てゐることは疑を容るべからざることであるといへ、そこに古代人の生活思想の片鱗を窺ふことが出来る。

題材と表現 古代人の生活の半ばは愛欲の生活であり、他の半ばは鬪争の生活であつた。故にこの生活を反映して古代の歌は愛情を歌つたもの、鬪争を歌つたものが殆どその全數を占め、しかも古代人の單純にして明朗な性情から生れたそれらの歌には悲觀的なものは殆どない。その修辭的技巧は勿論洗煉を経てゐるとはいひ難いが、疊句譬喩枕詞等が適當に用ひられて、後代の展開を暗示してゐる。而してその譬喩も頗る卑近なものに限られ、彼

*印は例、文の附載あることを示す。

等の生活に即してゐることは言を俟たぬ。

三、祝詞と宣命

祭政一致の俗

古代にありては政事は神意のままに行はれたので、祭祀はやがて政治であつた。國語「まつりごと」は即ち祭事の義であることは這般の消息を語る。祝詞と壽詞は即ち祭祀と關聯して發達した文學である。祝詞は神前に宏言美辭を陳じて、言語の有する神祕力、即ち言靈によつて神意を和らげ、以て神助を得んことを祈願しようとするものであり、壽詞は同様の意圖から御代の長久を祝福しようとするもので、一括して汎く祝詞といふ。

祝詞の起源

祭祀の起源が神代に存する以上、祝詞も亦神話の時代に淵源してゐる筈である。天照大神が天岩戸に籠り給うた時に、天兒屋命が奏せられた太祝詞のどんなものであつたかは知

大國主神が御國讓の時、建御雷神を饗し給うた折、膳夫櫛八玉神が火を鑽つて申した壽詞である。

延喜式は醍醐天皇の延長五年(天長)藤原忠平これを撰す。

台記は藤原賴長(保元元年、二六六)の日記。

りかねる。ただ神代記なる櫛八玉神の壽詞に、

この我が燧れる火は、高天原には神産巢日御祖命のとだる天の新巢のすすの、やつかたるまで焼き上げ、地の下は底つ石根に焼き凝して、栲繩の千尋繩うち延へ釣らせる海人が、大口の尾翼鱸さわさわにひき寄せ上げて、拆竹のとををとををに天の眞魚咋獻らむ。(古事記、上卷)

とあるにより、又顯宗天皇紀なる室賀詞などによつて、その大體が窺はれるにすぎない。

現存の祝詞

現存する祝詞はすべて中古期に入つて筆録せられたもので、延喜式卷第八なる二十七篇と、外に台記別記に載せた一篇とである。既に後代の筆録に係るが故に、原作に多少の改竄の施されてゐることはいふまでもないことながら、大體に於て古代の姿を存してゐると見てよい。その制作年代については古來

大寶令は文武天皇の大寶元年(三六)成る。

種種の説はあるが、本居宣長が大寶令制定の前後かといつてゐるのは従ふべきであらう。

祝詞の内容 祝詞二十八篇は分つて凡そ五種とする。建國以來農業を以て立國の大本とするが故に、農祭に關した祝詞は最も重要なものであつて、五穀の豊饒を祈るとしひのまつり新年祭、月次祭、風水の災なからんことを祈る廣瀬大忌祭おほいみ、龍田風神祭、豊年を感謝する大嘗祭等がそれである。次に天皇宮殿及び百官の安泰を祈願するものにおほとのほがひ大殿祭、御門祭、鎮火祭、さては大祓などがあり、御代の長久を祝賀する出雲國造神賀詞及び中臣壽詞があり、外戚の祖神を祭る春日祭、平野祭があり、外に伊勢神宮に關するものがある。

祝詞の表現法 祝詞は祭祀の由來を語る神話的部分と、幣帛を陳ね神徳を讚美して祈願の意を述べる部分との二部から成るをその本來の形式とする。これまづ神話的記述を以て人人を遠い

神代に誘うて莊嚴感を抱かしめ、さて祈願の意を強調しようとするためであつたと考へられる。かうした意圖から祝詞は上古人のなし得る限りの技巧を盡して雄大莊重ならんことを期し、或は列擧し、反覆し、或は對句を用ひなどして、つとめて快美な諧調を保ち、その文辭は著しく律語的傾向をおびてゐる。*

宣命 神を對象とする祝詞に對して、天皇が人民に賜ふ詔書に、宣命といふのがある。續日本紀に見える文武天皇即位の宣命がその文獻に見える最初である。祝詞に比してその表現法著しく現實性をおび、従つて散文的であるが、その中に、いかに天皇が國家を中心として御身を謙退し給ひ、蒼生の上に仁慈を垂れ給ふかを拜祭することが出来る。

宣命書 祝詞・宣命等の表記法は

辭別忌部能弱肩爾 太多須支取挂兵 持由麻波利仕奉留幣帛平

宣命
續日本紀は延暦十六年(四五七)菅野真道等勅を奉じて撰す。

祈年祭の祝詞の末尾。

文武天皇即位の
宣命の冒頭。

神主祝部等受賜^氏事不過捧持奉^登宣。(延喜式卷第八)
現御神止大八嶋國所知天皇大命^{良麻止}詔大命^乎集侍皇子等王臣
百官人等天下公民諸聞食^止詔。(續日本紀卷第一)
のやうに、助辭を小文字で假名書きしてあつて、世に宣命書と呼ば
れ、後の假名交り文の源流をなしてゐる。

四、古傳の集成

上古の文章 上古に行はれてゐた文章の諸相を考へる。現存
の文獻の古いものは推古天皇の御代にまで溯ることが出来る。
而してその多くは漢文か、然らざればその布字法が和様に和らげ
られた變體の漢文であり、その他一字一音主義によつて國語を表
音的に表はしたものが、所謂宣命書によつたものであるが、初期に
あつては漢文が専ら行はれてゐたことは勿論である。その中に

も聖徳太子の御作になる憲法十七條は最も傑出したものである
が、文學として見るべき類のものではない。

詩文の制作 邦人の手ではじめて文學と目せられるものの制
作せられ、今日に残されてゐるのは近江時代以後のこと、時恰も
支那文化興隆の時代であつたので、詩賦の作は多かつたであらう
が、時亂離を経て多く灰燼に歸し、その残存するものはただの數首
にすぎない。爾後奈良時代に至つて詩賦の制作ますます盛んに、
その作品を集めて孝謙天皇の天平勝寶三年懷風藻^(四二)が成つた。作
家としては弘文天皇を始め奉り、大津河島二皇子以下六十餘、詩百
二十首を収めてゐるが、從駕陪宴の作多く、ともすれば題詠に流れ
て、眞情の流露せる作に乏しい。なほ詩賦の外、神話傳説等の集成、
國史の撰述、諸家の家記の類が數多く書かれたであらうが、現存の
ものはない。

懷風藻
懷風藻の撰者を
淡海三船(延曆
四年(四二)歿)
とする説は信じ
難い。

古事記の撰述 天武天皇は夙に修史の御志を抱かせられ、親しく諸家の所傳を刪定し給ひ、舍人稗田阿禮をして帝皇の日繼及び

古事記三卷の
中、上卷は神代、
中卷は神武天皇
から應神天皇、
下卷は仁德天皇
から推古天皇ま
である。

大安萬侶はこの
後日本書紀の編
纂にも與り、養
老七年(七三三)
に歿した。

古事記

古事記三卷の
中、上卷は神代、
中卷は神武天皇
から應神天皇、
下卷は仁德天皇
から推古天皇ま
である。

を撰録せしめられた。かうして古事記の成つたのは和銅五年(七三四)である。神代に始まつて、推古天皇に至る、これを三卷に纏めた。既に漢字の使用にも習熟したとはいへ、これを以て國文を記さうと

先代の舊辭を誦み習はしめ給うたが、中道にして崩御し給ひ、その業は成らなかつた。元明天皇即位し給ふや、太安萬侶に詔して、阿禮が傳へたところ

古事記(上卷)名屋真福寺寶生院所藏

した苦心は想察すべく、訓に因つて述べようとすれば、詞心に逮ばず、音を以て連ねようとすれば事の趣が更に長くなるので、この兩者を併用して新體の文章を創始し、ある程度まで古語を傳へるに成功した。

古事記の意圖 本書は歴史としては本格なものとは言ひがたい。神話傳説を經とし、史實を緯として綴られた一篇の敘事詩として見るべき作であらう。本書は既に述べた如く天武天皇の聖旨によつて整理せられ、體系づけられた神話傳説の集成であり、その中核となるべき主題は勿論皇室の由來を闡明し、國家組織を説明しようとするにある。即ち絶對神たる高皇產靈神の宇宙創造から、伊弉諾伊弉册二尊の國土生成、つづいて天照大神及びその御子孫の國土經營を根幹とし、それに素戔嗚尊、大國主命等出雲族の歸順その他を綯へ交せて一系統に纏め上げ、この間を點綴して、幾

多の説話を挿入してゐるのである。しかも古代人の常として、自然物も自然現象も皆これに神格を附與するが故に、それらもすべて神として他の神々と共に生活する。

國土の經營 本邦の神話は古代人の樂天的性質を反映し、いかなる神も絶對に暴戾ではあり得ない。神神に存する和魂と荒魂とは、その具へ給ふ二面の性質を語り、同時に古代人の理想を顯現する。崇り神荒ぶる神も、時になきにあらねど、それも究極まで兇暴な力を逞しうし得ず、善良な神神の事業は着着として成就し、發展してゆくのである。かうした考へは、清淨にして光明に満てる高天原と醜穢にして暗黒にとざされる根の國と、その中間に位して豊葦原の中つ國を考へることにも窺ふことが出来る。

國家の統一 かうして神神の國土經營の業が成就して、物語は葦原中つ國の統一及びその進展を語るの、自然天上から地上に

下り、神話の世界から傳説の世界に移る。而して地上の諸民族は、筑紫から出雲から、東國から、更に海をこえて高麗・百濟から、すべてわが中つ國へと、強き歩調を以て大和朝廷に參觀するのである。神武天皇から應神天皇頃までの記は、かうした國家統一の傳説を語るのである。

古事記の興趣 古事記の中、最も光彩ある部分は神神とその功業とを語る上巻であり、ついでは國家統一を語る中巻であり、統一後の國家を語つてゐる下巻に至つて、その興味は著しく減殺せられてゐる。これは古事記成立の由來に考へて當に然るべきところであらう。なほ古事記の語るところと異なる神話傳説も語られてゐたことはいふまでもなく、祝詞その他にその片影をとどめてゐる。

古事記の文章 古事記の文章は既にいつたやうな書きざまだ

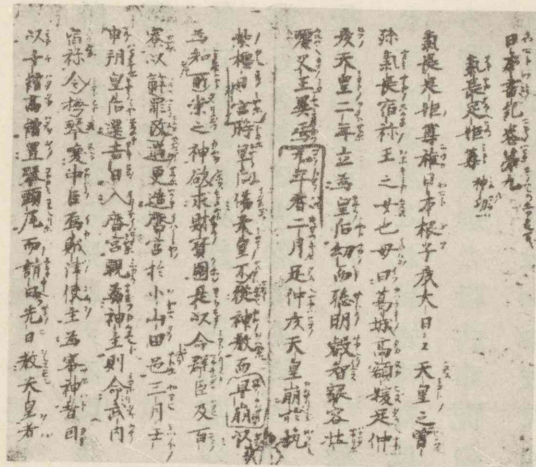
が、これを正しくよむことによつて、古代人の物語のさまを如實に再現し得べきではあるが、それは今日では望めないから、暫く先哲

の苦心の訓法に頼るが、素樸な中にも聲律に注意した言辭らしく、これを朗誦することによつて、古代人の面影をしのぶことが出来る。^{*}

日本書紀の編述

古事記撰述の後十年、元正天皇の養老四年、舍人親王總裁し給ふ日本書紀編纂の業が成つた。當時傳はる幾多の史料を博搜してその經とすべきものを採り、異説の捨て難いものは、これを列舉して参照に供するなど周到な用意の下に編成せ

日本書紀



(藏社神野北都京)紀后皇功神 紀書本日

風土記

播磨・常陸・出雲・豊後・肥前の五風土記が現存せる外は、諸書に引用せられて断片をとどめるのみである。次代に入つて大同三年(四六六)齋部廣成の上つた古語拾遺にも亦古傳の異説が見られる。

られ、通篇漢文を用ひ、歌はすべて一字一音を以て表記してゐる。勅撰正史の随一として、中古期撰述の續日本紀以下の五書を合せて六國史と稱せられる。

風土記・氏文

神話傳説等は如上の史籍の外、また風土記・氏文等に散見する。風土記は元明天皇の和銅六年諸國に詔して奉らしめ給うた地誌で、その中に傳説を交へるものが多い。現存の古風土記は五箇國分にすぎず、それも完本を傳ふるものは少く、多くは零本である。氏文は諸家の記録で、その家系を述べ、又祖先の功業を録したものだ、今は散佚して傳はらず、ただ諸種の古書に引用せられてゐる高橋氏文の断片を見るにすぎない。

五、萬葉集の歌

飛鳥奈良時代の文化 上古の末期に至り、大陸文化の影響をう

萬葉集

古事記中卷(日本武尊の條)にはしげやしわ

けて、文化の進展目ざましいものがあり、藝術の各部門に互つて後代に誇るべき幾多の傑作を残してゐる。文學も造形美術にやや後れて大化改新の前後から漸く面目を一新し、筆録の術の進むにつれて口誦の域を脱して來た。殊に歌は從來傳説說話に従屬してゐたが、この頃から獨立して藝術味饒かな作を残すやうになり、歌集として集められるものも漸次多くなつた。かくて飛鳥時代から藤原時代を経て奈良時代に入つて、いよいよ盛んとなり、それが結實したのが萬葉集二十卷である。

歌の形態的分化 歌が五音句七音句の交錯から成ることは既に述べたが、萬葉集の頃となつて、整理せられて三種の歌體が確立した。その第一は短歌で、五七音句を重ねること二回して、七音句を疊んだ形、その第二は長歌で、五七音句の重疊三回以上で、最後に七音句を重ねた形、その第三は旋頭歌で、片歌即ち五七七の形を二

ぎへのかたよくもあちく

を擧げて、「こは片歌なり」といつてゐる。佛足石は奈良縣藥師寺にあり、そこに佛足跡の讚歌を刻した石がある。この例歌はすべて萬葉集からとつた。始めからそれぞれ卷二、卷一、卷七、卷十六に見える。

重せる形である。なほ古來短歌と考へられてゐたものの中に、佛足跡歌體と稱せられる一體がある。即ち短歌の末尾に更に七音句を添へた形で、諷詠せられた歌のなごりを止めてゐるものと考へられてゐる。

家にあれば筈にもる飯を 草枕旅にしあれば 椎の葉にもる。(有島皇子―短歌の例)

大和には羣山あれど とりよるふ天の香山 登り立ち國見をすれば 國原は煙たちたつ 海原は鷗たちたつ うまし 國ぞ秋津島大和の國は。(舒明天皇―長歌の例)

白玉は人に知らえず 知らずともよし 知らずともわれし 知れらば 知らずともよし。(元興寺僧―旋頭歌の例)

伊夜日子の神の麓に 今日らもか鹿の伏すらむ 皮衣きて 角つきながら。(越中國歌―佛足跡歌體の例)

賦の終りに短詩をそへて、反辭又は亂といつてゐるのが影響して、反歌が生じたのではないかと、いふ。撰者については古來種の説があつて判然しないが、大伴家持が何等かの程度で關與してゐるらしい。

なほ長歌に反歌として短歌を添へることも舒明天皇の頃の歌から見えるが、これは支那文學の影響だらうと考へられる。

萬葉集の時代 さて萬葉集はその撰者を詳にしない。現存の

近江之乎浦

後思本宮御宇天皇代
天武天皇御宇
天智天皇御宇
天武天皇御宇
天智天皇御宇
天武天皇御宇
天智天皇御宇
天武天皇御宇
天智天皇御宇
天武天皇御宇

額田王歌

今者許藝乞茶

ふしうひひねいそをこよこしけ

元具へてゐないことに徴しても、この集が完全に整理せられたものでないことは一目瞭然である。集中に見える最後の

天平實字三年の作であることから推して、その時を距ること遠からぬ時代に集められたものであることを知る。收めた歌の中、最も古いものは仁徳天皇の皇后磐野媛の御歌であるが、大部分は

持統天皇の御代以後のもので、總歌數約四千五百首、中について最も多いものは短歌で、四千首を超えてゐる。長歌は約二百六十首、旋頭歌はその四が一にも足らぬ數であり、佛足跡歌體は十指に満たぬほどである。

内容と修辭 この集の内容は頗る多種多様である。古代ながらの抒情歌がその大部分を占めることはいはずもがな、自然を詠視せる敘景の歌、傳説を主題とせる敘事の歌にも見るべき作がある。聖駕に陪して應制の作あり、讌宴に侍して題詠の作のあるは支那風俗の影響である。而してこれらの作は時代の風潮を反映して、多少支那、印度等の思想の感化の迹も見えないではないが、大體に於て古代の朴直簡素を失はず、現世的、樂天的で、その偽らぬ天真を端的に表現して讀者に強い感銘を與へる。なほその修辭についていへば、枕詞序詞の使用はますます巧を加へ、譬喩擬人法の

驅使のよいも多く、對句疊句、また適宜に用ひられて、その技巧は口誦時代のそれに比して長足の進展を遂げたのである。

萬葉集の用字法 萬葉集の歌はすべて漢字を用ひて書かれた。その用字法は頗る自在を極め、

焚田津爾船乘世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝乞菜(卷二)

世間常如是耳加結大王白玉之緒絶樂思者(卷七)

寒過暖來良思朝烏指滓鹿能山爾霞輕引(卷十)

のやうに漢字の原義によつて或は音讀し、或は訓讀し、又は漢字の音訓を假借して國語を表はさうとし、或はわざと工夫して戯れた書きざまをするなど、記紀の歌がただ一字一音のみであつたのと同日の談でない。かかる用字法の結果、中古期に入つては既に訓法の傳を失つたものもあり、今日なほ定訓の得られない歌もある。重なる作家 さて萬葉集の作家は、上帝王の尊きより下乞食者

戲書とは「山上復有山」を「出づ」とよませ、「大王」を「てし」とよませる類をいふ。
卷一なる「莫囂圓隣之大相七兄爪調氣吾瀬子之射立爲兼五可新何本」など、今なほ定訓の得られぬものの一例である。

柿本人麻呂
人麻呂は和銅の初年に歿したと考へられる。

山部赤人
赤人の歌は天平八年(三三〇)が最後である。

山上憶良
憶良は天平五年(三三三)に沈痾自哀文を書いてその後の作がない。

大伴家持
延暦四年(四二五)に歿。年六十八。

の卑しきに至るまで、あらゆる階級に互つてゐるが、なほその中心は宮廷人にあると見てよい。中について作家として名ある者は藤原時代に柿本人麻呂、奈良時代前期に山部赤人、山上憶良、同後期に大伴家持等である。殊に人麻呂は卑官ながら歌聖の名が後世に藉甚し、抒情の歌に優れてゐる。傷亡の歌、回顧の歌、いづれもその漲溢せる感情は洗煉せる技巧と相俟つて羣作家中に獨歩の概がある。赤人は人麻呂と相對して重んじられるが、彼に見るやうな雄大さはなく、自然愛に即した短歌の作に秀歌をとどめてゐる。憶良は赤人にやや先だつて歿したが、その晩年は貧困と老病とに悩みつつ、人類愛に立脚した歌を残してゐる。家持はその青年時代の感傷的な作から、名門の家長としての自覺により國家觀念の強くなつた中年期の作に至るまで、多くの作を集中にとどめてゐる。人麻呂、憶良等を庶幾しつとも力の足りぬ憾みはあるが、國家

族人に對する心からの愛は、その作に一脈の生氣を與へてゐる。*

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 大、小、人、心、等）

第二章 中古の文學

（平安時代）

一、序 說

桓武天皇延暦三年（四四四）今の京都府乙訓郡長岡の地に都を遷し、ついで同十三年（四四四）今の京都市の地に遷り、平安京と稱し給ふ。

中古 中古といふのは桓武天皇の平安奠都から、後鳥羽天皇の建久三年源頼朝が鎌倉に幕府を開いて、武家政治の基礎をおくまで、約四百年間をさす。政治の中心は終始平安京にあり、文化も亦その根柢をここにおいてゐたが故に、また平安時代ともよばれる。前代の末期にその盛を極めた支那文化の攝取も一わたり終り、この期に入つては漸次國民思想に同化するに至り、宇多天皇の御代に於ける遣唐使の廢止は國民的自覺を喚起するに至り、一時漢詩文の跳梁に蹂躪せられた國文學は蔚然として起るに至つた。

私學の主なもの
は、淳和院(王
氏)・樂學院(在
原氏)・勸學院
(藤原氏)・弘文
院(和氣氏)・學
館院(橋氏)・綜
藝種智院(空海)
等である。圖書
學校の外、圖書
館ともいふべき
設備も既に奈良
時代にあつた。

當代文化と貴族 令の制備はり、京師に大學寮があつて諸生の教化を掌つたが、その他諸家の私學また盛んに起つて自家の子弟を教養した。かく教育の機關は備はると雖も、その恩惠をうけるものは名門の子弟に限られ、庶民は文化の餘澤にすら潤ふことが出來ず、永へに社會の下層に沈淪して、貴族の頤使に甘んじてゐなければならなかつた。かうした社會狀態の下にあつたが故に、當時の文學は、自然宮廷を中心とする貴族によつて制作せられ、彼等によつて鑑賞せられたこと、前代とかはりがなかつた。即ち當代の文學が貴族文學とも呼ばれる所以である。

貴族の生活 然るに貴族の生活は、宮廷と宮廷を繞る彼等同族間の狭い範圍にのみ終始して、煩瑣な儀禮と、それに附隨して管絃の演奏と、詩歌の贈答とがあるばかりで、それに堪へ得る教養と、優婉な容儀帶佩とは當代貴族に要求せられる。宮廷の行事はまた

彼等の私邸でも行はれ、かくて遊惰文弱の風一世を風靡し、享樂的氣分は上下に瀰漫した。

佛教的影響 この時に當り、佛教が彼等の生活に影響したことも、前代と同じくその表面に限られ、人心の祕奥に強い信仰を植ゑつけるまでには至らなかつた。南都佛教に代つた新興の天台眞言兩宗も、世に台密・東密と並稱せられて隆昌を來したのは事相的方面で、國利民福の大から、治病・安産の小に至るまで、皆修法・加持に頼らないものはなかつた。かくて深遠な教相的方面は當代の人心を動かすには至らなかつた。僧徒も亦權門と相結んで、世俗的勢力を張るに汲汲として、出世間的であるべき彼等の生活も、世間の俗人と相擇ぶところがなかつたのである。

優婉典雅の文學 かくの如き世態に處して、當代貴族の理想は中正の美を求めらるにあつた。意志の力は彼等の禮讚するところ

ではなく、彼等は飽くまで情念の動きを重んじる。しかし中正を求め、その行爲の極端に走るを許さない。さうしたところから生れた中古の文學は、僅少の例外を除いて、そこに熱烈奔放なものを見ることは出来ないが、同時に粗笨蕪雜なものも亦見られない。整齊優麗こそは實に中古文學の姿である。

中古文學の三期 中古四百年、これを文學の推移について見れば、凡そ三期に分けて見ることが出来る。前期は平安奠都の當初から宇多天皇の御代まで、支那詩文の隆盛の蔭に國文學が影を潜めてゐた時代で、その後半期頃から漸く假名文字の弘通を見、國文學が興隆しようとする萌芽が見られる。中期は醍醐天皇から白河天皇に至る約二百年で、延喜天曆を中心とする前百年は新時代の歌が起つた時代であり、寛弘年間を中心とする後百年は物語文學が大成した時代で、前後相俟つて中古文學の最高峯をなし、國

文學史の上に燦然たる光輝を放つ時代である。後期は所謂院政時代から平家時代を包容して、鳥羽天皇から後鳥羽天皇の治世の初年までの約百年間で、舊文學衰へて、しかも新文學なほ興らず、殊に物語文學はただ強弩の末勢を保ち、纔に歌は多少の新味を帯びて、次期にある期待をかけ得るやうに感じられて来る。

二、漢詩文の隆盛

唐朝文化の移植 大學寮に諸分科のある中に文章道獨り榮えて、博士とさへいへば文章博士をさすやうな有様であつたに徴しても、いかに文章詩賦が當代に重んじられたかは察しられよう。苑遊、畎獵相ついで行はれ、その都度詩賦の唱和せられたこと、奈良時代以來のことで、さながら唐朝風俗移入の觀があつた。當代人士の好尚に投じてもてはやされたものは、白氏文集を第一とし、文

選、さては遊仙窟の類亦前代以來詞人に喜ばれた。

當代の詩人

抑も當代の始めに、平城嵯峨淳和と、好文の天子の

晚上天津橋閑望偶逢

郎中張貞外携酒同飲

上陽宮裏曉鐘殘

楊柳殘月空閑院

暈下界飄飄身似在

天臺河隱映初生日

圓蓋籠中出相此處相

逢傾一酌始知地

上

(藏所御家宮松高) 集文氏白筆成行原藤

相ついで君臨し給うたことは、やがて文學の隆昌を致した所以であつた。就中嵯峨天皇は天資英邁にましまし、豊麗な詞藻は明敏な叡才と相俟つて優秀な聖作も多かつた。天皇の御代を中心として詩人の輩出すること夥しかつた中に、皇女有智子、内親王は巾幗の御身を以てして、その御作は初唐の遺響を存すと評せられ給ひ、廷臣小野篁は狷介にして時に流謫の苦を嘗めたが、その才華遙に時流を抜き、詩才遠く白樂天と相通じると稱せられ

空海の集を通照發揮性靈集といふ。

た。その他教界の偉材空海また卓拔な詩人として著聞し、その在唐時に彼の土の才人を感歎せしめたといはれる。

詩集勅撰

嵯峨天皇は弘仁五六年の交小野岑守等に勅して凌

雲新集を撰ばしめ給ひ、ついで弘仁九年藤原冬嗣等に勅して文華

秀麗集を、讓位の後重ねて良岑安世等をして天長四年に經國集を

撰ばしめられた。就中經國集は詩の外賦、序、對策等に互つて古人

の作をも採り、百七十八家の作を収めてゐたといふが、惜しい哉、散

佚して、二十卷の原本僅に六卷を傳へるに過ぎぬ。

詩文の衰運

かく隆盛を極めた詩文も、要するに題材から表現

に至るまで、大體唐朝詩文の摸倣であつて、端的に衷心の感懷を吐

露するものは甚だ尠少であつた。かくて嵯峨上皇の崩御、空海篁

等の物故の後、漸次衰微に趨き、遂に宇多天皇の寬平の御時に、遣唐

使廢止せられ、彼我の公式交渉が絶えるに及んで、ますますその生

寬平前後には都良香・高田忠臣・菅原道眞等是有名な文人であつた。

本朝文粹は藤原明衡、朝野羣載は三善爲康、本朝續文粹は藤原季綱これを書いた。

六國史

彩を失つて彫琢の末に走り、表現いよいよ巧緻となつて、内容ますます空疎となつて行くのであつた。中古の詩文を集めたものに、本朝文粹、朝野羣載つづいて本朝續文粹等の撰がある。
修史の業 なほ修史の業は、前代の日本書紀の後をうけて、桓武天皇の延暦十六年に續日本紀、仁明天皇の承和八年に日本後紀、清和天皇の貞觀十一年に續日本後紀、陽成天皇の元慶三年に文德實錄、醍醐天皇の延喜元年に三代實錄と、つぎつぎに勅撰せられたが、以後そのことが中絶した。この五部を日本書紀にあはせて六國史といふことは既に述べた所である。

三、歌の復興

中古初期の歌 外國語で外國の詩形で、わが感情を歌はうとするのは到底不自然である。故に詩人篋もその切切の情はこれを

古今集に讀みしらずとある歌はこの時代の作が多いといはれてゐる。

古今和歌集は略して古今集とよばれる。以後の撰集の類亦おなじ。

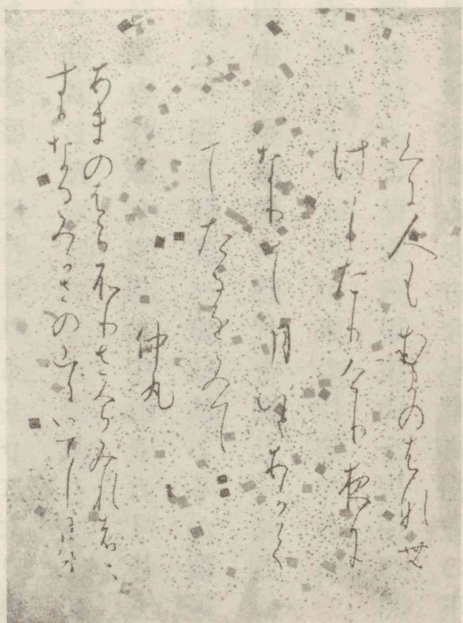
歌に託して表現した。乃ち知る、かの詩文隆盛の當時にあつても、歌は決して泯びてしまつたのではなく、ただ歌人として名を後世に垂れる者がないだけであつた。しかしさうした間にも徐々に國風の再び興らうとする機運は動いて來て、遂に清和天皇の御代に至り、それがますます濃厚になつて來た。それは詩壇の耆宿が多く世を去つたことも原因であらうし、假名がますます發達して、國語の表現が自由になつたことも重なる誘因に違ひないが、要するに國民的自覺が漸く高まつて來たからであつた。それは各方面にあらはれて來たが、歌の方では古今和歌集の勅撰となつて表面化した。

古今和歌集の勅撰 古今和歌集は醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之、凡河内躬恒、紀友則、壬生忠岑が勅を奉じて撰進した歌集である。嵯峨天皇の詩集勅撰に相當るべき聖代の盛事であり、撰者等はた

だ歌人として認められ、卑官の身を以てこの榮譽を擔うたのであつた。撰者等がどこまでも歌を以て漢詩に對抗しようとする意圖はまづ「和歌」といふ語にも窺はれ、その序中に歌に六種の體あることをいつて、「からのうたにもかくぞあるべき」といつてゐる點にも見ることが出来る。採録せられた歌はすべて一千一百首、萬葉集以後當代に至る秀歌を選んで、十三の部類を立て、分つて二十卷とした。その選歌は精嚴を極め、その體裁亦頗る整正たるものあり、實に勅撰歌集の翹楚たる名を恥づかしめず、永く後世に範を垂れてゐる。

十三の部類とは
春・夏・秋・冬・
賀・離別・羈旅・
物名・戀・哀傷・
雜・雜體・大歌所
御歌である。

古今集の歌風　うちつづく太平に都人士の性情は洗煉せられ、その趣味は陶冶に陶冶せられて、優麗にして典雅なものとなつた。従つて上代人に見られたやうな熱烈な情感は既に見らるべくもなく、その歌亦眞率な感情と遒勁な表現とを缺くが、その代りに洗



元永本古今和歌集

煉せられた感情は琢磨せられた技巧と相俟つて、著しく思惟的理智的な傾向が現はれて來たといへ、大體に於て醇雅典麗な抒情詩は萬葉集から約一百五十年の過渡期を隔てて、ここに

生れ出たのである。

形態及び格調の變遷　萬葉集と比較して古今集で氣附くこと

は、長歌と旋頭歌とが殆どその影を没してしまつたことである。それらは勿論萬葉集にあつても、その數短歌の比でなく、且その精彩を發揮してゐるのはその前期のことで、漸次短歌に壓せられが

長歌は本集に五首あり、その後も時に作られてゐるが、見るべき作は一もない。

ちであつたが、奈良時代末期からこの時代の初期に互る歌の沈衰時代に逢著して、歌は全くその形を短小にして、簡單に入り易い短歌の全盛を見るに至つたのである。而して、その短歌も格調に於て前代のとの間に著しい差異が認められる。即ち五七調がその處を七五調に譲つたことで、その結果は所謂たわやめぶりの流麗な歌が盛んに行はれるやうになり、夥しい助辭の使用がその趨勢を助長した。

重なる作家

本集の中心をなす歌人は勿論撰者等、殊に貫之と躬恆とに指を屈すべきではあるが、彼等に先行せる在原業平・僧正・遍昭・小野小町、ほゞ時代を同じくせる伊勢・清原深養父・坂上是則等亦看過することの出来ぬ作家である。殊に業平の豐潤な感情と富瞻な詩才とは永久の生命を保つべく、遍昭の婉雅輕妙なる、小町の濃豔・纖柔なる、亦古今集歌風樹立の上に大きな影響を及ぼした。

業平・遍昭・小町は文屋康秀・僧喜撰・大伴黑主と共に世に六歌仙と稱せられる。

紀貫之

凡河内躬恆貫之は天慶九年(百〇)に歿した。躬恆の歿年は判然しない。

而して撰者貫之の作の典雅洗煉の極致に至れる、躬恆の詠のこれと相竝んで機才縦横の間に天真の閃く、共に時代を導くものであつた。

古今集以後の歌

古今集一度成つて和歌の典型ここに定つた。狭い平安宮廷裡に跼蹐して、その餘の世界を知らうともせず、大自然に接して歌材を廣く探らうともしなかつた彼等には、一度樹立せられた歌風は絶大な權威を以て臨む。かくて所謂古今集的ならぬものは歌の世界に入れられないのである。

後撰集と拾遺集

村上天皇の御宇は所謂天曆の聖代で、醍醐天皇の延喜の御代と竝稱せられて、平安時代四百年間にあつて最も治績の擧つた時代といはれ、都門の内春永へに闌に、文人・詩宗も亦一時に輩出し、詩文また一時に盛んとなつたが、畢竟古人の糟粕を嘗めるにすぎなかつた。この御代に天皇は所謂梨壺の五人に勅

當代の詞人としては醍醐天皇の皇子兼明親王をはじめ、大江朝綱・菅原文時等が著聞してゐる。源順・清原元輔・大中臣能宣・紀

時文・坂上望城
を梨壺の五人と
いふ。

和歌三代集

私撰集の中、最
も有名なものは古
今和歌六帖で、
ほぼ古今集と前
後して成つたも
のだらう。

して後撰和歌集を撰ばしめ給うた。撰者等に自信の見るべきものなく、ただ古今の典型を追うて、著しく尙古的の風が窺はれる。ついで一條天皇の頃拾遺和歌集が成つた。或は花山院の御撰とも、或は藤原公任の撰ともいはれて定説がない。古今集にこの二集を加へて世に三代集といひ、歌の最も典型的な風姿を代表するものとせられてゐる。この間に作家としては清原元輔・源順・大中臣能宣等は後撰集の撰者として著聞し、曾根好忠はその斬新にして大膽な語彙を以て時代を白眼視し、藤原公任は典型的歌人として重んじられたが、殊に和泉式部は前の業平にその對比を求むべき熱烈奔放な女流歌人であつた。
この間に私撰集家集の集められたもの相つぎ、うち見にはいみじき歌壇の盛時ではあつたが、仔細にこれを内容的に觀ればうたた索寞を感じざるを得ない。

四、初期の物語・日記

純國文の制作 假名文字が流通して、散文の文學の傳へられるものが漸く多い。抑も前代の散文の多くは純漢文か、さなくば變體の漢文で、國語資料として役立つものこそ多いが、純國文と目すべきものは殆ど皆無といつてもよい。そのこれあるは當代に入つてからであるといふも敢て誣言ではない。

物語文學進展の迹 前代にその發生を見た説話文學は、唐代小説の影響をうけて著しく神仙譚の性質を帯びてゐたが、それが當代貴族生活と結んで、ここに傳奇物語の發生を見るに至ると共に、抒情詩から系統をひいて、その由來を附加した歌物語も亦當代に行はれ、斷片的歌物語を綜合して、これに自敘傳的性質をおびしめる時に、宮廷女流の日記文學が生れる。而してこれから隨筆文學

漢文で書かれた
神仙譚の物語
は既に奈良時代
に作られてゐ
た。

竹取物語

及び小説物語が導かれる。大體かうした徑路を辿つて、中古物語は竹取物語・伊勢物語から源氏物語にまで進展したのである。

初期の物語 竹取物語は又竹取翁物語ともよばれ、物語の祖と稱せられる。制作年代作者ともに不明であるが、嵯峨天皇時代から醍醐天皇時代までの間に作られたもののやうである。前代からあつた神仙譚が集成せられ、現實の風俗と緊密な交渉を保ちながら書かれたもので、多分に童話的性質を帯び、文章も稚拙愛すべきものがある。伊勢物語も亦年代作者を詳にしないが、竹取よりは後れ、古今集の前後に書かれたものらしく、全篇百二十餘章から成る歌物語で、歌も或は古歌の一二句をかへ、又二首を一首に合せ等したのものもある。歌も物語も共に在原業平に關するものが多いので、古來業平を作者に擬する者もあるが確證はない。この物語はその表現簡潔にして頗る餘韻にとみ、味ふべきものが多い。

伊勢物語

伊勢物語の系統をひいたものに大和物語がある。*

日記文學の鼻祖

歌に於て新歌風確立に多大な貢獻をした紀貫之は、また日記文學の祖として注目に値する。彼が土佐守の任はてて歸洛の時、任地で幼兒を喪うた悲痛を抱き、海賊の難を怖れつつ、哀愁と不安との道の記を、婦人の筆を裝うて、男もすといふ日記といふものにしたのが土佐日記である。貫之はさきに漢文の詩序に倣つて瑰麗典雅な國文を以て古今和歌集序、大堰川行幸和歌序を作り、今また蒼老枯淡の筆を呵してこの日記を書いたところに、その強大な自覺と自信とを窺ふに足りる。*

生活記録の日記

土佐日記の後蜻蛉日記が書かれたが、彼が旅日記であつたに對して、これは作者の生活記録で、多分に自敘傳的性質をもつてゐる。この日記はわれわれに當時の貴族の家庭生活を如實に語る。作者は藤原兼家の妻で、夫との愛情生活の破綻

土佐日記

蜻蛉日記

蜻蛉日記の記事は村上天皇の天曆八年(天西)から圓融天皇の天延二年(天西)に及んでゐる。

宇津保物語
落窪物語

を眼目としてゐる。
物語の進展 物語は竹取伊勢以後作られたものは多かつたやうだが、湮滅して殆ど傳はらず、ただ宇津保落窪の二作を残すにすぎない。ともに作者は不明であるが、恐らく圓融花山兩天皇の御代の頃、男子の手に成つたものであらうと推察せられる。ともに現實生活に即した作ではあるが、前者にはなほ多分の傳奇的色彩を有してゐるが、後者には殆どその影を見ることが出来ない。この二作を見ても、當時の作家の技倆が、竹取物語の時代よりも長足の進歩をしたことは容易に看取せられる。

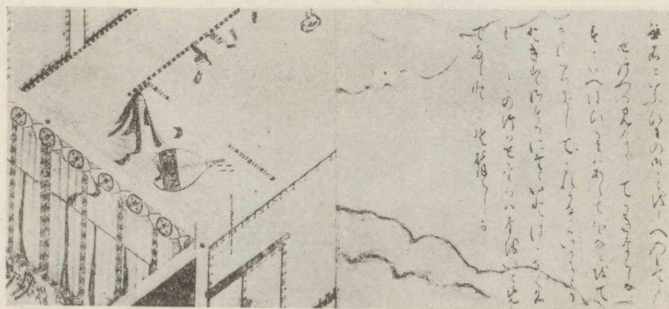
五、枕草子と源氏物語

女流作家の輩出 一條天皇の御代には、宮廷に奉仕せる女流の間に數多の作家が輩出して、各方面に優れた作品を残した。和泉

この時代に女流の作家が輩出したのは、天皇文學を好ませ給

ひ、後宮各君寵を競つた結果だといはれる。

枕草子 清少納言は清原元輔の女であるが、その傳記は知られない。その皇后に仕へてゐたのは二十四五歳から約十年間だと考へられる。この草子は長保二年(天喜)皇后崩御の後まで書きつがれてゐたらしい。



枕草子繪卷 (淺野侯爵藏)

式部の歌に於ける、清少納言の隨筆に於ける、紫式部の小説に於ける、これらはその尤なるものである。和泉式部のことは前にいつた。ここには後二者について述べよう。

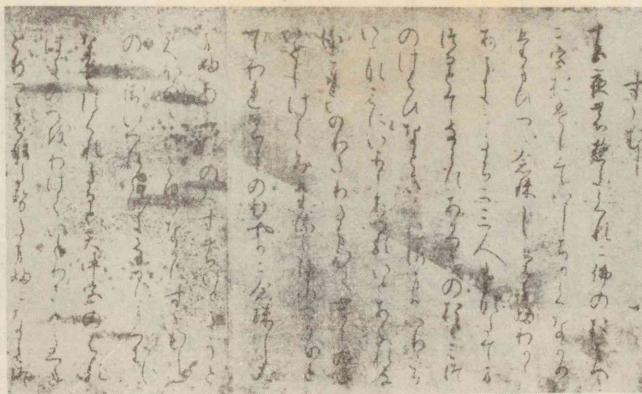
枕草子 清少納言は一條天皇の皇后に仕へて、寵遇を辱うしてゐたが、その宮廷生活の間の見聞感想を、筆のまにまに記したものが枕草子である。歌のない歌物語のやうなもので、同時に日記のやうな性質を帯びた作である。長短章相錯綜し、題材に應じて、或は精緻な或は簡潔な筆を驅つて、犀利な觀察と冷徹な批判とを恣にしてゐるところ、當代に匹儔を見ない特異の作であり、後世の隨筆文學は

皆この風を望んで起つてゐる。*

源氏物語

紫式部は藤原爲時
の女で、藤原宣孝に嫁し、一女を挙げた。夫宣孝の病歿したのは一條天皇の長保三年(交へ)である。

寛弘五年(交へ)にはその一部が流布してゐたらしい。



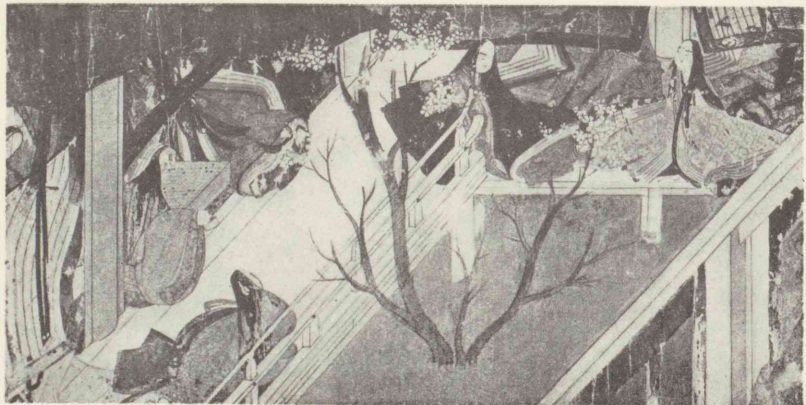
(藏所氏孝田益) 詞繪語物氏源

めつつ、その間に作者の理想を託した第一部四十一帖と、源氏君の

源氏物語 紫式部は一條天皇の宮に宮仕へした人だが、その源氏物語は夫病歿の後寡居數年の間に起稿せられたものと考へられ、その完成までにはかなりの歳月を要したものと推察せられるが、的確な年代は今日判然たらしめることは出来ない。この物語は全篇五十四帖から成る大部のもので、これを二部に分けて見る事が出来る。即ち光源氏君を主人公とし、その一生に當代貴族生活を髣髴せし



(書詞) 卷繪語物氏源



(河竹) 卷繪語物氏源

第二部十三帖
中、橋姫以下の
十帖を世に宇治
十帖といふ。

更級日記

子薫大將の戀愛生活を描寫しつつ、人の世のはかなさを嗟歎する第二部十三帖とである。長篇であるから、時に筆路冗漫に失する嫌がないでもないが、大體に於て描寫の繁簡宜しきを得、且また人物の性格も、或程度まで描きわけられてゐて、中古小説の王座を占めるは勿論、世界最古の小説として、燦然たる光芒を今日に放つてゐる。^{*}

女流の日記 作者の愛情生活乃至宮廷生活の記録である日記には、この時代に和泉式部日記紫式部日記等があるが、やや後れて更級日記がある。後冷泉天皇の御代に菅原孝標の女が書いたもので、他の女流日記とはやや選を異にし、作者が若き日の空想憧憬の夢からさめて、やがて宗教生活に入る心境の轉化を語るもので、短篇ながら興味饒かな作である。御津の濱松夜半の寢覺等の物語も確證はないが、この人の作だと傳へられてゐる。

狭衣もとりかへばやも共に作者不明である。なほ現存のとりかへばやは後の補筆が多いといはれてゐる。

源氏以後の物語

さきに清紫の二女出でて假名文の發達はその最高潮に達した。かく宮廷の女流によつて成就せられた國文の體は、その必然の結果として、優婉纖細の特徴を有し、勁拔豪放の趣は求められない。且作品にもすぐれたものが出なかつたので、恰も歌が古今集の典型を墨守してゐるやうに、物語も殆ど源氏以外に出ることなく、内容にも表現にも、精彩もなく新味もなく、摸倣に摸倣を重ねて次代へと移つてゆく。作品には狭衣やや見るべく、とりかへばやに至つては、徒らにその筋の怪奇を以て讀者に臨むのみである。

六、歴史物語と説話

回顧の文學

中古文學の盛衰は藤原氏の隆替と多大の關係をもつ。さしにも全盛を誇つた道長の榮華も、その人去つて法成寺

榮華物語 大鏡

榮華物語は宇多天皇に筆を起し、堀河天皇の寛治六年(七五三)に筆をおき、大鏡は文徳天皇から後一條天皇の萬壽二年(六六六)に及ぶ。

の御堂のみがありし日を語るのである。かくてその頃に榮えた藝術の花も凋落して、昔日の面影はまた見ることが出来ない。前代の榮華を回顧して現代の落寞を痛感する時、懷古の情は油然として湧く。ここに於て過去の事象を素材として、花やかなりし前代を、せめて紙上に再現しようとする。かうして歴史物語が生れ、榮華物語と大鏡とが書かれた。

歴史物語

榮華物語と大鏡とは、一は編年體、一は列傳體を採つてゐるが、その制作の動機はいづれも藤原道長の榮華のさまを紙上に再現しようとする點にあることは一であるが、作者の用意にはかなりの距離がある。即ち榮華の作者は道長を無條件に讚美するが、大鏡の作者は必ずしもその一舉一動を讚仰の眼を以ては見ず、その反對者に對しても滿腔の同情を惜しまないと共に、道長の行爲に對しても常に批判を下してゐる點など史論の嚆矢と見

榮華物語は當時の女流の日記等を材料として、それを拮据して作られたものでないかとの説もある。

今鏡

今鏡は大鏡の後をうけて高倉天皇の御代に及んである。
靈異記は南都の僧景戒の手に成つたもの。

今昔物語集

られる。なほその體裁に於ても、榮華物語は既成物語のあとを追ひ、大鏡は一篇の結構に新機軸を出して、後に出る歴史物語をしてこれに範をとらせるに至つた。この二作はともに堀河天皇鳥羽天皇の御代の頃に成つたらしく、作者は共に不明だが、前者は女流の手に成り、後者は男子の作と信じられる。*なほ歴史物語としては、この兩書から系統をひいて中古末期に今鏡が出来た。
説話の集成 文學陵夷の時代はまた古説話の集成を生んだ。説話の集録せられたものには、古く弘仁の頃に日本國現報善惡靈異記があり、その後にも若干の作があるが、殆ど皆漢文で書かれて居り、又佛教説話がその内容であつた。ここにそれらに更に採擇の範圍を廣汎にし、國文で書かれたものが今昔物語集である。源隆國の撰と傳へられてゐるが疑はしい。天竺震旦本朝に互り、佛教的説話世俗的説話殆ど相半ばして、合計一千有餘、とりどり興味

唐物語

ゆたかであるが、本朝世俗の説話中、中古の文化世相を知るべき題材に富み、他の物語類に等閑視せられてゐる庶民階級の姿を見ることの出来る點に於て、特に貴重な文獻である。なほ本書は國語資料としても重んじられ、文章も物語草子等慣用の假名文の埒外に出で、次代の文章と緊密な交渉を有する點で文章史上亦重要視せられる。*なほこの期の終り頃に唐物語があるが、當時の翻譯文學の一例として輕輕に看過し難い作である。

七、末期の歌壇

歌論の勃興 時代とともに歌はますます實生活と密接な關係を保ち、當代貴族には缺くべからざる教養の一となり、一首の歌の褒貶に一命を賭するが如き類もあつたと傳へられる。百首歌合の流行亦盛んに、論難辯駁相つぎ、ここに歌學の勃興を見るに至り、

歌經標式は光仁天皇の寶龜三年(四三)藤原實成が作った。邦人の詩論書としては空海の文鏡秘府論が最も古い。

顯輔の流を世に六條家といふ。

後拾遺集

白河天皇の應徳三年(七四六)成る。

金葉集

崇徳天皇の大治二年(七七一)成る。

詞花集

近衛天皇の仁平元年(六二二)成る。

千載集

後鳥羽天皇の文治三年(一一九三)成る。

藤原俊成

俊成は中古末か

歌話歌論の書の出るもの亦頗る多かつた。抑も歌學は奈良時代の末にその萌芽を見、詩論に影響せられて漸次盛んとなり、一條天皇の御代に藤原公任出で、後期に入つて藤原基俊と源俊賴との對立を見、ついで藤原顯輔、その子清輔が出てますます興つたのである。かく歌論の勃興につれて、歌道に門閥の生じたことは注目すべきことである。

歌壇の新聲 この間に歌集勅撰のことは頻頻として行はれ、後拾遺金葉詞花千載の諸集が次次に撰進せられた。この中金葉詞花の二集は、それぞれ當時の新風の作家である源俊賴藤原顯輔の撰になり、一脈清新の氣の動きが見られないでもなかつたが、一度樹つた古今集の歌風は牢として抜くことが出来なかつた。*

末期の歌壇 かくて當代の末に藤原俊成が出た。名家の出で、夙に歌道に入り、新舊諸家の歌風を攝取して、雅醇にして穩健な歌

ら近古の初期に互つて歌壇に重きをなしてゐたが、土御門天皇の元久元年(二六六)巴薨じた。

神樂・催馬樂は一條天皇の御代に今日のやうに整理せられたといふ。後白河法皇は雜藝を好ませられ、梁塵秘抄を御親撰あらせられたが、今日は殘缺を残すのみである。

郢曲

風をたて、それを標準として千載和歌集を撰したが、その間にも歌風は漸次時代の影響をうけて動きそめ、俊成によつて主張せられた幽玄體の如き、次代の展開を豫想せしめるものがある。*

中古の謠ひ物 古代にあつては、歌は諷詠すべきものであつたが、やうやう歌と謠ひ物とは分化し始め、奈良時代から當代に入つて、大體その間に截然たる區別を見るやうになつた。この時代の謠ひ物は初期の神樂催馬樂から末期の雜藝に至るまで、その律格は歌のやうに嚴密でなく、その内容も狭い風流に限られることなく、そこに洗煉を経た美辭はないけれども、素樸・眞率な民衆の心、さては純眞・無雜な童心に接しることが出来る。なほ佛教の興隆に伴うて、佛會歌謠としての和讃の發生をも見、又漢文の盛行につれて、朗詠の流行をも來した。*なほ催馬樂朗詠及びかうした雜藝のたぐひは、總括して郢曲とよばれることがある。

第三章 近古の文學

(鎌倉・室町時代)

一、序 説

近古 ここに近古といふは、源頼朝が幕府を鎌倉に創めた後鳥羽天皇の建久三年から、吉野時代・室町時代を経て、後陽成天皇の慶長八年徳川家康が江戸に幕府を開くまで、約四百年をいふが、その間の政權の所在によつて、また鎌倉・室町時代ともよばれる。藤原氏擅權の間に醸成せられた武門興隆の機運ここに熟して、武家政治確立し、公家は京に、武家は關東に相對立して、文化の中心は東西に分れたが、武家の文化は、なほ一世の文運を左右するに至らず、公家は新文化を開拓すべき氣魄に乏しく、共に新時代の文學を創造

淨土教的信仰は平安時代からあつたが、この期に入つて源空(法然)・親鸞等によつて大衆の間に弘通した。禪宗は榮西によつて臨濟宗が、道元によつて曹洞宗が將來せられた。

するに堪へなかつた。

思想界の傾向 中古末期からうちつづく天下の争鬪に、人心の不安動搖は甚しかつた。この機微を捉へて異常な活氣を呈したのは宗教界であつた。前代の貴族的宗教たる天台・眞言の二宗が、時代の動向に順應する用意を缺き、舊時の夢を追うてゐる間に、淨土教と禪宗とは、一は民衆の間に、一は武家の間に絶大な信仰を得たが、その他に強烈な信念の下に起つた日蓮の法華宗も、亦上下の尊信を集めた。これら新興の宗派は人心に新しい力を植ゑつけ、沈潜的思索的傾向を興へ、武家の剛健な風習と相俟つて、新時代を形づくつてゆくのであつた。しかもその間にあつて中古の耽美的風潮も全く人心から離脱する能はず、新舊兩思潮の交錯するところに、當代文學が特徴づけられる。

作家層の移動 翻つて作家の點から見ると、宮廷人は氣力に缺

け、武人は素養に乏しいところがある。かうした時代に、最も活氣に富み、且文字に明るい者は緇衣の徒であつたが故に、當代の文運が彼等によつて支配せられたことは當然の勢であつた。かくの如くに文學が貴族の手から僧侶の手に移つたことは、やがて次代にそれが庶民の手に落ちるべきを暗示してゐる。

近古文學の二期 この時代は大體前後二期に分けられる。前期は即ち鎌倉時代で、注目すべき事項は、歌道に於ける師範家の興隆と、門流の抗争とであり、新興文學としての軍記物語と説話文學との産出である。後期は即ち室町時代で、最も重要なことは、劇文學としての謡曲と狂言との發達、並びに連歌道の勃興と、その俳諧への推移とで、これらはいづれで來るべき近世期に大きな影響を及ぼしてゐる。

二、近古の歌

新古今和歌集

歌壇の新機運

當代劈頭の偉觀は新古今和歌集の成立である。後鳥羽天皇英邁の資を以て銳意朝權の恢弘を圖り給ひ、いつかは平安の盛時をわが大御代に顯現しようとする努め給うたので、上下何とはなしに活氣を帯びて見えた。天皇はまたすぐれた歌聖にましまし、皇子土御門順徳二帝亦歌に堪能でいらせられた。かくて臣下にも歌をよくする人人輩出して、潑刺たる時代の氣運と相應じて、歌壇も異常な生氣を呈して來た。この盛時を記念するのが新古今和歌集である。

新古今和歌集の撰進

建久九年(一八五八)後鳥羽天皇讓位、越えて建仁元(一一六一)年和歌所を置かれ、左大臣良經以下の寄人を任じ、更に藤原定家、同家隆等五人に仰せて古今の秀歌を選ばしめ給ひ、同三年(一一六三)五人の選

和歌所は村上天皇の御代に置かれて以來、當代まで中絶してゐた。撰者はこの二人

の外、源通具藤原家・藤原雅經である。その班僧寂蓮もその班に入つてゐたが、撰成るに先だつて寂した。勅撰集の卷數は古今集以來、金葉・詞花二集が十卷、全部二十卷である。但し部立には異がある。和歌八代集

歌を集め、更に院御自ら合點し給ひ、元久二年一先づ撰を了へて竟宴を行はせられた。しかも院はなほ足れりとし給はず、後年隱岐へ御遷幸の後もなほ御合點の筆をおき給はなかつたのである。採るところの歌數約二千、二十卷に分つこと古今集以來の例である。古今集以下本集までを八代集といひ、後世歌人の特に推重するところである。

本集の歌風 本集の歌は古今集を宗とすること、前代の諸集と異なることはないが、その表現の上に種種の技巧が凝らされ、ここに餘情あり含蓄に富める新歌風が成り、その技巧の冴えは前古にその比を見ないといはれる。但しその結果ややもすれば陥らうとする短所は、天真を缺き、纖巧にして生氣を失ふことであり、幽玄を求めてその極晦澁に墮し、高遠を欲して卻つて卑俗に流れるもの、本集中にも絶無とはいひがたい。さばれ本集は近古の初頭に



(筆實信原藤) 像御皇天羽鳥後

良經の月清集、
慈圓の拾玉集、
俊成の長秋詠、
愚草、定家の拾遺
二集、西行の山
家集を合せて、
後入六家集とい
つてゐる。

藤原定家
仁治二年(九〇一)
歿。八十。

西行法師
建久元年(八五〇)
寂。七十三。

源實朝
實朝の家集を金
枕和歌集とい
ふ。その薨去は
承久元年(八七九)
である。年二十
八。

輝く大きな光彩であり、遠く延喜の古今集と相對し、遂に奈良時代
の萬葉集と相望んで、歌壇に鼎立せる偉觀である。

當代の重な作家 新古今集時代に名ある作家は、後鳥羽天皇は
申すも畏し、公家には藤原良經、同定家、同家隆、同秀能、僧には慈圓、寂
蓮、西行、女流には式子内親王、俊成、女宮内卿等があり、やや後れて源
實朝が出た。就中定家は一代の作家、批評家として、古の貫之と好
箇の對照をなして居り、加之絶大の精力を以て古典の書寫、校合に
精進して、後世に誇るべき業績を残してゐる。西行は漂泊の歌僧、
半生を江湖に放浪して、自然に抱かれてものした歌詠は、自ら獨自
の境地を拓き、實朝は鎌倉將軍家、若くして非命に死んだが、その萬
葉に參して端的に衷情を吐露するや、高古の調を帶び、遒勁の作が
多い。*

歌道の門閥 中古の末に六條家は顯季、顯輔、清輔父子三代相つ

いで歌壇に重きをなしたが、この時代に入つて定家が父俊成の後をついで一代の衆望を負うてより、ここに新に二條家の基礎成り、この二家は歌風學説の相違はもとより、他面政争とも結びついてその抗争を深めたが、結局二條家は完全に六條家を壓倒してしまつた。かくて定家から爲家を経て、その歿後二條家は更に二條京極・冷泉の三家に分派して相争ひ、持明院・大覺寺兩皇統の迭立の紛争と夤縁して二條京極兩家の杆格はますます激成せられたが、最後の勝利は二條家の得るところとなつた。この間各自家の説に權威づけようとして定家に假託した偽書が續出した。

新古今集以後 この間にも勅撰集は相ついで撰進せられ、新古今集について後堀河天皇の貞永元年(一一九二)に新勅撰和歌集が定家によつて奏覽に供せられてより、後花園天皇の永享十年(一三九八)飛鳥井雅世が新續古今和歌集を撰進するまで十三部の勅撰集が成つた。その

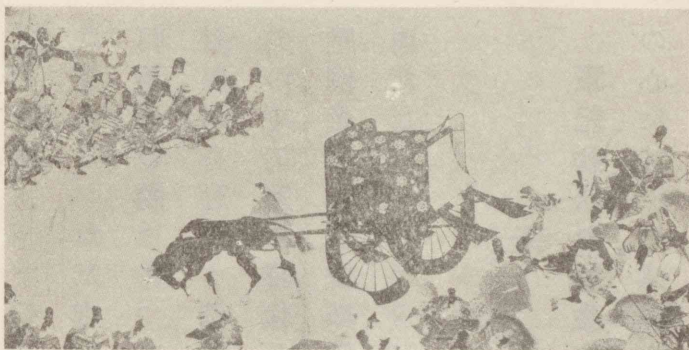
新葉和歌集
新葉集は宗良親
王の御撰であ
る。

外私撰集家集亦相ついで現れたが、その多くは様に依つて畫かれた蒭蘆にすぎず、新古今集を最後として、歌の進展はとどまつたかに見える。ただ吉野時代君臣の詠を集めた新葉和歌集のみは軼軻不遇の間にあつて國家の亂離を憂へ、一身の薄命を嘆き、惻惻として人を動かす真情の流露するものがある。^{*}かくて室町時代から戰國の世にかけて、歌は漸次新興の連歌に壓倒せられ、傳統の燈火が幽かに闇黒の中にゆらめくに過ぎなかつた。

三、軍記物語

軍記物語の發生 中古の末に捲き起された社會的動亂は人人の心に甚深の感銘を刻み、有爲轉變の世相に直面した人人は、今更の如く夢幻泡沫の感に打たれ、欣求淨土の念を深うせざるを得な

保元物語
平治物語
平家物語
源平盛衰記
平家物語は琵琶に合せて語られた語り本だといふ。従つて異本は随分多く、源平盛衰記もその異本の一であるといふ論も有力である。



平治物語繪卷(六波羅幸)トボント博物館所藏

かつた。新興佛教は這般の人情の機微を捉へて起つたのであるが、文學も亦ここに題材を求めたのは自然のことである。即ち保元物語・平治物語・平家物語及び源平盛衰記がそれで、軍記物語といはれる一羣の作である。前二者は保元・平治の戦亂を素材として没落してゆく源氏を描き、後二者は源平の争亂に取材して平氏覆滅の顛末を物語つてゐる。

軍記の性質 これらの軍記物語は歴史的事實を題材とした點に於て、榮華大鏡の系統をひく歴史物語の一種であるが、その描く世界は、彼は思ふだに倦怠を感じさせ

るやうな沈滞の貴族の社會であつたが、これは動き動いて瞬時もやまなない動亂の國であり、そこに活躍する者は前代にあつては齒牙にだにかけられなかつた武士である。かくて全篇の空氣が彼とは全く異なるが上に、始終を一貫するに平明な佛教的因果の理法を以てするところ、正に新時代文學の特徴である。しかも平安時代四百年昇平の情力は一朝一夕にして抜くべくもなく、かの感情生活的物語は挿話的に隨所に織りこまれて、陰慘の中なほ一道の情味を漂はしてゐる。この特徴の殊に鮮かに見られるものは平家物語で、祇園精舎にはしまつて女院御往生に終る強い無常觀、悲壯な敘事詩を點綴せる幾多の抒情詩的要素など、軍記文學中の傑作である。

軍記の文章 これらの軍記の作者は不明であるが、男子の手に成つたことは疑ふべくもない。また文章を見ると、中古の假名文

の優麗さは失せて、かの今昔物語集などに見えた新體の文章はここに洗煉を加へられ、漢語佛語が國語の中に攝取せられて、いみじき調和を保ち、簡潔にして適勁な新體の文章が成り、後世の所謂和漢混淆文はここからその系統をひくのである。この方面から見ても平家物語は他の軍記物語に對して優越性を有してゐる。七五調の快い諧調はそれが語り物であつた性質に職由すべきも、朗朗として誦すべく、讀む者をして飽かざらしめるところ、この種の文學中の冠冕たるに恥ぢない。*

太平記

太平記の作者は小島法師等だといふ。小島法師は長慶天皇の文中三年(904)に寂す。

後期の軍記物語 これらの後に出た軍記物語の雄篇は太平記である。吉野時代五十年の史實に取材した四十卷の大作で、吉野時代の末か室町時代初頭の作と考へられる。作者について定説はないが、叡山關係の法師の著であらうと思はれる。甚しく絢爛の筆を弄してはゐるが、全體の調子は著しく散文的で、戦亂の記事

に情趣的挿話を點綴し、或は内外の故事を挿み、佛法の談義を試みて氣分の轉換を計ること、前行の諸軍記物語に異なることなきも、やや濫用の傾ありて、時に感興を殺ぐに至る。

歴史物語

軍記物語の外、前代の歴史物語の正系をひくものに

水鏡と増鏡とがある。前者は鎌倉時代に、後者は吉野時代に作られたが、作者は共に不明である。水鏡は大鏡の前を補うて神武天皇から仁明天皇に及び、増鏡は今鏡の後をうけて後鳥羽天皇から後醍醐天皇に及んでゐる。この二書は前の今鏡と同じく大鏡の趣向に倣うて書き初められてゐるが、水鏡はとにかく、増鏡の粉本は寧ろ榮華物語にあるもののやうである。而してその王政復古を目標とし給ふ後鳥羽、後醍醐兩帝の宏謨を寫す筆の、精彩奕奕たるところに作者の意圖が窺はれる。*

史論

これらの外、史論の書も當代にはかなりあつた。即ち鎌

水鏡 増鏡

水鏡と増鏡とに中古の大鏡・今鏡を合せて四鏡といひ、又今鏡を除いて三鏡ともいふ。なほ今鏡と増鏡との間を連ねる彌世繼は夙く湮滅して傳はらない。

愚管抄
神皇正統記
愚管抄の作者は
僧慈圓(嘉祿元
年一六五寂)とい
はれる。
親房は正平九年
(一一四四)薨。年六
十二。

吉野拾遺
義經記
曾我物語

現存の住吉・正
三位は中古の物
語の名に於て

倉時代には愚管抄が佛教的見地から歴史の底を流れる力を闡明したが、更に吉野時代に出た神皇正統記は神道を中心として國運の通塞を説いた出色の作といふべく、北畠親房が兵馬倥傯の間に筆を呵して、堂堂たる態度と熱烈なる氣力とを以て、ともすれば忘れられようとする大義名分を明らかにし、皇統の正潤を論じ、後世に大きな影響を及ぼした。*

その他の作品 以上の外、吉野時代に成つた吉野拾遺、室町時代に書かれた義經記、曾我物語等も歴史物語、軍記物語の一種とも見らるべく、殊に後の二書が後代に及ぼした影響はかなり大きい。

四、説話と隨筆

傳統文學 新興軍記物語の外、中古物語の系統をひいて、多くの物語が書かれた。即ち鎌倉時代には住吉正三位風につれなき等

當代の作家が作
爲したものであ
る。
堤中納言物語は
十章の短篇から
成る。古くは中
古末の作と考へ
られてゐたが、
近頃の研究では
當代のもつと論
斷される。
御伽草子
十六夜日記
海道記
東關紀行
十六夜日記の作
者は阿佛尼(弘
安六年二五三寂)
である。
海道記・東關紀
行とも作者が判
然しない。
宇治拾遺物語
十訓抄
古今著聞集
寶物集
撰集抄
沙石集
假名法語

があるが、いづれも前代摸倣の迹著しく、藝術的香氣に乏しい。ただ一つ同時代の作と考へられる堤中納言物語に於て警拔な短篇作品に接するにすぎない。又室町時代にも、後世御伽草子と汎稱せられる數多の短篇が作られたが、訓蒙的のもので、多くいふに足りない。日記は道の記が多く、十六夜日記、海道記、東關紀行その他の作が多い。十六夜にはその擬古文の表に浸透せる母性愛が感じられ、海道記には軍記と同じく文章に豊かな新味が感じられる。説話文學 説話文學の系統をひいてゐるものには宇治拾遺物語、十訓抄、古今著聞集、寶物集、撰集抄、沙石集等がある。いづれも鎌倉時代に出來たが、その多くは佛者の手に成つたらしく、従つて佛教的色彩を帯びて、教理を談じ、信仰を説き、世俗を教訓する。かうしたところにも時代の色は反映してゐる。*

なほ當時の高僧たちの手になる法語の類、例へば法然、日蓮の遺

文、向阿の三部假名抄等の中に文學的香氣を放つものの多いことは特に注目に値する。

方丈記
鴨長明は京都賀茂社の禰宜で、後出家し、順徳天皇の建保四年(一一七二)に六十四で歿したといふ。方丈記はその晩年の作である。

方丈記 これらの外近古的色彩の豊かな作品は方丈記である。鴨長明の作と傳へられ、鎌倉時代初期の作で、首尾纏つた結構を有する好エッセイで、佛家の厭世觀を以て全篇を貫いてゐる。しかし作者の遁世は徹底的でなく、中古的の詠歎を隨所にとどめてゐるが、これやがて軍記物語などにも見える、近古初頭に通じた思想の傾向である。文章は華麗にしてしかも敦厚、但しやや生氣に乏しい嫌がある*。

徒然草
兼好は京都吉田神社の社人で、後出家し、後村上天皇の正平五年(一一三〇)に六十八で歿した。當歌人としては當時の頼阿・淨辨。

徒然草 吉野時代の作なる徒然草は、遠く枕草子に對應すべき隨筆文學の名篇である。作者は當時の歌人卜部兼好で、長短凡そ二百四十章から成る。その中心思想が佛敎的無常觀であること、かの方丈記などと異なるところは、作者の心境は融通無礙、

慶雲と共に四天王と併稱せられた。

趣味は博洽普遍、或は老莊を談じ、或は中古の情味に佇徊するなど、そぞろに襟懷の潤達を見るべきものがある。廣く諸道に通じて、しかも囚はれず煩はされないと、兼好の眞面目があり、徒然草の價値がある。文章も亦題材によつて新古變化の妙を極め、枕草子の辛辣味はないが、洒脫にして輕妙、方丈記の執拗さを蟬脱し、新時代の文人として獨自の地歩を占める*。

五、謠曲と狂言

猿樂の能 演劇の起源が祭祀に關してゐて、遠く神話の時代にあることは、東西その揆を一にしてゐるが、劇的組織の歌舞がおぼろげながらに行はれたことの文獻に見えるのは中古期からで、猿樂とよばれたものがそれだが、それは多く諸國の大寺大社に附屬して、その傳を保つて室町時代に及んだ。又田園の歌舞に田樂と

春日には猿樂の家が四座あつたが、それぞれ今日までその統をたないでゐる。即ち金春・觀世・寶生・金剛の四座である。

謡曲

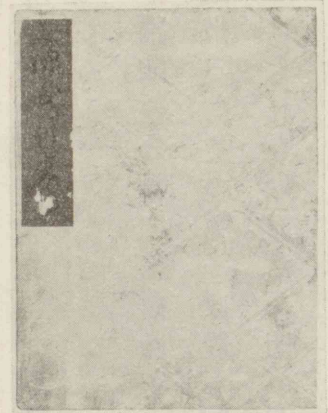
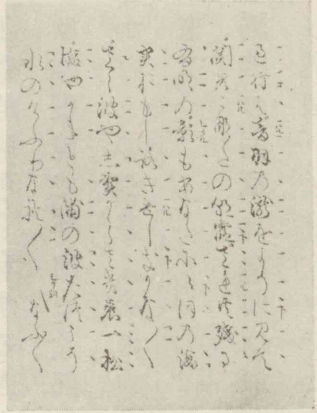
觀阿彌は元中元年(二四四)に歿し、世阿彌は嘉吉三年(三三三)時に年八十一頃歿したらしい。

世阿彌十六部集

いふものがあつて、中古末期から貴族の遊樂を助けたが、武家時代に入つてますます盛んになつた。室町時代の初頭に奈良春日の猿樂の家に觀阿彌世阿彌父子が出るに及んで、猿樂は遂に田樂を壓して、武家の式樂として用ひられるやうになり、能とさへいへば直ちに猿樂の能を思はしめるやうになつた。

謡曲の作者 謡曲は即ち能の詞曲で、流派によつて、その詞章にも多少の差異はあるが、大同小異である。普通に行はれてゐる曲目は約二百曲、その多くは創始期を距ること甚だ遠からざる時代に作られたものと考へられ、觀阿彌世阿彌の作が殊に多く、且優れてゐるといはれる。觀阿彌は姓を結崎、名を清次といひ、世阿彌はその子、名は元清といつて、今日の觀世家の祖である。その藝術に對する態度は花傳書以下所謂世阿彌十六部集をとほして知られ、その眞摯にして敬虔なる、人をして自ら肅然たらしめるものがあ

る。



光悦本源氏供養

謡曲の形態 謡曲の中心思想はいふまでもなく佛教思想で、神明佛陀の靈驗あらたかなるが故に、妄執の鬼も法をきいては解脱を得ることが出来るのだといふことを、演技を通じて宣べようとするのがその主眼である。今その結構を見るに自ら二種に分れてゐる。一は所謂單式能で、主人公たるシテが前後一貫してゐるものと、他はそれが前段と後段とで姿をかへる所謂複式能である。複式能にあつては、前シテと後シテとは同一人の假の姿

幸若舞

直詮の幼名を幸若丸といつたので、幸若舞の稱がある。直詮は文明十二年(三四〇)に歿した。年七十八。

頼阿は二條家の家學を繼承した歌僧である。了俊が和歌所へ

寓したものである。その特色は全篇科白のみから成つてゐること、及びその詞章が謠曲のやうな古典の引用もなく、その時代の言語を基調としてゐることである。^{*}

幸若舞曲

猿樂能と並び行はれた當代の歌舞に幸若舞がある。これは室町時代の初めに桃井直常の孫直詮が創始したと傳へられる。主として軍記物語に取材した勇壯な曲であつたので武人の好尚に投じ、近世初期まで行はれたが、その後殆ど亡びてしまつた。武人の趣味に合うた曲目だけに、剛勇悲愴な情景を描いては當代に匹儔稀なものである。

六、連歌と俳諧

室町時代の歌

室町時代の初めに歌人として頼阿の名が高いが、さしたる作家とも思はれない。冷泉家の門に出た今川了俊、そ

不審の條條は二條家の家學に對する抗議である。

連歌といふ名目は金葉集にはじめて見える。

の門下の僧正徹等、二三の異材がないでもないが、一度歌が二條家に私せられてからは、思想、語彙の方面に種種の制縛が加へられ、剩へ傳授、祕事など稱して、ますます一般からは近づき難いものとなつてしまつた。かくて歌に代つて興つたものは連歌である。

連歌の發展

連歌はもと一首の短歌を二人して分けて詠んだので、起源は遠く奈良時代にあつたが、中古期にもかなり行はれて、連歌といふ名目もその頃に用ひられそめたのである。而して當初にはただ一時の機智を弄し、文字の末技に走るのみであつたが、鎌倉時代に入つて漸次長大の形をとることとなり、五十韻、百韻等の連歌が行はれるやうになり、その末期には定家の孫なる冷泉爲相によつて式目の制定をも見るに至つた。而して吉野時代京師にあつた二條良基が攝關の貴に居てこれを好み、正平十一年(1151)にその師救濟と共に菟玖波集を撰し、翌年勅撰に准じられるに及んで、

菟玖波集

宗祇

宗祇は何處の人か明らかでない。その示寂したのは後柏原天皇の文龜二年(二六)であつた。年八十二。

新撰菟玖波集
新撰菟玖波集の成つたのは明應四年(三五)である。

山崎宗鑑

荒木田守武

連歌の地位は俄然高まつて來たのである。

連歌の大成 その後名家巨匠相ついで出たが、後土御門天皇の御代に宗祇が出るに至つて連歌はその發達の最高峯に達した。宗祇は若くして律僧となり、後連歌道に入つた。性煙霞の癖があつて、南船又北馬、四方に歴遊して詩囊を肥し、遂に箱根の客舎に逝いた。その著、吾妻問答老のすさみは、共に連歌道の正しい道しるべであり、その撰になる新撰菟玖波集は、その主張を如實に示すべき選集である。*

連歌から俳諧へ 連歌が宗祇を絶頂として、以後は式目の極格と用語の制限とに自ら衰亡を早めつつある間に、その繫縛から脱して自由な道を求めたものは山崎宗鑑と荒木田守武とである。共に戰國時代に出で、期せずして同じ道を進んだが、その性格は作品の上にも反映して、宗鑑のは粗野にして奔放、時に滑稽の埒をこ

犬筑波集は後柏原天皇の永正十一年(三七)に成つたといふが、確定的の説でなく、獨吟千句は天文九年(一四〇)に成る。

五山とは宋の五山に摸して禪刹の寺格を定めた名稱であるが、その位次は時代によつて差がある。

七、五山文學

五山文學 鎌倉時代の初めに僧榮西入宋傳法して以來、禪僧の彼の土に渡る者漸く多く、その文物の移入せられるもの年を逐うて盛んとなつた。殊に後伏見天皇の正安元年(一九五)元僧一山の來朝歸化するに及んで、漢文學が五山の僧徒の間に盛行するに至り、文運陵夷の當時にあつて、五山は實に文學の淵藪であつた。

五山の詩文 五山の文學は大體後小松天皇の應永の頃を以て、

義堂
絶海

義堂は元中五年
(一三二四)に、絶海
は應永十二年(一
三三〇)に示寂し
た。

桂庵

桂庵の示寂は永
正五年(一三六〇)で
ある。

前後二期に分けることが出来る。前期は詩文に名家の輩出した時代、後期は學問の研究で著れた時代である。義堂と絶海とは前期幾多の詩僧の中でも勝れた作家であつた。一山の會下に虎關・夢窓出で、夢窓の門に義堂と絶海とが出た。その詩はともに和習を脱して、直ちに彼の土の作に迫るものあり、明人をして嘆賞おく能はざらしめたといふ。義堂の集を空華集といひ、絶海の集を蕉堅稿といふ。*

五山の儒學

義堂門の惟肖から出た桂庵は後期を代表すべき學僧である。後土御門天皇の應仁元年明國に渡つて求道の傍程、朱の學を究め、歸朝するや、都門の亂離を避けて薩南の地に宋學を講じたが、來つてその門を叩く者甚だ多く、近世に至つて宋學が學界を席捲した機運は實にかくして醸成せられたのである。かく打續く戰亂を外に、將に滅せんとする學燈は禪林に維持せられ、そ

の齎した文化が不知不識の間に國民の性情を陶冶したことは頗る多大であつた。なほ彼等の残した講筵の筆記には國語資料として貴重なものが多い。

第四章 近世の文學

(江戸時代)

一、序 説

近世 近世とは、後陽成天皇の慶長八年(一六〇三)徳川家康が幕府を江戸に開いてから、慶應三年(一八二七)明治天皇が大統を紹ぎ給ふに至るまで、前後約二百七十年の間をいふ。この間幕府は江戸の地にあつて、政權を握つてゐたので、また江戸時代とも呼ばれる。その初期にあつては、時に干戈の動くことがあつたとはいへ、大體に於て昇平の日は續き、且參勤交代の制は文化の邊境に及ぶを助け、國學、儒學の普及は庶民の教養を高め、ここに現代謳歌の聲は所在に湧き、藝術の園は百花繚亂の盛觀を呈するに至つた。

佛教と儒教 前代にあつてさしも人心に浸潤してゐたかに見えた佛教の權威も、近世期に入つては、所謂強弩の末勢、ただ惰力による形式的信仰を繋ぎとめてゐるに過ぎなかつた。而してこれに代つて思想界を指導したものは儒教である。儒教は近古末期以來漸く人人に關心を持たれてゐたが、家康が儒教主義を以て天下に臨んで以來、その勢隆隆として振興し、その現世的思想は人心に多大の影響を及ぼし、武家といはず、町人といはず、その道德律は皆基調をここに置かないものはなきに至つた。

武士道 武家の道德は即ち武士道である。近古戰亂の世に鐵火の洗禮をうけて大成し、この時代の初めには、その内容、外觀共に大いに備はり、利弊ともに著しくなつて來た。忠孝を旨とし、武藝を練り、義のためには命を鴻毛の輕きに比し、廉潔を尙び、私慾のためには意志を枉げることを最も卑劣なりとする。而してその弊の

極まるところ、殺伐に流れ、人を斬ること草を薙ぐが如く、些末なことのためにも命を捨てる。義理を重んじるはては形式に流れ、名譽心に拘はり、後世から見れば滑稽にさへ思はれることが多い。かうした世相は文學上にも著しく反映してゐる。

町人道 武家の武士道に對して、町人にはまた自ら町人道があつた。町人は孝行を第一とし、神佛を崇め、重代の家業を紹いでこれを子孫に傳へ、勤儉産を治め、財寶を重んじなければならぬ。かうした思想は既に浮世草子にも見えて、近世の初頭から存したところであるが、明確にこれを民衆に教へたのは心學である。心學は王陽明の知行合一説に根柢をおき、神・儒・佛三教の説を混じて、専ら町人のために平易通俗な道徳を鼓吹したもので、中御門天皇の享保年間に石田梅巖が京車屋町に講席を開いたに始まる。

近世文學の特徴 近世の文學は如上の基調に立つて、概して樂

石田梅巖は丹波の人。延享元年(一四四)歿す。手鳥堵庵その衣鉢をついで有名である。

天的であり、現世的である。人生を深く省察して批評することは、彼等の敢てするところでない。又彼等はすべてを功利的に見るところから、文學も亦直接世を益しないものは無用の文字としてこれを卑しめるが故に、作者も力めてこれに迎合して道徳的色彩を作品に附加しようとして、その結果不自然な脚色をさへ否まない。しかも作者は自ら卑下して戯作者^{げさくしゃ}を以て甘んじてゐた。要するに近世文學は道徳的な點に於て特徴を有する。

近世文學の二期 なほ近世期を分けて前後二期とすることが出来る。前期は元祿を中心とする時代で、江戸草創の際とて、文化の中心はなほ京阪にあり、従つて文學も多く京阪で制作せられてゐる。この時代は戰亂の世を去ること、なほ遠くないので、すべて大まかで織巧ではないが、新しく興るものの力強さがある。後期は文化・文政を中心とする時代で、江戸の文化は漸く進み、政治の中

心を離れた京阪は活氣なく、文學亦江戸に榮えた。この時代の文學は爛熟せる太平の氣分から生れたもので、繊細にして輕妙な都會的文學であつた。

二、儒者の文學

後陽成天皇(元和三年「三七七」崩)夙に古書板の叢志を抱かせられ、文祿二年(三三三)古文孝經を開板せしめられ、以後數種の勅板がある。家康は叢志を奉體して古書刊行を行つたのである。以後印刷の術益々すすみ、書籍出版の事愈々多くなつたのである。

儒教の興隆 家康の天下を掌握するや、まづ人心を安定せしめんがために、學問特に儒學を獎勵し、藤原惺窩、林道春等を登用し、また古書を覆刻して、その普及につとめた。爾後幕府は歴世儒學を獎勵し、綱吉は江戸湯島に聖廟を建て、昌平黌を興し、道春の孫鳳岡をして學事を督せしめた。かくて林氏の奉じる程朱の學は儒學の正宗と仰がれたが、民間には中江藤樹、熊澤蕃山等の陽明學派、伊藤仁齋父子の古學派、荻生徂徠等の古文辭學派など、東西に競ひ起り、一時の盛觀を極めた。彼等は講學の傍、平明なる國文を以て民

衆教化のために道德文學を説き、又歌を詠じて感懷を遣つてゐた。これら儒學者の中、文學を以て傳ふべき者はまづ貝原益軒と新井白石とである。

益軒と白石 益軒は福岡の人、程朱の學を奉じてゐたが、學者としてよりは寧ろ民衆教育家としてその面目を見るべく、世に十訓と稱せられる訓話の書は、敘述平易にして周到、蓋し得易からざる作である。白石は將軍家宣に仕へて獻替するところ多かつたが、學者としても博洽の學と高邁の識とを兼ね備へて、政治文學、語學の各方面に互つて、行くとして可ならざるなき曠世の大才であつた。讀史餘論は武家興亡の迹を論じて精到を極め、近古の神皇正統記と相對して史論の雙璧ともいふべく、歴史文學の名作として後代に輝く。^{*}

これら漢學者の文章は和漢文を調和した質實平明な文體で、後

益軒十訓 家訓・君子訓・大和俗訓・樂訓・和俗童子訓・五常訓・家道訓・養生訓・文武訓・初學訓を十訓といひ、多く元禄末年以後になり、その或物は歿後に刊行された。

新井白石

讀史餘論は正徳二年(三七七)將軍に進講した講本である。白石の作にはその他藩論・折たく柴の記など、有名である。

世所謂普通文として廣く行はれたものである。

道話の書はその
始祖梅巖以後數
多いが、最も文
學味の豊かなも
のは柴田鳩翁の
鳩翁道話であ
る。

心學道話

要するに漢學者の文學はその根柢を儒學においた
實際的論議が主で、重に當時の武士階級の修養の基礎をなしたも
のであつた。然るに一方これを一層平易に碎いて、町人階級に通
俗道徳を鼓吹したのが心學であることは既に述べたが、これを記
述したものは即ち道話である。その文體は平易な和漢混淆文に
より、更に俗耳に入り易い口語體までが用ひられてゐることも注
目すべきである。*

近世の詩文

かく儒學の盛行につれ、漢詩文の作も亦盛んとな
り、詩人として名を得た者もかなり出た。近世末期に至つては、更
に日本の思想を詩文に託して、時勢を慨し、士氣を鼓舞する者續出
するに至つた。これらの中、文化文政の頃に出た頼山陽の日本外
史や詠史諸篇は、漢詩文としては醇正なものではなからうが、かう

頼山陽
山陽は天保三年
(一四九二)五十三で
歿した。

した點から特に注目せられる。

三、國學の興起

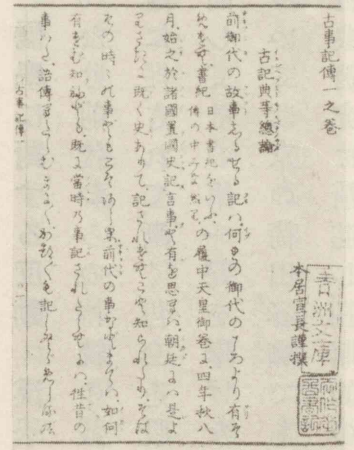
儒學に對する反動 漢學の勃興に比して國學の興隆はやや後
れた。前代からの傳統の殻に籠つてゐた古典の研究も、時代の氣
運に促されて、漸く舊套を脱ぎそめたのは元祿前後の頃であつた。
而してその第一聲を擧げたのは大阪の下河邊長流と僧契沖と、つ
づいては京の荷田春滿あつまるであつた。長流と契沖とは學者的態度で
古典研究に精進し、劃期的の業績を擧げたが、殊に契沖の語學的創
見に至つては燦然たる光輝を放つてゐる。然るに春滿は古典の
講究によつて本邦固有の古道を明らめ、そこに道徳政治上の指針
を求めようとする。その態度は漢學に對する反動的傾向著しく、
熱烈な國家觀念がその基調をなしてゐる。

下河邊長流
僧契沖

契沖が徳川光圀
のために撰した
萬葉集代匠記
(貞享四年三三三
頃初稿成る)は
古典の新研究に
第一石を投じた
著である。契沖
はなほ語學史の
方でも不朽の述
作をのこしてゐ
る。彼の示寂は
元祿十四年(一六
六二)で、年は六
二であつた。

賀茂真淵
真淵は明和六年
(一四三六)に歿し
た。年七十三。

國學の大成 春滿の唱道した國學は、賀茂真淵・本居宣長に大成し、平田篤胤に至つて宗教的熱情にまで高潮した。真淵は春滿の門に出て、その學風を繼承し、漢學が國民精神に浸潤して太古淳樸の風を失はしめたとなし、儒學の教へる人爲的虚飾に満ちた道德



をすてて、天地自然の大道に復るべきを説き、その手段として古人がその天真から詠み出でた歌を見るに及くことなしと考へ、その立場から萬葉集の研究に潛心した。宣長はその師真淵の徳憑に

より、古事記の研究から入つて、古代國民の純眞さが生み出した惟神の大道を闡明しようとした。その大著古事記傳四十八卷こそは畢生の心血を注いだ力作である。要するに、真淵は詩人的直觀

古事記傳は明和元年(一四四一)稿を起し、寛政十年(一四九八)成る。その

本居宣長

の間三十五年を費した。こえて三年享和元年(一八一〇)に宣長は歿した。年七十三。

國學の四大人

から出發し、宣長は學者的思索によつてこれに條理づけたのであつた。しかもこれを天下に呼號し、大衆によびかけることは、彼等の本領でなく、後の篤胤とその門下に俟たなければならなかつた。春滿・真淵・宣長・篤胤を世に國學の四大人といふ。

宣長の評論 國學者の文章は古典の影響をうけて著しく擬古の調をおびて居り、語彙、語法共に耳遠い感のあるのはその缺點ではあるが、近古動亂の餘波をうけ、又漢文訓讀の影響によつて、ともすれば亂雜に流れようとする時文の弊を矯めて、正確・純雅な古文を當代に再現しようとする努力は認められる。國學者の輩出したが中にも、宣長の明徹な頭腦は評論に長じ、紫文要領に見える物語論、石上私淑言に現れた和歌論は、それぞれその本質を闡明して餘すところなく、近代の評論に伍してもさして遜色を見ない。又隨筆玉かつまは斷章ながら傾聴に値する説を盛つてゐる。

紫文要領は源氏物語に關する評論で、その所論は玉の小櫛の總論に再論されてゐる。石上私淑言は歌の起源、その發生の過程、詩と徳等の諸問題を問答體でのべてゐる。三卷ある。

擬古文 また當時眞淵宣長の流風を慕うて集つた人人の中には、學者たるよりも文人としての素質の人も多かつたが、彼等は古典學習の手段として、講學の餘暇古文を軌範として雅懷を歌文に託した。さうした文章は和文雅文又は擬古文とよばれる種類で、眞淵門の村田春海の琴後集ことじりしほ、加藤千蔭ちかげの朮うけが花など有名である。その他清水濱臣、石川雅望、中島廣足、藤井高尚等の文もすぐれてゐた。しかしこれらは學者の餘技以上に出ることなく、藝術的に高く評價せらるべしとも思はれない。

四、短 歌

傳統の歌壇 近世初期の歌は二條家の正統をうけついでゐた細川幽齋によつて、辛うじてその傳統を保つてゐた。幽齋の門人は多かつたが、その中、最も注目すべきは智仁親王と松永貞徳とで

細川幽齋

智仁親王
松永貞徳

智仁親王に學び給うた後水尾天皇の御集はすぐれた御作に富んでゐる。

戸田茂睡

梨本集は元禄十一年(三三六)に成つた。茂睡は寶永三年(三三六)に六十八で歿した。

眞淵の集には賀茂翁家集がある。

ある。智仁親王によつて歌は堂上に榮え、貞徳の提撕によつて民衆の間に弘まる機縁を得たのである。かくて久しく堂上に壟斷せられてゐた歌も漸く地下に弘布せられ、ひいては革新の叫ばれる素地を作つたのである。

革新の第一聲 貞徳は歌を民衆に開放した殊勳者であつたが、なほ堂上歌學の範圍を踰えかねた。ここに澎湃として起つた元祿の復興的精神に刺戟せられ、敢然起つて二條家三百年の傳統に抗して、これに痛烈なる一撃を與へたものは、即ち江戸の戸田茂睡であつた。その説は梨本集に見える。但しその説を紹繼し祖述すべき門人のなかつたことは惜しむべきことであつた。

眞淵と蘆庵 國學の勃興につれて歌も亦盛んになり、眞淵の古道を明らめんがための手段であつた歌はいつしかその目的とかはつてしまつた。眞淵は萬葉集から更に溯つて記紀の歌をその

在滿の國歌八論
(寛保二年(一四二成)は當時の歌壇に異常の衝動を與へ、論辯相ついだ。蘆庵は古今六帖に傾倒し、その集をも六帖詠藻といふ。景樹は天保十四年(一五三三)に七十六で歿した。その歌論は新學異見・歌學提要・隨所師說等によりて窺ふべく、家集桂園一枝にその作品を見る事が出来る。

目標として居り、古語を自由に驅使して、その所謂丈夫ぶりの歌をものした。その門に出た加藤宇萬伎、榊取魚彦等は師の萬葉ぶりを傳へたが、村田春海、加藤千蔭等は古今の流麗を喜んだ。その他眞淵と同時に、荷田在滿は新古今集の姿こそ歌の究極の理想であるとして主張し、本居宣長などもほぼさうした考であつた。その他堂上風の系統から出て、ただごと歌を主張した小澤蘆庵の歌は頗る清新味に富んでゐた。

香川景樹 幕末に出て歌人としての自覺に生きた作家は香川景樹であつた。彼は歌は調ぶるものなり、ことわるものにあらずと主張し、思想とその表現との間に自らなる諧調を求め、努めて説明的敘述を避け、直覺的詠歎の態度をとるべきことを強調した。しかもその作は天性の才氣に禍せられて技巧を弄し、新奇を衒ふものも少くないが、親しみ易く入り易い歌風はやがて天下を風靡

して明治にまで及んだ。

歌壇の大勢 多士濟濟たる歌壇は、或は萬葉集に歸れといふ者、或は古今集を宗とし、或は新古今集を標的とする者相ついだすが、眞に詩人的天分に恵まれ、内的燃焼より歌詠する者は甚だ稀であつた。専門歌人ならぬ者の中に、卻つて悠悠として詠歌を樂しむ眞の歌人があり、又幕末志士の詠にはその切切たる衷情を端的に披瀝したものが多かつた。

狂歌 かくて歌の流行はやがて狂歌の流行を促した。享保の頃大阪に鯛屋貞柳が狂歌を以て鳴つてゐたが、安永・天明の交に江戸に唐衣橋洲、四方赤良等が出て、輕妙・洒脫な新調が詠み出された。赤良は本名大田覃、南畝、蜀山人等と號し、學和漢を兼ね、才氣横溢、その作るところ輕妙自在、かの重苦しい上方狂歌の風を脱して、俊敏な江戸つ子の特性を發揮した。その後に出た宿屋飯盛亦卑俗な

越後の僧良寛、越前の井手曙、元義など。

歌に對して狂歌が流行したやうに漢詩に對しても狂詩が行はれ、その作には見るべきものもある。

四方赤良 赤良は文政六年(一八二五)に七十五で歿す。宿屋飯盛

よみぶりの中に潑刺たる才藻を示した。飯盛は又六樹園とも號し、國學者石川雅望の狂名である。*

五、俳諧

俳諧の進展 連歌から俳諧の派生したことは近古終末のことであつたが、近世期に入つて俳諧は長足の進歩をなし、遂に連歌を壓して文學的に生命づけられ、その發句が獨立して一短詩形を形成するに至つて、いよいよ行はれるやうになつたが、ここにも亦一伏一起は數の免れざるところ、幾多興廢の迹が窺はれる。

古風 松永貞徳は歌を民間に弘めるに與つて力あつたことは既に知るところであるが、又連歌道にも遊び、遂に俳諧に於て一家をなすに至つた。連歌の式目に則つて俳諧にも式目を定めたのは貞徳であつたが、その考によれば、俳諧とは俳言で賦した連歌な

松永貞徳

ので、ただ語彙によつてのみその間に區別を立てようとし、その結果駄洒落に墮し、宗鑑守武以上に出ることはなかつた。貞徳一派の俳諧を古風といふ。*

談林風 かくの如き幼稚な駄洒落は俳諧究極の理想であり得ない。元祿復興期の氣運はここにも動いて、新生面打開の運動が起されたのである。西山宗因がこの運動の頭目で、輕妙な滑稽趣味に立脚して趣向を構へ、漢語・俗語を驅使すること古風より一層自由に、巧に人事に取材し、人情を穿つた句をもつること多く、附句も前句の用語の縁に繼るよりも句意をうけることが多い。この一派の俳風を談林風といふ。*

かく古風・談林風時を同じうして行はれたが、世人の好尚は漸く單調な古風を離れて、形式・内容ともに新奇な談林風を追うたが、これもその末流は故らに法格を無視し、謎語のやうな難解な句を作

西山宗因
宗因は肥後八代の加藤氏に仕へてゐたが、主家の覆滅にあひ、京に來り住み、のち大阪に移り、天和二年(三三)歿した。年七十八。

松尾芭蕉

芭蕉の俳諧が談林から轉向の兆を見せたのは天和元年(三三四)の頃であつた。有名な古池や蛙とびこむ水の音の句は貞享三年(三三三)の「春の日」に見える。なほ關西にあつて鬼貫が「まことの外に俳諧なし」と悟つたのも同二年であつたのも一奇である。芭蕉は元祿七年(三三四)に五十一で歿した。

つて喜ぶに至つて、畢竟一時の流行たるに終つてしまつた。

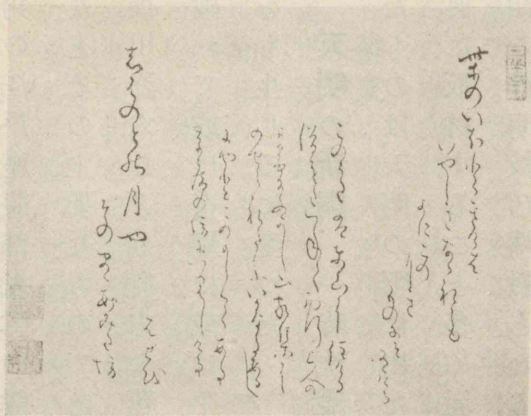
蕉風の開眼 古風の單調に倦み、談林の佶屈に厭いた俳壇の待望は、大阪に小西來山、伊丹に上島鬼貫が出てやや満たされたが、それらはなほ全俳壇を動かすに足らず、松尾芭蕉が出るに及んで、俳諧の革新は成つたのである。芭蕉は伊賀の人、もと古風の俳諧に遊び、ついで談林風に參じて、その餘瀝をすすつてゐたが、中年に及び參禪によつて漸く修練を積んだ心境は、草庵の焼亡にあひ江湖に放浪するに至つて、直接自然を諦視して幽寂の俳境を開かしめた。かくて晩年を旅に送つたその生活はますます俳想を深からしめ、且その新俳風を天下に宣流するに與つて力あらしめた。

蕉風の俳諧 芭蕉一度出でて始めて俳諧の地位高く、詩歌と同一の水準にまで高められた。その俳風を世に蕉風といふ。その極意は風雅にあり、而して風雅とは外物のために心を役せられる



(筆六許) 像 蕉 芭

俳諧七部集



芭蕉筆 阿彌陀坊の句

ことなく、天地自然と同化することであるとせられる。ひたぶるに幽玄な趣を尙び、艶麗華美な中にもなほ閑寂味を忘れず、句の修辭が内容と快い諧調を保つところに蕉風の眞諦がある。*

蕉風の作品は所謂俳諧七部集に主要なものが網羅せられてゐる。

七部集とは冬の日春の日曠野・ひさご・猿蓑・炭俵、及び芭蕉歿後に刊行せられた續猿蓑を併せたものである。

芭蕉歿後の俳壇 芭蕉はその包容力の大きい人格の力を以て門下の俊雋を率ゐたが、一朝その死にあふや、統制は忽ち破れて、羣雄各一方に割據して、それぞれ門戸を張つて同志を集め、わが長じる一

其角と嵐雪とは芭蕉が生前最も重んじてゐた門人で

草庵に桃櫻

あり、門人

に其角・嵐

雪あり。

兩の手に桃と

櫻や草の餅と

などもいつて

ある。去來亦西

三十三ヶ國の俳

諧奉行といは

れ、師の遺風を

忠實に傳へるこ

とを力めた。

與謝蕪村

天明三年(西曆一八一三)歿。年六十八。

端を以て直ちに祖翁の全部の如く思惟し、甚しきに至つては己が立論を權威づけんがために芭蕉の言を偽る者さへ出た。榎本其角の江戸座、服部嵐雪の雪門、各務支考の美濃派、岩田涼菟の伊勢派などその主要なものであつた。その他京にゐた向井去來、近江の森川許六なども有力な蕉門の俳人であつた。かくて俳壇の統一破れて、或は奇矯に、或は平俗に流れ、その間雜俳狂句のやうなものをも生じるに至つた。

天明の新調 一時沈滞の淵に沈んだ俳諧に新しい生命を與へたものは、天明の頃に出た與謝蕪村であつた。蕪村の句は人事古典に取材すること多く、元祿時代の句に比して甚しく華麗で印象頗る鮮明、技巧精緻となると共に幽寂の趣を失つたことは否まれない。蕪村と親交のあつた當時の俳家には炭太祇、大島蓼太、加藤曉臺等があり、門下には高井几董が最も著名である。蕪村等の歿

小林一茶
文政十年(西曆一八二七)歿。年六十五。

横井也右
也右は蕪村と同
年に歿した。年
八十二。

狂文

後、俳諧はその道次第に弘まつて、しかもいよいよ萎靡振はず、文化文政を経て天保に至つて、ますます平俗に墮してしまつたが、中に異彩を放つてゐるのは小林一茶で、陰慘な生涯から生み出された彼の俳諧は一讀人の肺腑をつくものがある。*

俳文 俳人が俳諧手段を文章に應用して作つたものが所謂俳文で、元祿以後大に行はれた。芭蕉の紀行小品はその逸品として知られてゐるが、蕪村等よりやや先輩で名古屋の俳人横井也右は特に俳文を以て有名である。その文は故事成句を驅使すること頗る自在で、圓轉滑脱の妙を極め、元祿の俳文に比してやや品格に乏しく、纖巧に過ぎ、寧ろ狂歌者一流の狂文に近い。その文集鶉衣が蜀山人六樹園によつて珍重せられ、紹介せられたのも故なきでない。附けていふ、狂文の作家としては蜀山人六樹園は大家と稱せられ、前者のよものあか、後者の東なまりは著名である。

誹風柳樽
柳樽は初代川柳の歿するまでに二十四篇を出し、その後相ついで百五十篇に及んだが、代下に從つてその特徴を失つていつた。

川柳 雜俳は元祿以後盛んに行はれたが、近世後期に入り、前句附の句で、前句を離れ獨立しても意味明瞭なものを選んで柄井川柳といふ點者が明和二年に誹風柳樽初篇を出し、爾來續出した。世にこれを川柳といふ。穿ちをかしみを生命とする通俗な人事詩として注目すべき作に富んでゐる。^{*}

六、浮世草子

町人擡頭の時代 元和偃武以來商工業の進歩につれて、生活の程度も高まり、四民太平に酔うて、現世の享樂に歡喜してゐた。所謂三箇の津はとりどりに繁昌し、京は王城、江戸は柳營の地と誇つたが、富の點では大阪に比すべくもない。地の利を占めて諸侯の藏屋敷甍を竝べ、堂島の米相場は全國に影響する。町人文學が起るとすれば、當然この地に起るべき趨勢である。もと元祿時代は

町人擡頭の時代で、一代の富を擁して豪奢を競ふ者東西に相ついだ。而して彼等を律すべき道德律もなほ未だ甚だ緩やかで、風俗も放縱に流れ、黄金は絶對の力を有してゐた。この時代の文學は現實世界の榮華に心酔し、これを謳歌する。浮世草子がそれである。

假名草子 抑も近世初期の小説はなほ純文學の域に到らずして、軍記・倫理・宗教・地理といったやうなものを小説化した所謂假名草子の類で、二三功利的立場を離れての作もあつたが、それは前代を踏襲した内容空疎なものであつた。ただ注目すべきは支那小説の翻譯・翻案の出たことで、伽婢子はその尤なるものであつた。かくの如き幼稚な假名草子の時代につづいて元祿の浮世草子の時代が來るのである。

浮世草子 浮世草子とは現代生活の種種相を如實に描き出し

伽婢子
寛文六年(三三〇)の刊行である。淺井了意の作で、剪燈新話・剪燈餘話等から多く材を得た怪談小説である。

た草子の義と考へて然るべく、元祿時代をその發祥期として、近世前期に京阪地方に行はれた小説を總括していふのである。その内容は頗る廣汎に亙るとはいへ、その中心をなすものは町人生活を題材としたもので、その初作としては靈元天皇の天和二年に井原西鶴作るところの好色一代男が擧げられる。

(Chimpo)

井原西鶴
西鶴は元祿六年
(一三三三)に
浮世の月見す
ごしにけり未
二年
の句を残し、五
十二で歿した。

井原西鶴 西鶴は大阪の人、最初宗因の門に入つて談林の俳壇に活躍してゐたが、一代男の作を出してからは、殆ど全く浮世草子の作者としてつぎつぎに多數の作を残した。西鶴の諸作は當時の世相をありのままに寫して、想化も加へず、複雑な脚色もない。彼は一面歡樂世界に身をおいて耽溺し謳歌すると共に、他面には冷靜・深刻な態度で、愛欲・利欲に狂奔する人間性のあさましさを暴露するところに彼の獨創の才が認められる。多少の作爲と誇張とは免れないが、あるがままに現實を見て、鋭利な觀察を簡潔な筆

八文字屋本
八文字屋本で注
目すべきは其破
がはじめた氣質
物で、ある特殊
な職業又は人倫
の一部を限つて
その氣質を寫し
たものである。

近路行者は都賀
庭鐘といふ大阪
の儒者で、英草
紙なども支那小

に託したところに西鶴の偉大さがある。その文章は俳諧の影響をうけて著しく暗示的であり、文法的破格は隨所に見られるが、傳統に煩はされず、生彩奕奕たるものがある。前記一代男をはじめ、好色五人女・日本永代藏・世間胸算用等はその傑作と稱せられる。
八文字屋本 西鶴の後浮世草子の作相ついでだが、中にやや注意すべきは享保時代の八文字屋本である。京の書肆八文字屋から出版したもので、西鶴の後をうけてほぼ同様な内容をもつてゐるが、その描寫は彼に見るやうな暗示的などころなく、結構も井然として、文章も穩和流暢で、著しく説明的である。作者には安藤自笑、江島其磧等がある。

讀本の先蹤 その後京阪地方に支那小説の翻譯が行はれたが、その影響をうけて近路行者の英草紙・繁夜話等出で、更に上田秋成の兩月物語が出た。秋成は大阪の人、若くして八文字屋本の氣質

説(例へば今古奇觀のやうな)から取材したものがあつた。

物に筆をとつてゐたが、明和五年に本書を著した。この書は、建部綾足の西山物語本朝水滸傳などと共に後の江戸讀本の作者に影響を及ぼした。

七、淨瑠璃と脚本

淨瑠璃の起源 琵琶を伴奏として平家物語を語つたやうに、古の末期には御伽草子風の物語を語ることが流行した。それが淨瑠璃で、その名目は當初の語り物が淨瑠璃姫の草子であつたらだといふ。もと淨瑠璃は樂器の伴奏を伴はなかつたのだが、古の末に新渡の三味線と結んでこれを伴奏樂器とし、更に神事關係の傀儡と握手して操芝居と發展するに及んで、いよいよ流行し、種種の流派を生じ、或は操芝居と共に發達し、或は新興の歌舞伎劇と結び、又或は純歌謠として進んで來た。就中最も注目すべきも

のは大阪に發達した義太夫節であつた。

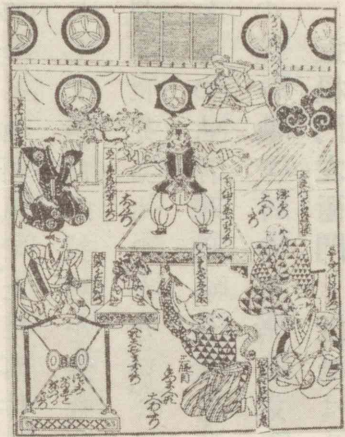
古淨瑠璃 初期の人形淨瑠璃は幼稚な御伽草子風の物語で、脚色單純にして場面の變化に乏しく、時間空間の統一もなく、その推移全く物語風で、ただ事件の顛末を敘述するにとどまり、文章平板にして戲曲的技巧を缺き、對話の語氣呼應せずして稚拙生硬殆ど見るに足るものがない。かうしたものを古淨瑠璃といふ。然るにこの古淨瑠璃の舊套を脱して新生面を開いたのは竹本義太夫の語り物で、その作者は近松門左衛門であつた。

近松門左衛門 近松はその本貫を知らないが、淨瑠璃作者としての生涯は二十四五歳の頃に始まつたやうだが、貞享三年に義太夫のために出世景清を書くまでの約十年間は習作時代ともいふべく、その作るところは古淨瑠璃の摸倣にとどまつて、脚色文章共にいふに足るものはない。出世景清以後の諸作は即ち新淨瑠璃

義太夫は正徳四年(一三三〇)に六十四で歿し、近松は享保九年(一三三六)に七十二で歿した。

で、古淨瑠璃の缺點を除却して、戲曲的統制を保ち、行文亦精彩を帯び、老境に至るに従つて、技倆ますます圓熟の境に入つた。

近松の作品 近松一代の作品は百曲以上、これを分けて史實に素材を假れる時代物と、巷間に材料を得た世話物とする。その中、



淨瑠璃本見返し

世話物は二十三篇を數へるのみで、他は悉く時代物である。今日から見れば、世話物が人情の機微を寫してゐることに多大の感興を覺えるけれども、當時の幼稚な民衆は時代物の變化極りなく、神出鬼沒端倪すべからざるところに興味をつなぎ、移り行く場面の賑かさにいひしれぬ魅惑を感じ、作者も亦これに多大の苦心をしたのであつた。

近松の詞章 近松は藝は實と虚との皮膜の間にあるとの信念

これらの作はみな近松の晩年（正徳元年二言一以後）の作である。

菅原傳授手習鑑・假名手本忠臣蔵等は竹田出雲の傑作である。半二の作には本朝二十四孝・妹背山婦女庭訓等が有名である。

から、理想と現實との完全な調和を主張してゐるが、彼の作はやがてその主張を顯現したものとといふべく、詞章についても惣じて淨瑠璃は人形にかかるを第一とすれば、外の草子と違ひ、文句皆働を肝要とする語り物であるとの用意を怠らなかつたが、あらゆる古典を消化し、雅俗をとり入れて詞藻豊贍、才氣横溢、淨瑠璃文學中稀に見る妙文を成した。その傑作と目せられるものは、時代物に國姓爺合戦、曾我會稽山、世話物に冥途の飛脚、心中天の網鳥、女殺油地獄等がある。*

近松以後の淨瑠璃 近松と同時に紀海音あり、やや後れて竹田出雲、近松半二、竝木宗輔等が輩出したが、脚色に新奇を競ひ、場面の變化のみを以て觀客の心をひかうと力める結果、不知不識の中に全篇の統一を破り、強ひて葛藤を設けるなど、その不自然さが著しく目立つ。而して合作といふことが流行して、その弊ますます甚

福内鬼外は平賀源内の戯名で、神靈矢口渡等の作がある。

しく、歌舞伎の發達につれて操芝居の衰へると共に、淨瑠璃の新作せられるものも少く、漸次衰微を來すに至つた。なほ江戸にも福内鬼外その他の作家があつたが、これ亦特にいふ程のこともない。

歌舞伎狂言 歌舞伎は貴族的な能に對して近世期の初め頃に興つた民衆的な演技で、舞踊と物真似との合體したものである。

慶長八年出雲大社の巫女お國が京に出て興行したのをその濫觴とする。(三六三)かくて幾變遷を経て、物真似狂言盡の名で京阪に、猿若狂言盡の名で江戸に流行するに至つたのは、後光明天皇の承應前後のことである。その發達の初期にあつては俳優も一場の連白に喝采を博すことを目的としてゐたが、續き狂言が起つた後にもその弊を脱し得ず、場當りに重きをおき、作者は俳優の掣肘を受けること多く、脚本として優れたものも残つてゐない。

近世後期の脚本 歌舞伎は寶曆前後に盛んとなり、名優相ついで

鶴屋南北

四谷怪談は文政八年(西八五)の作。

河竹默阿彌

村井長庵は文久二年(五三三)の作。

で出るやうになつて、脚本作者にも優れた者が輩出した。竝木正三、同五瓶などは舞臺技巧にも新機軸を出すことが多かつた。下つて文化、文政時代を代表する作者に鶴屋南北がある。怪談物を得意とし、社會の種種相を巧に寫實して、その間に輕妙な滑稽を挿む所謂實世話と稱する一派を創めた。東海道四谷怪談はその代表的傑作と稱せられる。河竹默阿彌は天保頃から明治にかけて活躍した斯道の天才である。村井長庵、巧破傘などはこの期に屬する傑作で、變化に富んだ趣向も甚しき不自然に陥ることなく、よく人情の機微を穿つ點で容易く他の追隨を容さない。かく脚本は前期に比して著しく發達したとはいへ、なほ俳優本位に書かれ、純粹に劇文學として鑑賞し、評價せられるに至らず、従つて作者の態度にも慊らぬものが多い。

八、江戸の小説

赤本はその表紙の色による名で、後表紙が黒に改つても、やはり赤本とよばれてゐた。青本は明和の頃黄表紙にかはつた名で、よばれてゐた。今は黄表紙の名が普通となつてゐる。金々先生は戀川春町の作。山心學早染草は雷太郎強惡物語。式亭三馬の作。もと草雙紙は紙五枚を一冊とし、上、中、下三冊又は、内容の變化に伴つて五冊と化した。全十冊を二冊とせしめたのである。

赤本と青本 京阪に八文字屋本衰へて、江戸に草雙紙が行はれた。草雙紙はもと繪を主として小兒の玩弄に供した繪雙紙で、その表紙の色から赤本とよばれてゐたが、寶曆の頃萌黄色の表紙を附けるやうになつて青本とよばれ、安永四年金々先生榮華夢が出て大人の讀物となり、滑稽洒落を旨とするに至り、輕快な江戸通人の生活を反映するやうになつたが、寛政二年の心學早染草を期として教訓的に傾き、漸次敵討物、怪談物と内容が變化すると共に、文化三年の雷太郎強惡物語以後、合巻とよばれるやうになつた。(二四六)

洒落本 草雙紙と竝んで江戸に行はれた小説に、洒落本又は崑蕪本とよばれるものがある。遊里の有様を寫した小形の冊子で、全篇殆ど對話のみから成り、極めて忠實にその風俗、言語を寫した

當世虎の巻は田螺金魚の作。

田舎芝居は森羅萬象の作。

ところにて特長がある。寶曆の頃から行はれ始め、安永七年の當世虎の巻は洒落を離れ、多少の脚色を加へて後の人情本を誘ふ契機となり、天明七年の田舎芝居は遊里を離れて滑稽を旨とし、後の滑稽本の鼻祖となつた。(二四七)

江戸讀本 青本は漸次その趣向の複雑となると共に合巻となつたが、なほ長篇の讀物には不便であつた。而して、寛政の頃から讀本が行はれ、文化、文政にその全盛を極めた。讀本とは挿繪の少い半紙形の小説をいふ。多く時代を近古時代に取り、忠孝の觀念、武士道の精神を表現せんとし、勸善懲惡の意を寓するに努めたので、その結果作爲に過ぎてわざとらしさに墮したものが多いが、これ畢竟時代の進運につれて作家にも教養ある者出て、舊に婦女童蒙の讀物たるのみに慊らず、武士階級を對象として著作するが故であつた。かくて青本、洒落本等の寫實的傾向は著しく浪漫的と

式亭三馬
藤栗毛は享和二年(一八一〇)文化六年(一八二五)浮世風呂は文化六年(一八二五)一九年(一八三〇)浮世床は文化八・九年(一八三三・三四年)に成る。

爲永春水

梅曆の出たのは天保三年(一八三二)である。

中藤栗毛、式亭三馬の浮世風呂、浮世床などが傑作と稱せられる。一は地方旅行者の失敗に取材し、他は都會人の日常を素材とし、彼には統一あれど單調に、此は變化に富めど斷片的である。一九は創意に乏しく、その滑稽はともすれば皮相に流れ、三馬は觀察力や鋭敏で、多少の諷刺を帯びてゐる。*

人情本 人情本は江戸町人の戀愛描寫を主としたもので、作者としては天保の頃に爲永春水があつたが、その作は讀本とちがつて日常生活の平凡な事件を寫し、脚色といふべき程のもの殆どなく、ただ現代の寫實らしく見える點が靡爛しきつた幕末の好尚に投合して、一時の人氣を博したにすぎない。春色梅曆がその代表作である。

第五章 近代の文學

(東京時代)

一、序 說

近代 明治天皇の御代から大正天皇の御代に互る、約六十年をここに近代とよぶ。明治元年江戸を改めて東京といひ、同二年車駕東幸し給うてより、わが國の首都として、新時代の文化はこの地を中心として展開するが故に、この時代はまた東京時代ともよばれる。七百年の長きに互る武家の政治は倒壊して、再び王政の古に復り、國運日に月に恢弘して、短日月の間に文化の進展目ざましきものあり、これと相應じて文學も全くその面目を一新するに至つた。

四民平等 明治天皇即位し給ふや、明治元年親しく天神地祇を祭つて五條の御誓文を宣り給ひ、開國進取の國是を定め給うたが、(二五二八) ついで同二年封建時代の階級を撤去して、華士族平民の制を定め、(二五二九) 四民をして殆ど平等の權利義務を享有せしめ給うた。かくて從來社會の下積みとなつてゐた平民階級は名實共に社會の上層に擡頭し來り、各方面に活躍するに至り、階級的に畸形的發達をして來た文學も、ここに至つて完全に國民の共有となつて圓滿な進展を見るやうになつた。

教育の普及 なほ、明治新政府は教育のことに留意し、舊幕時代の諸學校を繼承して大學校を設置したが、更に明治四年文部省を新設して、(二五三〇) 文教を統一し、同五年學制を頒布して義務教育の方針を確立するや、いかなる僻遠の地といへども學校の設立を見ない所なく、教育は非常な勢を以て全國に普及するに至つた。 ついで中

慶應義塾は安政五年(二五〇)福澤諭吉の創立にかかり、東京専門学校(今の早稲田大學の前身)は明治十五年(三〇)大隈重信の創立するところである。

等教育からひいて専門教育・大學教育まで、逐年盛大に赴くと共に、慶應義塾・東京専門学校など私學も相ついで勃興し、國民教養の度の高まつたこと前古比なきに至つた。

外國との交渉 かく教育が普及し、教養の度の高まるに至つて、邦人の海外に赴く者、外人の本邦に來る者、年を逐うて多く、加之交通・通信の諸機關の發達整備はますます世界の距離を縮少し、従つて彼我の交渉は各方面とも緊密の度を加へ、文藝のこと亦前代までのやうな孤立状態を保つことが出來ず、海外思潮の影響を受けること甚大となり、この傾向は明治から大正となるに至つて、いよいよ深厚となつて來た。

近代文學の推移 明治初年は歐米文物の輸入に忙しく、これが取捨選擇をする暇もなく、ためにわが國古來の美點・長所を顧みる餘裕さへなく、極端な歐化主義的思潮が上下を風靡した。この時

代には、國民は政治に狂奔して文學など殆ど顧みる者もなく、政治小説の類が多少出たのみであつた。明治二十年前後にこの傾向は頂點に達して、やがてその反動として國粹保存主義が擡頭したが、明治二十二年の憲法發布について二十三年の教育勅語の煥發(二五四七)によつて國民の歸趨が示され、歐米文化に對しても著しく批判的となり、古典の檢討新に起ると共に、外國文學の紹介せられるものも多く、兩兩相俟つて新文學の勃興を見たが、この時代の主張は蓋し浪漫主義的思潮であつた。かくて明治三十年代の中葉以後から、歐米の自然主義的思潮が輸入せられて、現實諦觀の傾向が濃厚となり、文學も一時その思潮の下に動いてゐたが、やがて大正時代に入つてそれに代つて、人道主義、新浪漫主義の思潮が擡頭して來たのである。

口語文體の確立

なほ近代の文學を通觀して、特に注意すべき

は文體に於ける革新である。既に中古時代から起つたと考へられる言文の乖離は代を追うて甚しく、近古から近世にかけて、時に口語で綴られた作品が絶無といふではないが、口語と文章との間には大きな溝が出来たのである。それは作者にとつて思想發表の上に、かなりな苦痛を感じないではゐられなかつた。この溝渠を踰えて言文の一致を圖つた先覺者は山田美妙と長谷川四迷との二家で、彼等はまづこれをその作品の上に試みたのである。これは明治二十年頃のこと(二五四七)で、全く兩者各別の試みであつたことかから見て、かうした機運が暗黙の中に動いてゐたことを知る。かくて明治二十七年尾崎紅葉が多情多恨の作に口語體を用ひるに及んで、新文體はほぼ完成せられたと見てよかるべく、その後漸次從來の文語體は影を潛めるに至つた。口語文體の確立は思想表現に著しく安易さを與へ、文運の進展に貢獻すること多大であつた。

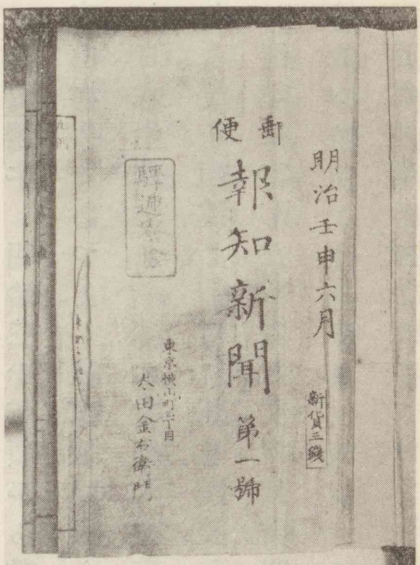
二、評論文學

歐化主義思想 鎖國の狀態から解放せられるや、西洋の文物は決河の勢を以て入り來り、一時極端な歐化主義が上下に瀰漫したことは前節に之を述べた。この時に當つて福澤諭吉の功利主義、中江篤介等の自由民權主義、新島襄の基督教主義などは新時代の指導精神としてその主なものであつた。殊に福澤諭吉は平明暢達の文を以て、民衆に新文明を注入したことに於て忘れることの出来ない功績があり、國語國字についても時代に先行する大識見を有してゐた。

新聞と雜誌 近代文學の發展について忘れてならぬものは新聞雜誌の刊行である。その濫觴は近世末期にこれを認め得るが、異常な發達をとげたのは近代に入つてからで、小説なども多くこ

福澤諭吉
諭吉は明治三十四年(癸卯)歿した。年六十八。

本邦新聞の濫觴は文久二年(五三)にバタビヤ和蘭政廳の機關紙を翻譯發行した官板バタビヤ新聞にあるといはれる。



號一第聞新報

れを發表機關としてゐるが、從來隨筆等の名に於て見られて來た評論文學は多くこれを通じて發表せられるやうになつた。明治初期の評論文學者として名ある者に成島柳北・福地櫻痴等あり、更に二十年代から以後にかけて陸羯南・朝比奈知泉・池邊三山・徳富蘇峯・三宅雪嶺等があり、皆新聞をその壇場として活躍した。

初期の文學評論 明治二十年代に入つては文學雜誌の創刊せられるもの相踵ぎ、従つて文學評論亦多く發表せられたが、著者は皆新教育を受けた新進で、泰西の文學論に影響せられるところが多かつた。早稻田文學に據つた坪内逍遙、しがらみ草紙に據つた

坪内逍遙

森鷗外
北村透谷

森鷗外、文學界を舞臺とせる北村透谷などはその主な者であつた。逍遙は明治十八年に小説神髓を著して、近世小説家者流の功利的態度を排撃して寫實主義を強調したが、新に早稻田文學を主宰して、理想主義を主張する鷗外と兩誌上に相見えて筆鋒を交へた論戰は一時の壯觀であつた。又熱情を以て文學の革新を唱へた透谷の評論は、多感な青年に感銘を與へることが深かつた。*

高山樗牛

樗牛は明治三十五年(癸卯)に三十五で歿した。

高山樗牛 明治三十年頃から數年の論壇に雄視してゐた者は高山樗牛であつた。雑誌太陽によつて堂堂の筆陣を張つたが、晩年日本主義から一轉して個人主義の立脚地に立つて、ニイチエの超人説を祖述し、清盛・日蓮を讚美して個人の威力を力説した。その情熱に富んだ華麗な文章は當時の青年の信望をその一身に鍾めた。*

自然主義

歐洲に於て、十八世紀末から十九世紀にかけて發達

島村抱月
抱月は大正七年(一九一八)四十八で歿す。

した自然科学の影響をうけて、空想的的人生觀、抽象的哲學思想は、實證的・具體的な科學思想に壓倒せられ、その精神及び方法を文學の上にも應用しようとする一派が生じた。佛蘭西のゾラ・モーパッサン等がそれであつたが、その影響が遠く海をこえて本邦に及んだのは明治三十四・三十五年以後のことだ、眞の現實に即して人生の眞相を描寫しようとするので、自然主義とよばれる。復活後の早稻田文學はこの主義を宣明するに與つて力があり、島村抱月はこの一派の代表者で、その態度は穩健冷靜、その文章は條理井然たるものがあつた。*

なほ自然主義以後幾變轉せる思潮界に、評論の筆をとる人はますます多く、明治・大正の評論文學は頗る花やかであつた。

三、小説

明治初年の小説 明治の初年は世態安定せず、混亂して文學はまだ起る餘裕もなく、前代戯作者の殘存者によつて、或は單行本に、或は新に起つた新聞の讀物に餘喘を保つてゐたが、彼等の中、假名垣魯文は、皮相ながら新時代の文化を攝取して、儕輩の間に確乎たる地歩を占めた。明治十年の亂後、世は政治に熱狂し、自由民權の思想上下に瀰漫し、この主張を通俗的に示さうとして書かれた小説が、翻譯に創作に相ついで出たが、勿論文學としてさして價値あるものはない。

逍遙と四迷 坪内逍遙はその小説神髓の主張を如實に示すために、明治十八年一讀三嘆當世書生氣質を出したが、これはなほ戯作的氣分を多分に有してゐたが、同二十年に出た長谷川四迷の浮雲は逍(二五四五)

當世書生氣質

浮雲

遙の主張を實現した作と稱せられ、心理描寫は精細を極め、客觀描寫の中によく人生の意義を暗示するものあり、新文學の黎明期に於ける傑作である。しかも從來の文體を捨てて全然口語體を用ひたことも、この作の効果をあげるに與つて力があつた。*

紅葉と露伴 明治二十年代は尾崎紅葉と幸田露伴との對立時代である。共に元祿文學特に西鶴の研究から出發し、紅葉はその才藻を得て、これに巧緻な筆致を加へたに對し、露伴はその氣骨を得て、これに幽遠な識見を加へたものの如く、彼は女性の情を寫し、此は男性の意氣を描いて、共にほほ成功に近い。伽羅枕多情多恨、金色夜叉等は紅葉の、風流佛五重塔等は露伴の傑作と稱せられる。この間に介在して、若くして死んだ樋口一葉は、にぎり江十三夜、たけくらべなど、短篇の名作を残したが、精細な觀察と心理描寫とに女性獨特の手腕を示してゐる。要するにこの時代の諸作は、小説

尾崎紅葉
幸田露伴

紅葉を中心として集つた硯友社
は一時文壇に重
きをなした。

紅葉は明治三十
六年(三五五)に
三十七で歿し、
露伴はその頃か
ら漸く創作に
遠ざかつていつ
た。

樋口一葉

一葉は明治二十
九年(三五〇)に二
十五で歿した。

逍遙の小説神髓は寫實主義を鼓吹した論述であつた。

も美術の一種だから、道德の方便とせらるべきでなく、摸擬を以てその全體の根據となし、人情を摸擬し、世態を摸擬し、ひたすら摸擬するところのものをば眞に逼らしめんと力むべきを説いた逍遙の論に刺戟せられて發達したもので、その根柢が寫實にあつたことは否まれないが、その寫實がなほ皮相にとどまつて人生の内面に徹することが出来なかつたかの憾がある。

翻譯文學 小説作家の上に大きな影響を及ぼしたのは海外文

藝の翻譯であつたが、この方面で森鷗外・長谷川四迷・内田魯庵・上田敏等の業績は大きかつた。特に鷗外の美奈和集その他は雅醇な國文を以て泰西文學を移植したもので、その後進を裨益したこと尠少ではなかつた。

自然主義の作家 佛蘭西・露西亞等の文學に影響せられて起つたわが自然主義文學の萌芽は明治三十四五年の頃にあつたが、三

長谷川四迷

森鷗外

四迷の露西亞文學、鷗外の獨逸文學の翻譯、魯庵・敏の多方面に互る紹介は著しくわが作家を啓發した。

國木田獨歩

獨歩の死は明治四十一年(癸卯)である。年三十八。

田山花袋
島崎藤村

夏目漱石

十年代の末から四十年代にかけて、文壇は自然主義全盛の形勢を呈した。國木田獨歩は實にその先蹤をなす作家で、既に明治三十四年頃から、この傾向の作を出してゐたが、認められるに至らなかつたが、晩年に及んで漸くその聲價が定つた。獨歩につぐ作家は田山花袋・島崎藤村なるべく、これら三家の努力は、早稻田文學一派の評論家島村抱月等の主張と相俟つて、遂に文壇の主潮となるに至つた。獨歩の獨歩集・運命等の短篇集、花袋の生妻・縁の長篇三作、藤村の春家等はその代表的作品である。^(三五六)その外徳田秋聲・正宗白鳥・岩野泡鳴等も有力な作家であつた。

餘裕派 かうした文壇の主潮を外にして、餘裕派とよばれる夏目漱石等がある。その作品は、正岡子規が嘗て主張した寫生文に基調をおき、俳諧趣味から出發して、幾分の餘裕を置いて人生を靜觀し、解釋しようとするが故に、人生そのものに直面する自然派の

漱石は明治三十八年(癸丑)に吾輩は猫であるの筆をとつてから創作の方に進出した。その歿したのは大正五年(壬午)であつた。年五十。

白樺の創刊は明治四十三年(壬午)である。

作品に見える陰慘な氣分はなく、頗る明朗である。その初期の作
なる吾輩は猫であるのもつ味は、晩年の作なる明暗に至るまで失
はれない。草枕は作者が畫家の口をかりてその心境を語る點で
重要な作である。^{*} 俳人である高濱虚子も亦小説をものしてゐる
が、漱石と同じく餘裕派を以て目せられてゐる。

自然主義以後 人生をひたすら科學的に見ようとする自然主
義的態度はやがて反動をよんで、ここに人道主義新浪漫主義が生
れた。肉の蔭に靈を見、暗黒の中に潛む光明を看取しようとする
一派で、大正時代に起つた文學運動は即ちかうした方へ動いてゐ
る。武者小路實篤が白樺によつて、その同人と共に歩んだ道であ
る。かうしてゐる中に世界大戰を経て、最近の思想的動亂の中
へ、すべてが捲きこまれてゆくのである。

四、歌と俳句

始めて歌道御用掛のおかれたのは明治四年(壬午)で、御歌所の設けられたのは明治二十一年(壬午)であつた。

落合直文
直文は明治三十六年(壬午)に歿した。年四十三。

御歌所 明治天皇深く大御心を歌道によせさせ給ひ、宮中に歌道御用掛をおかせ給ひ、後御歌所と改めさせ給うたが、新年の歌御會始の御儀を再興して民間の詠進を許し給ふや、歌は興隆の機運にむかつたのである。天皇の御製は申すも畏し、御歌所の歌風は桂園の末流を汲んで平板な格調に陳腐な内容をもるに過ぎなかつたが、明治二十年代に至つて、國民的自覺は古典の研究を促し、更に清新な外國文學の影響をうけて、歌壇にも黎明の曙光がさしそめたのである。

歌壇の新聲 歌壇の新聲は、まづ落合直文によつて揚げられた。直文は明治二十六年淺香社を結んだが、その題材表現共に舊態を脱した清新な歌風は、青年俊英の士を多く門下に集め、歌壇に獨特

佐佐木信綱

正岡子規

子規は明治三十五年(三三)に歿した。年三十六。

與謝野寛は初め鐵幹と號してゐた。

與謝野晶子

の地位を占めて、新短歌の第一歩をふみ出した。與謝野寛尾上柴舟金子薫園等はその門に出た。また同時に出た佐佐木信綱は家學をうけ、舊來の諸流の上に新短歌を築いた。その主宰する雑誌心の花は現に歌壇に大きな勢力を有してゐる。正岡子規亦この二家と同時に、俳壇革新の餘勢を驅つて歌壇革新の運動を起し、實感・實情に即した萬葉集の歌風こそ歌の進むべき本來の道なるべきを主張したが、その流風は伊藤左千夫・長塚節たかし・島木赤彦等を經て、現に雜誌アララギに繼承せられてゐる。

新詩社 落合直文の門に出た與謝野寛は子規と並んで短歌の革新に精進した一人である。その主宰せる新詩社は浪漫思潮に棹さして目ざましい活動をつづけ、雑誌明星は當時の一部青年の渴仰の的となつた。與謝野晶子は新詩社の生んだ歌人で、その奔放な情熱は豊富な空想を驅り、大膽にして自由な修辭は舊來の傳

石川啄木
明治四十五年(二
三)二十七歳で
歿した。

統を破つて、これに追隨しようとする者が相ついだ。新詩社の生んだ歌人の多い中に、最も異色ある者は石川啄木で、その生活に即した歌は著しく社會性を帯び、その思想と表現と相俟つて全然舊套を脱した新歌風を樹立した。^{*}

俳壇革新 翻つて俳壇を見るに、明治初年に瀟漫せる天保の俗調は、二十年代に正岡子規の出るに及んで、漸く革新の緒についた。子規は古句を分類して、俳諧の史的研究を試みつつある中に、自ら發明するところあり、後蕪村句集を見るに及んで、その客觀的態度に共鳴し、新聞日本雜誌ほととぎすを本據として縦論横議、偶像化せられた芭蕉の價值を冷靜に再吟味し、又蕪村を仔細に解剖研究し、その著俳諧大要に持論を要約して世に問ひ、以て明治の俳壇に新旗幟を樹立したのである。

俳句 俳諧の連句から離れて、發句のみが獨立に詠まれる傾向

は前代からのことであり、時代の進むと共にその趨勢がますます顯著になつたが、近代に至つて連句はいよいよ閑卻せられ、子規は發句といふ語を捨てて俳句といふ語を取つたが、それ以後この稱呼が普通に行はれることとなり、俳諧及び發句といふ名目は次第に耳遠くなるに至つた。

正岡子規 子規はその才ゆくとして可ならざるなく、病臥多年しかも著作は最近編まれた全集二十卷に溢れてゐる。その句風は當初は客觀寫生を唱道し、蕪村に私淑してゐたが、晩年に平淡な俳風に歸着した。*

子規歿後 子規門には多士濟濟たりし中に、彼が生前から最も望を囑してゐたのは高濱虚子と河東碧梧桐とであつた。この二人は子規歿後漸次その主張と句風とに乖離を來し、虚子は飽くまで季題に即し、定型を固持する中に、碧梧桐はさうした傳統から離

高濱虚子
河東碧梧桐

碧梧桐が新傾向

を唱道し始めたのは大正の初年頃からである。

内藤鳴雪

れて、自由な詩形と表現とを採る所謂新傾向運動を起すに至つたが、それは大正時代に入つてのことである。この二者の間に交つて子規生前からその敬愛を受け、その歿後も独自の俳境を守つて後進の指導に力めた内藤鳴雪も亦明治俳壇に忘れがたき存在である。*

かくて大正以後の俳壇は正に俳句の傳統を尊重する者と、その殻を破つて新しい詩形と表現とを庶幾する者との二派に分れて現代に至つてゐるのである。

五、新詩

創始時代 短歌と俳句とは古くからあつた詩形であるが、西洋の詩の影響をうけて明治十五年外山、山等の新體詩抄が出て、ここに近代の新詩が生れ出たのである。(二五四) その形式は多く七五調の

新體詩抄

於母影

重疊で、雅俗語を混用して表現も頗る粗笨、内容は平易通俗を旨として單調、甚しく詩質に乏しいものではあつたが、短歌・俳句に盛り難い思想、感情を自由に表現し得る詩形が出現したことは注目すべきである。明治二十二年森鷗外等新聲社同人が雑誌國民之友(二五四九)にのせた譯詩集於母影は藝術味豊かな内容を盛るに清新にして自由な格調と表現とを以てして、俄然詩壇の面目を一新するに至つた。

北村透谷

透谷の諸作はその歿後藤村によつて透谷全集一冊に纏められた。

文學界の詩人 かくて明治二十六年雑誌文學界創刊せられ、評論創作・翻譯各方面に清新味を發揮し、ために詩壇も頓に活氣を呈して來た。この一羣の中心をなしてゐた者は北村透谷で、熱烈な感情と富贍な空想とを以て長篇劇詩蓬萊曲や、その他の斷篇若干を残して、未完成の中に翌二十七年死んだ。(二五五四)この頃幾多の詩人が相前後して出で、その努力によつて明治三十年代には新興の詩は

島崎藤村

藤村の詩は明治三十七年(二五四)に藤村詩集一冊に纏められた。

他の諸種の文學と比肩するに足るまでの進展を見るに至り、詩形も格調もその創始期に比して複雑となり、詩想も抒情的なもの、敘事的なもの、冥想的なものなど、多種多様となつて來た。

藤村と晚翠 これらの詩人中、島崎藤村は明治三十年詩集若菜(二五五七)

集を出して、青春の感傷を雅醇な格調を以て歌ひ、純眞清高な詩風は斯壇に一期を劃した。爾後一葉舟・夏草を経て落梅集に及んで、情熱は漸く沈靜し、感傷的傾向を脱して、現實に直面して生活を歌ふやうになり、遂に詩を捨てて小説に趨いたのであつた。藤村等の感傷的女性的詩風に嫌らず、豪快にして男性的な詩を創造しようとした者は土井晚翠(つちい)であつた。彼は西詩の高遠な詩想と、漢詩の遒勁な格調とを併せて邦詩に移植しようとして試みたものの如く、天地有情の著に一代の聲望を集めた。*

土井晚翠

天地有情の出たのは明治三十二年(二五五)で、爾後晚鐘・東海游子吟等の諸集が公にせられた。

象徴詩運動 この間にあつて文學界時代からひきつづき西詩

上田敏

薄田泣菫

蒲原有明

の紹介につとめて、わが詩壇の進展に寄與するところ多かつた上田敏等の努力も忘れることは出来ぬ。敏の譯詩集海潮音は詩壇に象徴詩勃興の機運を將來するに與つて力あつたやうで、薄田泣菫、蒲原有明等の諸家はこの機運に乗じて多數の作品を發表した。近代人の繊細な感情を象徴的に表現して、從來の詩に見られなかつた境地を開拓した點に於て、泣菫の白羊宮、有明の春鳥集等は注目せられる。^{*}

口語詩自由詩 かくて自然主義的傾向は詩壇にも浸潤し來り、散文に於て口語文がその主體となつたやうに、詩にも亦口語を用ひるべきことが主張せられて口語詩が起り、七五五七その他の聲律も廢棄すべしとて、自由詩の論が起つた。既に詩の外形について、かうした運動が漸次有力となつて來ると共に、内容も亦頗る多様となり、民謠童謠風の詩も盛んに作られるやうになつて來た。

六、戲 曲

演劇改良運動 劇文學は近代に入つて長足の進歩をなした。

前代の作家河竹默阿彌はその技巧ますます沍えて、島衛（もり）月白浪盲長屋梅加賀鳶等の傑作をものしたが、依然勸懲主義に執し、ともすれば猥雜、殘忍に流れ、作爲に陥る宿弊を免れなかつた。かくて人物脚色より衣裳、臺詞に至るまで、高尚上品にして且寫實的ならしめようとする演劇改良運動起り、福地櫻痴、依田百川等の脚本も出たが、事實の表面に拘泥し皮相の寫實に捉はれて人情性格の描寫に疎く、新時代の脚本としては慊らぬものであつた。

逍遙の史劇 嘗て寫實小説を提唱した坪内逍遙は、明治二十六年から翌年に互つて早稲田文學誌上で史劇の本質を論じ、從來の諸作の缺點を難じて、性格劇を鼓吹し、夢幻劇の長所を説きつつ新

河竹默阿彌
默阿彌の歿年は明治二十六年(一八九五)である。その年七十八。その作を集めて、默阿彌全集がある。

坪内逍遙

桐一葉(明治二十七年(二五四))は三十年(二五五)の香山鳥城落月の前篇とも見るべく、牧の方(明治二十九年(二五五))は後に出た名残の星月夜(大正六年(二五七))・義時の最後(同七年(二五八))と共に三部作をなすものである。

逍遙のシエクスピヤ研究の成果は沙翁全集の完譯となつて現れた。

森鷗外

逍遙選集・鷗外全集にこの二家の作は殆ど網羅せられてゐる。

史劇の出現を望み、その主張を具體化して、桐一葉牧の方を相ついで発表した。この二作は共に史上の大事事件に取材して、性格と境遇と相倚つて當然の解決に導かれてゆく徑路を示した性格悲劇である。かうして劇壇に新時代が到來し、舊來の劇を歌舞伎と稱し、新興のものを單に劇と呼び、脚本はまた戯曲ともいはれるやうになつた。

翻譯劇 新戯曲の出現も、小説と同じく洋劇の示唆によるものが多い。逍遙の新劇運動はシエクスピヤの研究にその暗示を得たものなるべく、後年その全作品の翻譯を完成した彼は、既に明治十六年にその史劇シーザーを翻譯してゐる。森鷗外も亦明治二十二年に獨逸巨匠の作を翻譯して、幼稚なわが戯曲に強い刺戟を與へた。かくて西洋の古典劇のみならず、歐洲の近代劇も鷗外をはじめ島村抱月・中村吉藏・小山内薫等によつて多數翻譯せられた

が、創作劇としては、なほ見るに足るべき作に乏しかつた。

逍遙が新樂劇論と新曲浦島とを發表したのは明治三十七年(二五八)である。

樂劇・社會劇

かかかる間に、さきに史劇に新機軸を出した坪内逍遙は舞踊劇の特長を發展せしむべく新樂劇を提唱して、新曲浦島・新曲赫哉姫等をつぎつぎに發表した。しかも自然主義の潮流は劇壇にも波及して、あるがままの人生を戯曲に表現しようとする要求が強くなり、史劇に對して社會劇要望の聲が高まり、イブセン・ズーデルマン・チエホフ等の諸作は翻譯せられて、大きな影響を及ぼし、それに刺戟を得て、眞山青果の第一人者、中村吉藏の牧師の家等が書かれた。

一幕物

社會劇の發生につれて、從來歌舞伎劇の慣例は全然無視せられ、科白も現代語を用ひ、題材の核心を掲げて、短時間に演出し得るやうな一幕物が流行した。なほ從來脚本は必ず演出を豫期して書かれるのが常であつたが、この頃になつては必ずしも然

眞山青果
中村吉藏

これらの戯曲の發表は明治四十年(二五七)以後のことである。

らず、思想表現の手段として戯曲的手法によるものも多くなつて來た。

結語 上來國文學發達の跡を辿つて、上古から、近代に至つた。顧みれば随分複雑な徑路を示した三千年の文學の歴史である。上古に支那印度の思想が入つてから、われらの祖先はよく外來の思想をわが國民思想に融和せしめることを忘れなかつた。方今世界大戰後の經濟的變調は本邦にも波及して、大正の末年から思想界も未曾有の混亂動搖の渦中におかれた。この時に際會して、われ等は光輝ある傳統に導かれつつ、祖先がなしたやうに嚴正な批判を以て彼の精を取り粹を汲んで、新文學を樹立し、昭和の國文學をして世界藝術史上の一大光彩たらしめなければならぬ。

新制國文學史終

附 載 參 照 原 文

〔 〕内の數字は照應の本文頁を示す

素戔鳴尊の御作と傳へてゐる。

豊玉姫が鶴草草葺不合命に奉られた歌。

神武天皇が登美毘古を撃たうとし給うた時の御歌。

八十梟帥を亡ぼした時皇軍の士の歌つた歌。二首。

日本武尊東征から歸つて、よみ給うた御歌。

〔一〇〕 やくもたついづも八重垣つまごみに八重垣つくるそのやへ垣を (古事記、上卷)

あか玉は緒さへひかれど白たまの君がよそひしたふとくありけり (古事記、上卷)

みつみつし久米の子が粟生には誰一もとそねがもとそねめつなぎてうちてしやまむ (古事記、中卷)

今はよ今はよああしやを今だにも吾子よ今だにも吾子よ (古事記、中卷)

えみしを一人もな人人はいへども手向ひもせず (日本書紀、卷三)

尾張にただに向へる一つ松あはれ一つ松ひとありせば衣きせましを太刀はけましを (日本書紀、卷七)

出雲國造神賀詞の一節。これは國造が新任せられた時、朝廷に参向して奏聞したものである。

〔一三〕 八十日日はあれども、今日の生日の足日に出雲國の國造姓名、恐み恐みも申し賜はく、かけまくも畏き現つ御神と、大八島國知しめす天皇命の大御世を、手長の大御世と齋ふとして、出雲國の青垣山の内に、下つ石根に宮柱太知り立て、高天原に千木高知り坐す伊射那岐の日眞名子、加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命、國作り坐しし大穴持命二柱の神を始めて、百八十六社に坐す皇神等を、某甲が弱肩に太禰とりかけて、いつ幣の緒結び、天のみかげと冠りて、いつの眞屋に麤草をいつの席と薙り敷きて、齋瓮黒まし、天の厩わにいみ籠りて、しづ宮に忌み鎮め仕へまつりて、朝日の豊榮

登りに、いはひのかへりごとの神賀の吉詞奏し賜はくと奏す。(延喜式、卷第八)

天地初發。古事記冒頭の文。原文の體裁を示す。

〔三〇〕天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、訓高下天云次高御產巢日神、次神御產巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。

次國稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、琉字以上如葦牙因萌騰之物而、成神者、字麻志阿斯訶備比古遲神、此神名次天之常立神。訓常云登許此二柱神亦獨神成坐而、隱身也。(古事記、上卷)

素戔鳴尊高天原に至り給ふ段。古事記の訓法は宣長の古訓古事記により、諸説を參酌す。

故こゝに速須佐之男命の言し給はく、「然らば天照大御神に請して罷りなむ」とまをし給ひて、乃ち天に參上ります時に、山川悉に動み、國土みな震りき。こゝに天照大御神聞き驚かして、「あがなせの命の上り來ます由は、必ずうるはしき心ならじ。あが國を奪はむと

思ほすにこそ」と詔り給ひて、即ち御髮を解き御みづらに纏かして、左右の御みづらにも御鬘にも、左右の御手にも、みな八尺の勾瓊の五百つのみすまるの珠を纏きもたして、背には千入の鞆を負ひ、五百入の鞆をつけ、また臂にはいつのたか鞆をとり佩ばして、弓腹ふり立てて、堅庭は向股に蹈みなづみ、沫雪なす蹶ゑはららかに、いつの男建びふみ建びて待ち問ひ給はく、「何とかも上り來ませる」と問ひ給ひき。ここに速須佐之男命の答白し給はく、「あは邪き心なし。ただ大御神の命もちて、あが哭きいさちることを問ひ給ひし故に白しつらく、あは妣の國にまからむと思ひて哭くとまをししかば、大御神、汝はこの國にはなすみそと詔り給ひて、神やらひやらひ給ふ故に、まかりなむとする狀をまをさむと思ひて參上りつれ。けしき心なし」とま

をし給へば、天照大御神「然らば汝の心の清明きことはいかにして知らまし」と詔り給ひき。こゝに速須佐之男命「おのおのもうけひてみ子生まむ」と答白し給ひき。(古事記、上卷)

輕皇子の安騎野に宿り給うた時によんだ歌と反歌四首とである。(萬葉集、卷一)

〔三六〕やすみしし吾大王 高照す日の御子 神ながら神さびせすと 太敷かす京をおきて 隱口の泊瀬の山は 眞木立つ荒山道を 石が根の楮枝おしなべ 坂鳥の朝こえまして 玉限る夕さり來れば み雪降る阿騎の大野に 旗薄しぬをおしなべ 草枕旅宿りせず古思ひて 阿騎の野に宿る旅人うち靡さいもぬらめやも 古思ふに

眞草刈る荒野にはあれど黄葉のすぎにし君が形見とぞ來し 東の野にかぎろひの立つ見えて顧みすれば

紀伊の行幸に陪してよんだ歌の反歌。(同卷六)

吉野でよんだ歌の反歌。(同卷六)

春の雜の歌。(同卷八)

罷宴歌。(同卷三)

子等を思ふ歌と、その反歌。(同卷五)

月傾きぬ 日竝の皇子の尊の馬なめて御獵立たしし時は 來むかふ 入麻呂

わかぬ浦に潮みちくれば瀧をなみ葦邊をさして たづなきわたる 赤人

み吉野の象山のまの木末にはここだもさわぐ 鳥の聲かも

ぬば玉の夜の更けゆけばひさき生ふる清き河原に千鳥しば鳴く

足引の山にも野にも御獵人さつ矢たばさみ亂れたり見ゆ

春の野に葦つみにと來し吾ぞ野を懐しみ一夜ねにける

憶良等は今は罷らむ子哭くらむその子の母も 吾を待つらむぞ 憶良

瓜食めば子等思ほゆ 粟はめばましてしぬばゆ いくより來りしものぞ 眼交にもとな

賀陸奥國出金銀歌の反歌。(同卷十八)

小早の折に雨雲の氣を見てよんだ歌の反歌。(同卷十八)

雨の落れるを賀んだ歌。(同卷十八)

奉試賦得隴頭秋月明。(經國集卷十三)

後夜聞佛法僧鳥。(性靈集)

惟喬親王を小野に訪ひ奉つた時の歌。(古今集十八)

かかりて安眠しなさぬ

白銀も金も玉もなにせむにまされる寶子にしかめやも

丈夫のこころ思ほゆ大君の御言のさきを聞けばかしこみ 家持

この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降らぬか心足らひに

わがほりし雨は降り來ぬかくしあらば言舉せずとも年はさかえむ

〔三五〕反覆單于性。邊城未解兵。征夫朝蓐食。戎馬曉寒鳴。帶水城門冷。添風角韶清。隴頭一孤月。萬物影云生。色滿都護道。光流欣飛營。

邊氣候侵寇。應聲此夜明。 肇

閑林獨坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。一鳥有聲人有心。聲心雲水俱了了。 空海

〔四〕わすれては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけ

母から老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君哉とあつた返歌。(同十七)

病の重くなつた時。(同十六)

五節の舞姫を見てよめる。(同十七)

雲林院の皇子が山の舍利會に詣でて歸らうとなすつた時の歌。(同八)

剃髮した時の歌。(後撰集十七)

題しらず。(古今集二)

題しらず。(同十二)

文屋康秀が一所に三河へ行かうと誘つた時の歌。(同十八)

て君を見むとは

業平

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとなげく人の子のため

つひに行く道とはかねてききしかどきのふ今日とは思はざりしを

天つ風雲の通ひ路ふきとぢよをとめの姿しはしとどめむ 遍昭

山風にさくら吹きまきみだれなむ花のまぎれに君とまるべく

たらちねはかかれとてしもうば玉のわが黒髪をなでずやありけむ

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに 小町

思ひつつぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

久しく訪はなかつた人を久しぶりで訪うた時の歌。(古今集一)

寛平の御時后の宮の歌合の歌。(同三)

河原左大臣の薨後河原院で。(同十六)

池畔で紅葉の散るをよんだ歌。(同五)

甲斐國へ行く道でよんだ歌。(同九)

大堰川の御幸に猿叫峽といふことを。(同十九)

屏風に八月十五日池ある家に人の遊べる所。(拾遺集三)

藤原實頼が嵯峨野に行った時。(元輔集)

人はいさ心もしらず故里は花ぞむかしの香に匂ひける 貫之

夏の夜のふすかとすればほととぎすなく一聲にあくるしのめ

君まさで煙たえにし鹽がまのうら淋しくも見えわたるかな 躬恆

風吹けばおつるもみぢ葉水きよみ散らぬかげさへ底に見えつつ

夜をさむみ置く初霜をはらひつつ草のまくらにあまたたびねぬ

わびしらにましらな鳴きそ足びきの山のかひある今日にやはあらぬ

〔四〕水の面に照る月なみをかぞふれば今宵ぞ秋のもなかなりける 順

秋の野の萩のにしきをふる里に鹿の音ながら移してしかな 元輔

敦實親王の子日に。(拾遺集一)

北白川の山莊で。(拾遺集十六)

題しらず。(後拾遺集一)

題しらず。(詞花集三)

題しらず。(後拾遺集一)

人に忘られた頭貴船にまうでて。(同二十)

小式部の死んだ後中宮から下賜の御衣を拜して。(金葉集十)

竹取の翁。

千年まで限れる松もけふよりは君にひかれて萬代やへむ 能宣

春きてぞ人もとひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ 公任

三島江にのぐみ渡る蘆のねの一よのほどに春めきにけり 好忠

山城の鳥羽田の面を見渡せばほのかに今朝ぞ秋風は吹く

春霞たつやおそきと山川の岩間をくぐる音きこゆなり 和泉式部

物思へば澤の螢もわが身よりあくがれ出でしたまかとぞ見る

諸共に苔の下にはくちらずして埋れぬ名をきくぞ悲しき

〔四〕今は昔竹取の翁といへる者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、萬のことにつかひけ

隅田川

り。名をばさぬきの造となんいひける。その竹の中に本光る竹なん一すぢありける。あやしがりて寄りて見るに、つつの中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうてゐたり、翁いふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり」とて、手にうちいれて家へもちて來ぬ。妻の女にあづけて養はす。美しきこと限なし。いと幼ければ籠にいれて養ふ。竹取の翁竹とるに、この子を見つけて後に竹を取るに、節をへだててよごに黄金ある竹を見つくること重りぬ。かくて翁やうやう豊になりゆく。(竹取物語)

海賊のうは
さ。朱雀天皇の承
平四年(五〇
十二月)土佐を
出發し、船中
で越年した。
ここに二十五
日といふのは
同五年一月で
ある。

く遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守「はや舟にのれ。日もくれぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さるをりしも、白き鳥の、嘴と足と赤き、鴨の大きさなる、水の上にあそびつついををくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守にとひければ「これなん都鳥」といふをききて
名にし負はばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと
とよめりければ舟こぞりて泣きにけり。(伊勢物語)

〔四五〕
二十五日。機取等の北風悪しといへば舟出さず。海賊おひ來といふことたえず聞ゆ。
二十六日。まことにやあらむ、海賊追ふといへば、夜中ばかり舟を出して漕ぎ來つる道に手向するところあり。機取をして幣たいまつ

四季の情趣

らするに、幣の東へ散れば、機とりの申して奉ることは、「この幣の散る方に、御舟速に漕がしめ給へ」と申して奉るを聞きて、ある女童のよめる。
わたつみのちぶりの神に手向する幣のお
ひ風やまず吹かなむ
とぞよめる。この程に風のよければ、機取いたく誇りて、舟に帆あげよなど喜ぶ。その音をききて、童も女も、いつしかと思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。この中に淡路のたうめといふ人のよめる歌
おひ風の吹きぬる時はゆく舟も帆手うち
てこそうれしかりけれ
とぞ。天氣のことにつけて祈る。(土佐日記)

北山の夕。
光君十八歳の
春、北山の夕
に幼い紫の上

夏は夜、月のころはさらなり、闇もなほ螢とびちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕ぐれ、夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆるいとをかし、日入りはてて、風の音蟲のねなどいとあはれなり。冬はつとめて、雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃・火桶などの火も白く灰がちになりぬるはわるし。(枕草子)

〔四六〕
夕ぐれのいたうかすみたるに紛れて、かの小柴垣のもとに立ちいで給ふ。人人は歸し給ひ

をはじめて見る一節である。惟光は源氏君の腹心の従者である。

犬きは、犬君の意で、女童の名。

て、惟光ばかり御供にて覗き給へば、ただこの西面にしも持佛する奉りて行ふ尼なりけり。簾少し上げて花奉るめり。中の柱によりゐて脇息の上に經をおきて、頬つきふくらかに、まみのほど、髪的美しげにそがれたる末もなかなか長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見給ふ。清げなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなえたる著て、走り來たる女子、あまた見えつる子どもに似るべくもあらず、いみじう生ひ先見えて、美しげなるかたちなり。髪は扇を廣げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。「何ごとぞや。童べと腹だち給へるか」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたるころあれば子なめりと見給ふ。「雀の子を犬きがにがしつる。ふせ

限なう心をくし聞ゆる人は源氏が深い愛著を感じてゐる人で、この幼い人の叔母にあたる。

ごの中に籠めたりつるものを」とて、いと口をしと思へり。この居たる大人「例の心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしうやうやうなりつるものを。鳥などもこそ見つくれ」とて立ちて行く。髪ゆるらかにいと長く、めやすき人なり。少納言の乳母とぞ人いふめるは、この子のうしろ見なるべし。尼君「いであな幼や。いふかひなうものし給ふかな。おのがかく今日・明日になりぬる命をば何とも思したらで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得ることぞと常に聞ゆるを、心うく」とて「こちや」といへばついゐたり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかひやりたる額つき・髪ざし、いみじう美し。ねびゆかむさまゆかしき人かなと目とまり給ふ。さるは限なう心をつくし聞

木幡まうで。伊周が左遷せられるに當つて、ひそかに父の墓を訪うた一節。木幡は藤原氏歴世の墓所である。

人人あまたものすとは、長徳元年の疫で公卿以下死んだ者の多かつたこととをい

ゆる人にとしう似奉れるがまもらるるなりけりと思ふにも涙ぞおつる。(源氏物語、若紫)

〔五三〕木幡に参り給へるに、月あかけれど、ここはいみじう木暗ければ、そのほどぞかしと思しはかり、おはしまるづるに、かの山近にてはおらせ給ひて、くれぐれとわけ入らせ給ふに、木のまより漏りいでたる月をしるべにて、卒都婆・釘ぬきなどいと多かる中に、これは去年のこの頃のことぞかし、されば少し白う見ゆれど、そのをりから人人あまたものし給ひしかば、いづれにかと萬たづねまゐり寄せ給へり。そこにてよろづをいひつづけ、ふしまろび泣き給ふけはひに驚きて、山の中の鳥獸も聲をあはせて泣きののしる。(榮華物語、浦浦の別れ)

菩提講。

入道殿下は藤原道長。

小野篁被流隠岐國時讀和歌語。

さいつ頃雲林院の菩提講にまうでて侍りしかば、例の人よりはこよなく年老いうたてげなる翁二人姫と來あひて、同じところにあぬめり。あはれにおなじやうなるものさまかなと見侍りしに、これらうち笑ひ見交していふやう、「年ごろ昔の人に對面して、いかで世の中の見きくことどもを聞えあはせむ、このただ今の入道殿下の御有さまをも申しあはせばやと思ひしに、あはれに嬉しくも逢ひ申したるかな。今ぞ心やすくよみぢもまかるべき。思しきこといはぬは、げにぞ腹ふくるることちしける。かかればこそ昔の人はものいはまほしくなれば、穴をほりていひ入れ侍りけめとおぼえ侍る。かへすがへす嬉しくも對面したるかな」といふ。(大鏡、上卷)

〔五三〕今昔、小野篁ト云人有ケリ。事有テ隱岐國ニ

ホノボトの歌は古今集の左註には「この歌はある人のいはく柿本の人まるがなり」とある。

田家秋風。(金葉集、三)

屏風の歌、鷹狩するところ。(散木集、一)
水風暮涼。(金葉集、二)

被流ケル時、船ニ乗テ出立ツツテ、京ニ知タル人ノ許ニ、此ク讀テ遣ケル、ワタノハラヤソシマカケテコギ出ヌトヒトニハツゲヨアマノツリフネト。明石ト云所ニ行テ其夜宿テ、九月許リノ事也ケレバ、明鬲ニ不被寝テ詠メ居タルニ、船ノ行クガ島隠レ爲ルヲ見テ、哀レト思テ此ナム讀ケル、ホノノトアカシノウラノアサギリニ島カクレ行舟ヲシゾオモフト云テゾ泣ケル、此レハ篁ガ返テ語ケルヲ聞テ語り傳ヘタルトヤ。(今昔物語集、卷二十四)

〔五〕夕されば門田の稲葉おとづれてあしのまるやに秋風ぞ吹く 經信

きぎすなくすた野に君がくちすゑて朝ふますらむいざゆきて見む 俊賴

風ふけば蓮のうき葉に水こえてすすしくなりぬひぐらしのこゑ

崇徳院に奉つた百首の中。(新古今集四)

題しらず。(新古今集、十八)

攝政太政大臣家で五首の歌をよんだ中に。(新古今集、一)

百首の歌を奉つた時の秋の歌。(千載集、四)

述懐百首の歌の中に。(同十七)

前張(神樂歌) 老鼠(催馬樂)

秋かぜにたなびく雲のたえまよりもれいづる月の影のさやけさ 顯輔
ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今はこひしき 清輔
またや見むかたのみのみの櫻がり花の雪ちる春のあけぼの 俊成
夕されば野べの秋かぜ身にしみてうづら鳴くなり深くさの里
世の中よ道こそなけれ思ひ入る山のおくにも鹿ぞなくなる
〔五五〕さいばりに衣はそめむ、雨ふれど、雨降れど。雨ふれどうつるひがたし、深くそめてば、ふかく染めてば。
西寺の老鼠・わか鼠、御裳つんづ、袈裟つんづ。法師に申さむ、師に申せ。法師に申さむ師に申せ。

佛歌(梁塵秘抄)

雑歌(同上)

住吉の歌合に、山を。(新古今集、十七)
隠岐で。(増鏡)
守覺法親王家の五十首の歌に。(新古今集、一)
母身まかりし秋、野分した日。(同八)
攝政太政大臣

佛は常にいませども、うつつならぬぞあはれなる。人のおとせぬ曉に、ほのかに夢に見え給ふ。

まへまへ、かたつぶり。舞はぬものならば、むまの子や牛の子にくゑさせてむ、ふみわらせてむ。まことにうつくしく舞うたらば、華の園まで遊ばせむ。

〔六〕奥山のおどろの下もふみ分けて道ある世ぞと人にしらせむ 後鳥羽院

われこそは新島守よおきの海の荒き波風心して吹け

春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるる横雲のそら 定家

玉ゆらのつゆも涙もとどまらずなき人こふる宿の秋風

霞立つ末の松山ほのぼのと浪にはなるる横雲

家の歌合に。

おなじく。(同六)

船中籤。(山家集)

題しらず。(玉葉、十五)

道のほとりに幼き子が亡き母を尋ねて泣いてゐるのを見て。(金槐集)

洪水漫天土民愁嘆せむことを思ひて。(同)

月前掃衣。(新葉集、五)

吉野行宮で、五月雨を。(同三)

征東將軍の宣旨を拜して。

のそら 家隆

滋賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りていづる有明の月

瀬戸わたる棚なし小舟心せよあられみだるるしまきよこぎる 西行

つくづくものを思ふにうち添へてをりあはれなる鐘の音かな

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる 實朝

時によりすぐれば民の歎きなり八大龍王雨やめ給へ

〔六三〕ききわびぬは月長月ながき夜の月の夜寒に衣うつこゑ 後醍醐天皇

都だに淋しかりしを雲はれぬ吉野の奥のさみだれの空

思ひきや手もふれざりし梓弓おきふしわが身

(新葉集 十八) 武藏國に轉戦した頃。(同十八) 後醍醐天皇の御陵に詣でて。(同十九)

なれむものとは 宗良親王 君のため世のため何か惜しからむ捨ててかひある命なりせば さびしさもつひのすみかと思ふには心ぞとまる峯の松風 新待賢門院

祇園精舎の事。

〔六六〕 祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆舊主先皇の政にも従はず、樂を極め、諫をも思入れず、天下の亂れむことを覺えずして、民間の憂ふるところを知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり。近く本朝をうかがふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、

主上還幸。

二條のおとどは藤原道平。

平治の信頼、是等は猛き心も奢れることも、みなとりどりにこそありしか、まぢかくは六波羅の入道、前太政大臣平朝臣清盛と申しし人の有様傳へ承るこそ心も詞も及ばれね。(平家物語、卷一) 〔六七〕 さて都には伯耆よりの還御とて、世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて、ことども定めらる。二條の前のおとど召しありて参り給へり。こたみ内裏へ入らせ給ふべき儀、重祚などにてあるべけれど、璽の笏を御身にそへられたれば、ただ遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる。關白をおかるまじければ、二條のおとど氏の長者を宣下せられて、都のこと管領あるべきよしうけたまはる。天の下ただこの御はからひなるべしとて、この一つあたり喜びあへり。六月六日東寺より常

去年の春は隠岐へ遷幸あらせられた。

大日本は神國なり。

の行幸のさまにて内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言の葉なし。去年の春いみじかりしはやと思ひいづるもたとしへなく、今も御供の武士どもありしよりは、なほいく重ともなくうち圍み奉れるは、いとむくつけきさまなれど、こたみはうとましくも見えず、たのもしくめでたき御まもりかなとおぼゆるもうちつけめなるべし。(増鏡、月草の花)

〔六八〕 大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみこのことあり、異朝にはその類なし。この故に神國といふなり。……ただわが國のみ天地開けし始より今の世の今日に至るまで日嗣をうけ給ふこと邪ならず。一種姓の中におきても自ら傍より傳へ給ひしすら、なほ正に歸る道ありてぞたまちましますける。これしかしながら神明の御

撰述のゆゑよ

鳥部・舟岡は京都郊外の茶毗所。

〔六九〕 生死の長き眠いまださめやらで、夢にのみほだされつつ、水の面の月を實と思ひ、鏡の内のかげをげにと深く思ひ入りて、あけくれはただ妄念の心のみうち續きて、生死の船をよそへずして、屠所の羊の歩は我身の外にもてはなれ、鳥部・舟岡のけぶりをよそに見て、過ぎにし方四十餘年の霜を戴き、行末しらず今日しもやあるらむ。然れば同じ夢の中の遊に

八十隨好は八十隨形好の略で、大聖佛陀の清淨奇妙の相好をいふ。

も新舊の賢き跡を選び求めける事の言の葉を書き集め、撰集抄と名づけて、座の右におきて一筋に知識に頼まむとなり。巻は九品の淨土に思ひあて、十に一をもらし、事は八十隨好に思ひよそへて百に二十を残せり。抑凡夫の習ひ、明眼しひて眞月を見ず、心老いて斷妄の利劍おこらざるものなり。されば偏に冥助を仰ぎ奉らむがために、巻毎に神明の御事を記し載せ奉り侍り。(撰集抄、序)

不請の念佛。

淨名は維摩の譯語。古代印度の聖者である。

〔四〕
そもそも一期の月影傾きて、餘算山のはに近し。忽ち三途の暗に向はむ時、何のわざをかかこたむとする。佛の人を教へ給ふ趣はことに觸れて執心無かれとなり。今草の庵を愛するもとがとす。閑寂に着するも障りなるべし。いかが用なき樂みをもて空しくあたら時を過さむ。靜なる曉、このことわりを思ひ

周梨槃特は佛弟子中第一の魯鈍者で、しかも阿羅漢果を得た者。

變化の理。

つづけて、自ら心にとひていはく、「世を逃れて山林に交るは心を修めて道を行はむがためなり。然るを汝は姿は聖に似て、心は濁にしみり。住家は則ち淨名居士のあとを汚せりと雖も、たもつところは僅に周梨槃特が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづから惱ますか、はたまた安心の至りて狂はせるか。」その時心さらに答ふることなし。ただかたはらに舌根をやとひて不請の念佛兩三返を申してやみぬ。(方丈記)

〔五〕
蟻の如くにあつまりて東西に急ぎ、南北にはしる。たかきあり、卑しきあり。老いたるあり、若きあり。行くところあり、歸る家あり。夕にいねて朝に起く、營むところ何ごとぞや。生を貪り、利を求めてやむ時なし。身を養ひて何ごとをか待つ。期するところただ老と死

とにあり、その來ること速にして、念念の間にとどまらず。これを待つ間、何のたのしみかあらむ。まどへるものはこれを恐れず、名利におぼれて先途の近きことをかへりみねばなり。おろかなる人はまたこれを悲しむ。常住ならむことを思ひて變化の理を知らねばなり。(徒然草)

〔五〕

シテ名も清き水のまにまにとめ來れば、地川は音羽の山櫻、シテ東路とても東山、せめてそなたのなつかしや。地サシ春前に雨あつて花の開くること早し。秋後に霜なうして落葉遅し。山外に山あつて山盡きず、路中に道多うして道窮りなし。シテ山青く山白くして雲來去す。地人樂しみ人愁ふ、これ皆世上の有様なり。地下歌誰かいひし春の色、げにのどかなる東山。上歌四條五條の橋の上、四條五條

清水詣
水のまにまに
は「花散れる
水のまにまに
とめ來れば山
にも春はなく
なりにけり」
(古今集)によ
る。
春前云、山
外云、山青
く、云々皆百
聯抄解の句に
よる。誰かい
ひしは和漢朗
詠集なる菅三
品の句によ

關提とは佛法を誹謗し、因果の理法を信じない者。
愛宕の寺は又六道珍皇寺ともいふ。ここから小野篁が冥途に通つたといふ俗傳があつて、門前を六道の辻といふ。
聲も旅雁のは朗詠集劉之叔の句「北斗星前横旅雁」による。

の橋の上、老若男女、貴賤都卑、色めく花衣、袖を列ねて行く末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重の花盛り、名に負ふ春のけしきかな、名に負ふ春の景色かな。地ロンギ 河原おもてを過ぎゆけば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拜む。シテ觀音も同座あり、關提救世の方便あらたに、たらちねを守り給へや。地げにや守りの末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺もうちすぎぬ。六道の辻とかや。シテげに恐ろしやこの道は、冥途に通ふなるものを、心ばそ鳥部山、地煙の末も薄がすむ、聲も旅雁の横たはる、シテ北斗の星の曇なき、地 御法の花も開くなる、シテ經書堂はこれかとよ。地そのたらちねを尋ぬなる、子安の塔をすぎ行けば、シテ春の隙ゆく駒の道、地はや程もなくこれぞこの、シテ車宿り地馬留め、ここより花車、おり

飾磨は播磨、
ここからかち
ん(嶺)といふ
染物を出した
ので、それを
徒歩路にいひ
かける。
醫師と雷。

るの衣播磨湯、飾磨のかちぢ清水の佛の御前
に念誦して、母の祈誓を申さむ。(熊野)

〔六〕
雷 藥種も持たぬ藪くすし、藥種も持たぬ藪
くすし、きはだや頼みなるらむ。是は都に住
ひいたす醫師でござる。都には典藥頭など申
して上手があまたござるによつて、我如きの
藪醫師は脈も取らせませぬ。承れば吾妻は醫
師が拂底など申すによつて、只今より吾妻へ
下らうと存ずる。……雷 ピツカリ、グワラ
リくくく。醫あゝ桑原くくく。
雷 グワラくドオ。ア痛くく。今日は
心面白う鳴渡つたれば、ふと雲間を踏外して、
このところへ落ちた。是は渺渺とした廣い野
でござるが、かけ上らう木もなし。何として
よからうぞ。イヤ是に何者やらある。ヤイヤ
イそれにあるは何者ぢや。醫是は醫師でござ

この狂言は和
田博士の狂言
選集による。

水無瀬三吟三
百韻は後土御
門天皇の長享
二年(三四)に
成った。

る。雷石がものをいふものか。醫イヤ醫者と
申して人間の病を直す者でござる。雷 何ぢ
や。人間の病を直す者ぢや。醫 なかなか。
雷 某は雷ぢやイヤ。醫ハアア敗亡致し
てござる。(雷)

〔七〕
雪ながら山もと霞むゆふべかな 宗祇
ゆく水遠くうめ匂ふ里 肖柏
河風に一むら柳春見えて 宗長
舟さすおともしるき明け方 祇
月やなほきりわたる夜に残るらむ 柏
霜おく野原秋はくれけり 長
鳴く蟲の心ともなく草かれて 祇
かきねをとへばあらはなる道 柏
(水無瀬三吟三百韻)
〔七〕
大長刀に春風ぞ吹く

辨慶やけふは火花をちらすらん

月日の下に我はねにけり
曆にて破れをつづる古葛籠

(以上大鏡波集)

飛梅や輕輕しくも神の春
われもわれもの鳥うぐひす
のどかなる風ふくろうに山見えて
めもとすさまじ月残る影

(守武千句)

〔八〕
城西竹寺昔同遊。俯仰俄驚雪滿頭。記得清涼
池上月。狂歌一夜送高秋。 義堂
天目山崩炎運徂。東南王氣委平蕪。鼓聲聲震
三州地。歌舞香消十里湖。古殿重尋芳草合。
諸陵何在斷雲孤。百年江左風流盡。小海空環
舊版圖。 絶海

頼朝論。

〔八〕
按ずるに、頼朝、行家・義経を誅せむとする事
甚だいはれなし。初め頼朝鎌倉に入りしより、
既に自家を經營するの志あり。されば東國の
豪家を故なく誅滅し、又義廣と戦ひ、義仲を
討たむとせし類、悉く皆己に害あらむことを
はかればなり。平家の暴逆を誅せむよしを稱
すといへども、兵を擧げて四年が間一騎をし
て西せしめず、富士川の戦も彼來れるが故に應ぜ
東國の郡郷ほしきままに押領して己に功ある
ものに割きあたふ。いかで是を朝憲を重くす
といふべき。義仲をうちしもかれすでに京に
入りて、平家を追ひ落し、朝賞に預りしを惡
みしが故なり。然るに義経その心を得ずして、
院中に伺候して朝賞にあづかる。且その兵を
用ゐるの方天下に變なかりしかば、もつとも
頼朝が忌み思ふ所なり。されば頼朝常に彼が
兵權を奪ひてその勢を孤にして、平氏滅び

懷舊遙寄德
上人(空華集)
錢塘懷古次
韻。(蕉堅稿)

し後にこれを推すにたやすからむことを謀れり。頼朝自ら朝に二心ある故に、朝に志あるものを忌めるなり。義経己が弟なりといへども、當時すでに朝臣に列して京師の鎮護たり。然るにこれを輦轂の下に襲ひ殺さんとす。これあに臣たるものしわざならむや。(讀史餘論、卷三)

心學道話の趣旨

〔八六〕孟子曰、仁人心也、義人路也、舍其路而弗由、放其心而不知求、哀哉。是は孟子告子上に見えまする本文でござります。扱此の仁と申すは、諸先生いろいろに御註をなされたれども、むつかしう申しては女中方や小供衆の耳へ入りにくい。それをたとへをもつて御話申しませう。……聖人の道もチンパンカンでは、女中や子供衆の耳に通ぜぬ。心學道話は、識者のために設けました事ではござりませぬ。た

物語の論

だ家業に迫はれて隙のない、御百姓や町人衆へ、聖人の道あることを御知らせ申したいと、先師の志でござりまする故、随分詞を平うして、譬を取り、或は落し話をいたして、理に近いことは神道でも佛道でも、何でもかでも取込んで、御話申します。かならず輕口話のやうな御笑ひ下されな。これは本意ではござらねども、ただ通じやすい様に申すのでござります。 (鳩翁道話、卷一上)

〔八九〕さて物語は物のあはれをしるをむねとはしたるに、そのすぢに至りては儒・佛の教にはそむけることも多きぞかし。そはまづ人の情の物に感ずることには善惡邪正さまざまある中に、ことわりに違へることに感ずまじきわざなれども、情は我ながらわが心にも任せぬことありて、おのづから忍び難きふしありて

感ずることあるものなり……。源氏君をばむねとよき人の本として、よきことのかぎりを、此の君の上にとり集めたる、これ物語の大むねにして、そのよきあしきは、儒・佛などの書の善惡とかはりあるけぢめなり。ざりとてかのたぐひの不義をよしとするにはあらず。その悪しきことは今さらいはでもしるく、さるたぐひの罪を論ずることは、自らその方の書どもの、よにこころあれば、もの遠き物語をまつべきにあらず。物語は儒・佛などのしたたかなる道のやうに迷ひを離れてざとりに入るべきのりにもあらず、又國をも家をも身をも修むべき教にもあらず、ただ世の中の物語なるが故に、さるすぢの善惡の論は暫くさしおきて、さしもかかはらず、ただもののあはれを知れる方のよきを取立ててよしとはしたるなり。此の心ばへをものにたとへていはば、蓮

月の歌とて。

九月十三夜縣居にて。

嵐。

秋の初つ方粟田を見て。

秋の末農夫の手助けをして。

大秦にて獨ながめて。

を植ゑてめでむとする人の、濁りてきたなくはあれども、泥水をたくはふるが如し。(玉の小櫛、卷二)

〔九四〕播磨路や夕ぎりはれて久方の月おしてれり印

南野の原 眞淵

鳩鳥のかつしか早稲の新しぼり酌みつつ居れば月傾きぬ

信濃なる菅の大野に飛ぶ鶯のつばさもたわに吹く嵐かな

粟田山麓のあは生色づきて薄霧なびき秋風ぞ吹く 蘆庵

小鳥おふ鳴子のなはに手をかけて竹のは山の夕日をぞ見る

大秦のふかき林をひびき來る竹の音すごき秋の夕ぐれ

事につき折に
ふれたる。

題しらず。

奈良古梅園の
墨が靈元上皇
の御覽に入つ
たのを祝つた
歌。時鳥なきつ
るかたを眺むれ
ばただ有明の
月ぞ残れる。
(後徳大寺左
大臣)
夕されば野べ
の秋風身にし
みて鶉鳴くな
り深草の里。
(後成)

〔九五〕
ゆけどゆけどかぎりなきまでおもしろし小松
が原の嘯つき夜は 景樹

いもと出でて若菜つみにし岡崎の垣ねこひし
き春雨ぞ降る

若草を駒にふませてかいま見しをとめも今は
老いやしぬらむ

〔九六〕
月ならで雲の上まですみ上るこれはいかなる
ゆえんなるらむ 貞柳

時鳥なきつるあとに呆れたる後徳大寺のあり
あけの顔 赤良

生酔の禮者を見れば大道を横すぢかひに春は
來にけり

一つとり二つ取りては焼いてくふ鶉なくなる
深草の里

世渡りの道に二つの追分やたからの山に借金
の山 飯盛

古風の連俳。
長頭丸は貞徳
の別號であ
る。

〔九七〕
身輕げにまふ羽づかひやてふひえん 季吟

御遊の光照りそへる春 長頭丸

月までも初子の松を引あひて 友仙

皆劣らじとゆふ玉帯 安靜

降雪の道すぢ作る在在に 可頼

かくれはないぞ殿の鷹狩 政信

世の常に稀な唐犬先にたて 正章

かねてばはんの用心ぞする 長久

春たつは衣の棚のかすみかな 貞徳

夕立はかきけすやうに雨聲かな (紅梅千句第二)

〔九七〕
世の中や蝶蝶とまれかくもあれ 宗因

里人の渡りさふらふか橋のしも

鴨の足は流れもあへぬ紅葉かな

有明の油ぞのこるほととぎす

富士は雪三里すそ野や春の景

菑門の連俳。

炭俵は元祿七
年(三五)に成
る。野坡・利牛
等の撰であ
る。

〔九八〕
梅が香にのつと日の出る山路かな 翁

ところどころに雉子のなきたつ 野坡

家普請を春の手すきにとりついで 坡

上のたよりにあがる米の値 翁

宵の中はらはらとせし月の雲 翁

藪ごし嘶す秋のさびしさ 坡

〔九九〕
荒海や佐渡に横たふ天の川 (炭俵) 芭蕉

初時雨猿も小囊をほしげなり 燕村

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる 一茶

足切り八助。
これは奈良の
庭籠の前半で
ある。

是がまあ終の栖か雪五尺

〔一〇〇〕
うたゝねの顔へ一冊家根にふき

本ぶりになつて出てゆく雨やどり
消えにけり幽霊はまだ橋がかり

はげ頭いゝ分別をさすり出し

〔一〇一〕
昔から今に同じ顔を見るこそをかしき世の
中。此の二十四五年も奈良通ひする肴屋あり
けるが、行くたびに只一色に極めて、蛸より
外に賣ることなし。後には人も蛸賣の八助と
て、見知らぬ人もなく、それぞれに商の道付
きて、ゆるりと三人口を過ぎける。されども
大晦日に錢五百持つて、終に年をとりたるこ
となし。口喰うて一杯に、雜煮祝うた分なり。
此の男常世渡りに油断せず、一人ある母親
の頼まれて、火桶買うて來るにも、はや間錢

死ねがな目くじろは諺。

取りて只是通さず。まして他人のことには産婆よんで来てやるけはしき時も、茶漬飯を食はずには行かぬものなり。如何に欲の世に住めばとて、念佛講仲間の布に利を取るなどは、まことに死ねがな目くじろの男なり。これほどにしてもあのざまなれば、天の咎の道理ぞかし。そもそも奈良に通ふ時より、今に蛸の足は日本國が八本に極まりたるものを、一本づつ切つて、足七本にして賣れども、誰か是に氣のつかぬことにて賣りける。其の足ばかりを松原の煮賣屋に、定まつて買ふ者あり。さりとは恐ろしの人心ぞかし。物には七十五度とて、必ず現るる時節あり。過ぎつる年の暮に、足二本づつ切つて、六本にして忙しまぎれに賣りけるに、これも穿鑿する人なく賣つて通りけるに、手貝の町の中程に、表に菱垣したる内より呼び込み、蛸二はい賣つ

油屋内。
油地獄は不良青年與兵衛がはからずも殺

て出る時、法體したる親仁じろりと見て、碁を打ちさして立出で、何とやら裾のかれたる蛸と、足の足らぬを吟味し出し、「これは何處の海より揚る蛸ぞ。足六本づつは神代このかた何の書にも見えず。不便や、今まで奈良中の者が一ぱいくうたであらう。魚屋顔見知つた」といへば、「此方の様なる大晦日に碁を打つてゐるところでは賣らぬ」と云分してぞ歸りける。その後誰が沙汰するともなく世間に知れて、さる程に狭いところは隅から隅まで足切り八助と云ひふらして、一生の身過の留ること、これおのれが心からなり。(世間胸算用、卷四)

〔〇九〕
ふき馴れし年もひさしの蓬、菖蒲は家ごとに、幟の音のぞはめくは男子持の印かや。娘ばかりの豊島屋は、亭主は外のかけ一まき、内の

人の罪を犯すに至つた事件を取扱つた他の諸作に比して頗る異色ある作である。

しまひと小拂と油うつたり舞うたりに、三人の娘の世話。まあ姉からと櫛筒取出し、とき櫛に、色香揉みこむ梅花の油。女は髪より容姿より、心の垢を梳櫛や、嫁入先は夫の家、さとの住家も親の家、鏡の家の家ならで、家といふものなけれども、誰が世に許し定めけむ、五月五日の一夜さを女の家といふぞかし。身の祝ひ月祝ひ日に、何ごとなかれ、なでつけて、髪ひくゆつの瓜櫛の齒の「ハア悲し、一枚折れた、」呆れてとんと投櫛は別の櫛とて忌むことをと、口にはいはず氣にかかる、何ぞのつげの櫛かや。かけも十に七左衛門、大かたよつて中戻り。「ああ思ひの外早いしまひ、内の拂ひもさらりとしまひ、兩替町の錢屋から燈油二升梅花一合、今橋の紙屋から通ひ持つて燈油一升、當座帳につけておく。まあ、洗足して早うお休み。明日は疾うから

禮に出さしやんせ。「いやいや早う休まれぬ。天満の池田町へ行かねばならぬ。」「ふうきやうとい、もうよいわいの。池田町は北の端、近所のかげさへ寄つたらば、過ぎてのこ」と。「こな人何いやる。節季に寄らぬ銀の、過ぎて寄つた例はない。今日暮れてから渡さうと詞つがうた。つひ一走りいて來う。このうちがひに、新銀五百八十匁、財布の錢も戸棚へ入れて錠下しや。やがて歸る」と立出づる。「まうしまうし、そんなら酒一つ。姉、それ爛して進じや」と立つて戸棚へ、徳利からちろりへ移せば、「あ、こりやこりや爛せいでも大事ない、肴も盃もいらぬ。中蓋添へて持つてこい。夜が短い、氣がせく。そこから注げ」。あいとはいへど、とどしては手も届かねば立ち上り、注ぐも受くるも立酒を、お吉見付けて、「そりや何ぞ。いまいましい。子供は頑是

ないにもせい、立酒飲んで誰を野送り。あ、
氣味わる」といはれて、夫もちやつと腰かけ
取りなほし、かけこひに行く門出に、はか行
の立酒、此の世に残らぬ残らぬ」と祝ふほどな
ほあはれ世の長き別れと出て行く。(女殺油地
獄)

〔二五〕
ここに八年の月日経て長寛二年八月下旬の事
なりけむ、浦人等がいひもて傳ふるを聞くに、
さても新院は年來御立願の事おはしますと聞
えしが、この七日ばかりは夜な夜な直島の磯
方に潜出給ひ、潮水に御姿をうつして讀經し
給ふ龍顔のいとおどろおどろしきを、面あた
り見奉りしものもありとぞ。こは實語やらむ
虚言やらむ、いと痛しきこと也かしとさざめ
きあふを、白縫つくづくとうち聞きて、わが
身久しくこの浦に住みながら、守る人の隙な

白峯。
爲朝の妻白縫
が白峯に崇徳
院の御陵に謁
する條で、秋
成の兩月物語
中白峯の章に
影響せられて
ある。

ければ情由をしらせ奉るよしもあらざりし
に、もしこの事實語ならば、玉體に親づきて、
夫が上をも聞え、わが誠忠の程をも知らせ奉
るべしと思量し、その夜の深るをまちて、只
ひとり直島に潜びゆき、御所のほとりを徘徊
して、彼此を尋ね奉れば、御所よりは遙こな
たなる浪うち際に、磯馴れし松一樹ありて、
彼處に人影してければ、是こそと思ひつつ歩
みよるに、新院は樹下よりさし出でたる巖石
の上に結跏趺坐し、ささやかなる机に經を載
せて御前に置き給へり。寔に昔の龍顔にはあ
らじと見えて、思ひしよりはいと寔れはて給
ひつ、刺させ給ひし御髪再び長伸びたるが、
御臍にふり亂れ、御髭なども長く垂れて、
秋の柳に異ならず。御衣も召換ふることなか
りけるにや、破れ垢つきし香染の法衣の御袖、
浦風に吹翻されたる間より、白く細やかなる

御手の、骨のみ高くあらはれて、御指の爪も
尖く見え給へり。悲しき哉、十善の君として
かく薄命に在するはなぞと思ひ奉れば、涙の
みはふり落ちて、稟さむやうをもわきまへず。
こなたにといひあるさへ忍びかねて、一聲高く
うち歎けば、新院はこの聲にて人あることを
知しめしけむ、しづやかに見かへり給ひて、
汝は誰ぞと問ひ給ふ。(椿説弓張月)

孔莢先生。
ある朝床屋へ
理髮に來た生
半可の漢學者
と床屋の主人
との會話であ
る。
顔淵・閔子騫
をもぢつた洒
落。
夙に起きは詩
經の成句。

〔二六〕
油でにじめたやうな太織の綿入、あひばらうどの
紋付、すそからぼろをさげて、なぎなたなりのぞ
うりをはき、あたまはさかやきはうばう、ひげむし
やくしやとして、じじむさき事はむかたなし。そ
のくせに、氣象たかく辯舌酒酒として、高慢を吐
くは、素讀指南の先生、社盟をかきあつめて、や
うやく五六輩に過ぎざる貧書生と見えたり。▲残
念閔子騫といふ古風なる口癖あり。生國はいづれ
片田舎の者、遊學の間四五十年にな。孔莢「どうだ
れど、江戸のことはむちや也」
主人、夙に起き夜に寝てかせぐものだの。
びん「ヤこれは先生さん、お早うございます、

西陽雜俎に、
王肅以銅爲逐
鼠丸、晝夜自
轉とある。

先生というてはなめげにきこゆると。孔「おれは清
て、先生さんと様をつけていふ也。孔「おれは清
貧を樂しむ氣だから、早く起きる氣もないが、
家鹿の爲に起された。ヤあたけてあたけてど
うもならぬ。びん「嘉六が酒にでも酔つて來や
したかネ。孔「此の男は何をいふ。鼠が酒に
酔つてたまるものか。ハハハハハ。びん「へ
エ、わつちちは又筋向の嘉六が、例の生酔であ
たけたかと思ひやした。孔「何さ、家鹿とは鼠
の異名さ。びん「へエ、鼠にも表徳がござへや
すかネ。孔「表徳かはしらぬが、社君だの、家
兎だのと種種異名があるて。さし出て「左
官だの壁だのとつけるも尤だネ。あいつが壁
へ穴を明けちやア左官騒ぎだ。びん「べらば
うめ、だまつ居ろ。とめ「アイトへこんで門口を
落。孔「獨居して居ると、鼠までが馬鹿にしをる。
一屋無猫老鼠走白晝と左傳にもある通り、お
れを侮つてどうもならぬ。王肅が逐鼠丸でも

欲しいものだなア。とめ「逐鼠丸とは京傳の本に書いてありやす。直さま買へやすはな。びん「馬鹿アいへ。あれは讀書丸だは。とめ「ホンニにさうだつけ。孔「ドリヤ一ッ刺つてもらはうかト、こし高のたらひへ湯をく（浮世床）

情熱。

〔二四〕
いかに深遠なる哲理を含めりとも、情熱なきの詩は活きたる美術を成し難し。いかに技の上は精巧を極むるものと雖も、若し情熱を缺けるものあれば丹青の妙趣を盡せるものと云ふべからず。美術に餘情あるは、その作者に裡面の活氣あればなり。餘情は徒爾に得らるべきものならず、作者の情熱が自らに濫積するところに於て餘情の源泉を存す。單純なる摸倣者が人を動かすこと能はざるは之を以てなり。大なる創作は大なる情熱を伴ふものなり。

日蓮と基督。

〔二四〕
日蓮は彼れ自ら釋尊の正統と稱せし如く、其の教風に於て佛教の精神を最もよく體達したる一人なりき。されば彼れと基督とを比較するに當つては、讀者は先づ佛・耶兩教の特性を眼中に置かむことを要す。然れども大いなる宗教家として人類の救済を目的としたる事に於ては兩者素より其の軌を一にす。大いなる宗教家に於て常に見る如く、其の心事の清朗にして純潔なる、其の意志の勇猛にして大膽なる、其の事業の高明にして悲壯なる、而して現世以上に於て理想世界の實在を認め、人

自然主義。

間靈性の醇化によりて是の世界の實現に力めたる、彼れと此れと殆ど符契を合するが如し。兩者の比較に當りて遭遇する幾多の異同は是の點より説明し得べし。即ち多くの場合に於て其の異は佛・耶兩教の根本的差別に本づき、其の同は大宗宗教家としての特性、即ち宗教其の物の普遍性に本づく。吾人は茲に這般の點に就いて精透なる論述を試むる能はざるを憾みとす。唯左に兩者の史蹟に本づきて其の性行の一般を比較するを以て暫く足れりとせむ。（櫻牛全集）

〔二五〕

何ゆゑ特に自然・物質・現實などいふものを自然主義の要件とするか。曰く、此等のものは從來の主義の偏したものを解散せしむむがために必要なのであつて、其の跡に入り代らしむべき主義として必要なのではない。理想主

氣まづい朝。

義・寫實主義等が文明・精神・理想等の表面的なものの際に、自然・物質・現實等の裏面的なものをおし隠した人生を描いたのに反抗して、かかる偏した人生を破碎せんがため、隠れた半面を大膽に暴露し、以て眞實な全人生と觸面せしめる。約言すれば是れによつて本當の世相を知らせる。拵へ物の人生でないものを味はせるといふに歸する。決して人生を此の一面に限らうといふ解決や理想ではない。従つて必ずしも是れでなくとも、増さず減らさぬ人生でさへあれば何でもよい譯である。（抱月全集）

〔二六〕

翌朝朝飯の時、家内の者が顔を合せた。お政は始終顔を斂めてゐて口も碌碌聞かず。文三もその通り。獨りお勢のみはソハソハしてゐて更に沈着かず、端手なく囁つて、他愛もなく

笑ふ、かと思ふとフト口を鉤かぎんで、眞面目に成つて、憶ひ出したやうに、額かぶごしに文三の顔を眺めて、笑ふでもなく、笑はぬでもなく、不思議さうな、剣呑さうな、奇奇妙妙な顔色をする。

食事が済む。お勢がまづ起上たかつて、座ざ舗ぽを出て、縁側でお鍋に戯れて、高笑をしたかと思ふ間もなく、忽ち部屋の方で、低聲に詩吟をする聲が聞えた。

益い顔かを斂しめながら、文三が續いて起立らうとして、叔母に呼び留められて、又坐直して、不思議さうに、恐る恐る叔母の顔色を窺のぞつて見て、ウンザリした。思おも做なかして、叔母の顔は尖とつてゐる。(浮雲、第一篇)

高原の夕。

〔二五〕雪はまだ深く地にあつた。馬車が浅間の麓を廻るにつれて、乗客は互に膝を突合せて震へ

た。二里ばかり乗つた。馬車を下りて、それから猶山深く入る前に、三吉はある休茶屋の爐邊で凍えた身體を温めずにはゐられなかつた。一里半ばかりの間往來する人も稀だつた。谷谷の氾濫した跡は眞白に覆はれて居た。

訪ねて行つた友達は牧野と言つて、邊鄙な山村に住んで居た。ふとしたことから三吉は斯の若い大地主と深く知るやうになつたのである。そこへ訪ねて行く度に、斯の友達の靜かな書齋や、樹木の多い庭園や、好く整理された耕地など——それを見るのを三吉は楽しみにして居たが、其の日に限つては心も沈着かなかつた。主人を始め細君や子供まで集つて、廣い古風な奥座敷で話した。斯の温い家庭の空氣の中で、唯三吉は前途のことを思ひ煩つた。事情を打明けて話して見ようと思ひなが

藝術境。

ら、翌日になつても、つひそれを言ひ出す場合が見當らなかつた。到頭三吉は言はず仕舞に牧野の家の門を出た。そして、制せいへがたい落膽と戰ひつ、元來た雪道を歸つて行つた。一時間あまり乗合馬車の立場たてばで待つたが、そこには車夫が多勢集つて話したり笑つたりして居た。思はず三吉も喪心した人のやうに笑つた。やがて馬車が出た。沈んだ日光は寒い車の上から彼の眼に映うつつた。林の間は黄に耀かがいた。彼は眺め、且つ震へた。(家)

〔三〇〕苦くんだり、怒いかつたり、騒さわいだり、泣ないたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して飽き飽きした。飽き飽きした上に芝居や小説で同じ刺激を繰返しては大變だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する

採菊東籬下は陶淵明の句。

様なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界と離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出る事が出来ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも此の境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じて居る。いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。只それだけの裏うらに暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣の娘が覗のぞいてる譯で

獨坐幽篁裡は
王維の詩。

もなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。獨坐幽篁裡、彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船・汽車、權利・義務・道德・禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすと寐込む様な功德である。(草枕)

〔三三〕
萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころ
ことさだめむ
直文

父君よ今朝はいかにと手をつきてとふ子を見れば死なれざりけり
木枯よなれがゆくへの静けさの面影ゆめみいざこの夜ねむ
雨のうちにあまは鳴かぬ蟲の音の胸にしみ

とほり寝られぬ夜かな
つながれし柱の子猿くさめする十一月の山日のさむさ
信綱

佐保神の別れかなしも來む春にふたたび逢はむわれならなくに
子規

いちはつの花咲きいでてわが目には今年ばかりの春ゆかむとす

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

富士見野は野をさながらの花園に時雨の雲がおりるまよへり
左千夫

すむ空ゆやがて這ひ來し白雲は人を花野にこめてつつめり

すこやかにけりける人は心強し病みつつあれば我は泣きけり
節

單衣きて心朗かになりけり夏は必ずわれ死なざらむ

萩の花はつはつ咲きて蟬なく九月の二日母の日は來ぬ
寛

かなしきは淺草寺の本堂の扉しまりて灯のともる時

清水へ祇園をよぎる櫻月夜今宵あふ人みなうつくしき
晶子

水底にけぶる黒髪ぬしやたれ梅の花散る山裾の園

金色のちひさき鳥のかたちして銀杏散るなり夕日の岡に

はたらけど
はたらけど猶わが生活樂にならざり
じつと手を見る

石をもて追はるるごとく
啄木

ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

過ぎゆける一年のつかれ出しものか

元日といふに
うとうと眠し

〔三四〕
蓬萊に我生きてある今年かな
子規

春雨や傘さして見る繪草紙屋
藤の花長うして雨ふらむとす

蕨の花や水ゆるやかに手長鰻
朝顔や松の梢の花一つ

日のあたる硯の箱や冬の蠅

〔三五〕
夏山の木倒す衍かな
鳴雪

蟲さくや子規の墓ある山つづき
初冬の竹縁なり詩仙堂
早春の鎌倉山の椿かな
虚子

晩涼や池の葦みな動く
遠山に日のあたりたる枯野かな
碧梧桐

島にすめば柑子澤山な正月日和

工場の建ちひろがる音のけふも西風の晴れ
寺の甍を中に湖べ小村の雪吹雪する

春やいづこ

〔三三〕
かすみのかげにもえいでし

絲の柳にくらぶれば

いまは小暗き木下闇

ああ一時の

春やいづこに

色をほこりしあさみどり

わかきむかしもありけるを

今はしげれる夏の草

ああ一時の

春やいづこに

梅も櫻もかはりはて

枝は緑の酒のごと

萬里長城の
歌。

酔うてくづる夏の夢

ああ一時の

春やいづこに

(藤村—夏草)

生ける歴史か積り來し齡は高し二千年、
影は萬里の空に入る名も長城の壁の上
落日低く雲深く關山みすみ暮れの色、
征馬懐みて留りて遊子俯仰の影長く。

絶域花は稀ながら平蕪の緑今深し、
春乾坤に回りは空ことごとく霞み行く、
天地の色は老いずして人間の世は移るふを
歌ふか高く大空に姿は見えぬ夕雲雀。

嗚呼跡古りぬ、人去りぬ、歳は流れぬ、千載の
昔に返り何の地か今秦皇の覇圖を見む、
殘壘破壁聲も無し、恨みも暗し夕ぐれ

甍

春朦朧のただなかに俯仰の遊子影一つ。

(晚翠—曉鐘)

〔三六〕
わが身をば何とかは知る。特質もなき。

素焼の甍と埋もれてありやしつらむ。

上つ代の土師の女が手すさびに

製り棄てたるその一つ、それがあらぬか。

さればこそ弄りつる徴には

小指の痕の渦輪なし残りてもあれ。

そののみの記念も今は慕はしく、

鈍びたる埴も面さへにはほゑまれぬる。

益もなき甍にはあれど、ことならば

満てもあらむ、現し世に轉がり出でし

験にと、生の香ふかき咲酒をば。

さあれ華やぐ好き日にはめぐりもあはで、

毛曾呂だにおぎのり難き身のさだめ、

何か慥たむ、土にまた埋れ果つとも。

(有明—春鳥集)

附載 参照 原文 終

國文學史年表

一、紀年は皇紀
は百年毎に
二、作家欄の横
皇紀を示す

皇紀	天皇	國史重要事項	時代區分
1100	九(後村上)	九(元弘三)北條氏亡ぶ 九(延元元)天皇吉野に幸す	古
1000	六(花園) 七(醍醐) 八(伏見) 九(宇多)	四(弘安四)元寇	
900	一(神武)	一天皇即位	上
800	二(天智) 三(天武) 四(持統) 五(文武) 六(元明) 七(元正) 八(聖武)	八(神功皇后)新羅親征	
700	九(欽明)		古
600	一(推古)	六(推古一三)小野妹子を隋に遣す	
500	二(孝德)	五(大化元)革新の政を布く	(大和時代)
400	三(天智) 四(天武) 五(持統) 六(文武) 七(元明) 八(元正) 九(聖武)	七(和銅三)奈良奠都	
300	一(孝謙) 二(淳仁) 三(光仁) 四(桓武)	五(延暦二三)平安奠都	(和時代)
200	五(文德) 六(清和) 七(陽成) 八(宇多) 九(醍醐)	一(天安二)良房攝政 五(寛平二)遣唐使を廢す	
100	一(朱雀) 二(村上) 三(圓融) 四(一條)	八(萬壽四)道長薨す	(平安時代)
0	五(近衛) 六(白河) 七(堀河) 八(鳥羽) 九(崇徳)	四(應徳三)白河院院政	
1000	一(近衛) 二(高倉) 三(後白河) 四(後鳥羽) 五(土御門) 六(順徳) 七(後堀河)	二(仁安二)清盛太政大臣 四(文治元)平氏亡ぶ 五(建久三)頼朝征夷大將軍 八(承久三)承久の變	(近古)
1100	八(後深草) 九(龜山)		
1200	一(伏見) 二(宇多) 三(後宇多) 四(後深草) 五(龜山) 六(後鳥羽) 七(土御門) 八(順徳) 九(後堀河)	四(弘安四)元寇	(近古)
1300	一(神武)		
1400	二(天智)		(平安時代)
1500	三(天武)		
1600	四(持統)		(大和時代)
1700	五(文武)		
1800	六(元明)		(和時代)
1900	七(元正)		
2000	八(聖武)		(平安時代)
2100	九(朱雀)		
2200	一(村上)		(近古)
2300	二(圓融)		
2400	三(一條)		(平安時代)
2500	四(文德)		
2600	五(清和)		(和時代)
2700	六(陽成)		
2800	七(宇多)		(大和時代)
2900	八(醍醐)		
3000	九(神武)		(上)
3100	一(推古)		
3200	二(天智)		(古)
3300	三(天武)		
3400	四(持統)		(古)
3500	五(文武)		
3600	六(元明)		(古)
3700	七(元正)		
3800	八(聖武)		(古)
3900	九(欽明)		
4000	一(神武)		(古)
4100	二(天智)		
4200	三(天武)		(古)
4300	四(持統)		
4400	五(文武)		(古)
4500	六(元明)		
4600	七(元正)		(古)
4700	八(聖武)		
4800	九(朱雀)		(古)
4900	一(村上)		
5000	二(圓融)		(古)
5100	三(一條)		
5200	四(文德)		(古)
5300	五(清和)		
5400	六(陽成)		(古)
5500	七(宇多)		
5600	八(醍醐)		(古)
5700	九(神武)		
5800	一(推古)		(古)
5900	二(天智)		
6000	三(天武)		(古)
6100	四(持統)		
6200	五(文武)		(古)
6300	六(元明)		
6400	七(元正)		(古)
6500	八(聖武)		
6600	九(朱雀)		(古)
6700	一(村上)		
6800	二(圓融)		(古)
6900	三(一條)		
7000	四(文德)		(古)
7100	五(清和)		
7200	六(陽成)		(古)
7300	七(宇多)		
7400	八(醍醐)		(古)
7500	九(神武)		
7600	一(推古)		(古)
7700	二(天智)		
7800	三(天武)		(古)
7900	四(持統)		
8000	五(文武)		(古)
8100	六(元明)		
8200	七(元正)		(古)
8300	八(聖武)		
8400	九(朱雀)		(古)
8500	一(村上)		
8600	二(圓融)		(古)
8700	三(一條)		
8800	四(文德)		(古)
8900	五(清和)		
9000	六(陽成)		(古)
9100	七(宇多)		
9200	八(醍醐)		(古)
9300	九(神武)		
9400	一(推古)		(古)
9500	二(天智)		
9600	三(天武)		(古)
9700	四(持統)		
9800	五(文武)		(古)
9900	六(元明)		
10000	七(元正)		(古)
10100	八(聖武)		
10200	九(朱雀)		(古)
10300	一(村上)		
10400	二(圓融)		(古)
10500	三(一條)		
10600	四(文德)		(古)
10700	五(清和)		
10800	六(陽成)		(古)
10900	七(宇多)		
11000	八(醍醐)		(古)
11100	九(神武)		
11200	一(推古)		(古)
11300	二(天智)		
11400	三(天武)		(古)
11500	四(持統)		
11600	五(文武)		(古)
11700	六(元明)		
11800	七(元正)		(古)
11900	八(聖武)		
12000	九(朱雀)		(古)
12100	一(村上)		
12200	二(圓融)		(古)
12300	三(一條)		
12400	四(文德)		(古)
12500	五(清和)		
12600	六(陽成)		(古)
12700	七(宇多)		
12800	八(醍醐)		(古)
12900	九(神武)		
13000	一(推古)		(古)
13100	二(天智)		
13200	三(天武)		(古)
13300	四(持統)		
13400	五(文武)		(古)
13500	六(元明)		
13600	七(元正)		(古)
13700	八(聖武)		
13800	九(朱雀)		(古)
13900	一(村上)		
14000	二(圓融)		(古)
14100	三(一條)		
14200	四(文德)		(古)
14300	五(清和)		
14400	六(陽成)		(古)
14500	七(宇多)		
14600	八(醍醐)		(古)
14700	九(神武)		
14800	一(推古)		(古)
14900	二(天智)		
15000	三(天武)		(古)
15100	四(持統)		
15200	五(文武)		(古)
15300	六(元明)		
15400	七(元正)		(古)
15500	八(聖武)		
15600	九(朱雀)		(古)
15700	一(村上)		
15800	二(圓融)		(古)
15900	三(一條)		
16000	四(文德)		(古)
16100	五(清和)		
16200	六(陽成)		(古)
16300	七(宇多)		
16400	八(醍醐)		(古)
16500	九(神武)		
16600	一(推古)		(古)
16700	二(天智)		
16800	三(天武)		(古)
16900	四(持統)		
17000	五(文武)		(古)
17100	六(元明)		
17200	七(元正)		(古)
17300	八(聖武)		
17400	九(朱雀)		(古)
17500	一(村上)		
17600	二(圓融)		(古)
17700	三(一條)		
17800	四(文德)		(古)
17900	五(清和)		
18000	六(陽成)		(古)
18100	七(宇多)		
18200	八(醍醐)		(古)
18300	九(神武)		
18400	一(推古)		(古)
18500	二(天智)		
18600	三(天武)		(古)
18700	四(持統)		
18800	五(文武)		(古)
18900	六(元明)		
19000	七(元正)		(古)
19100	八(聖武)		
19200	九(朱雀)		(古)
19300	一(村上)		
19400	二(圓融)		(古)
19500	三(一條)		
19600	四(文德)		(古)
19700	五(清和)		
19800	六(陽成)		(古)
19900	七(宇多)		
20000	八(醍醐)		(古)
20100	九(神武)		
20200	一(推古)		(古)
20300	二(天智)		
20400	三(天武)		(古)
20500	四(持統)		
20600	五(文武)		(古)
20700	六(元明)		
20800	七(元正)		(古)
20900	八(聖武)		
21000	九(朱雀)		(古)
21100	一(村上)		
21200	二(圓融)		(古)
21300	三(一條)		
21400	四(文德)		(古)
21500	五(清和)		
21600	六(陽成)		(古)
21700	七(宇多)		
21800	八(醍醐)		(古)
21900	九(神武)		
22000	一(推古)		(古)
22100	二(天智)		
22200	三(天武)		(古)
22300	四(持統)		
22400	五(文武)		(古)
22500	六(元明)		
22600	七(元正)		(古)
22700	八(聖武)		
22800	九(朱雀)		(古)
22900	一(村上)		
23000	二(圓融)		(古)
23100	三(一條)		
23200	四(文德)		(古)
23300	五(清和)		
23400	六(陽成)		(古)
23500	七(宇多)		
23600	八(醍醐)		(古)
23700	九(神武)		
23800	一(推古)		(古)
23900	二(天智)		
24000	三(天武)		(古)
24100	四(持統)		
24200	五(文武)		(古)
24300	六(元明)		
24400	七(元正)		(古)
24500	八(聖武)		
24600	九(朱雀)		(古)
24700	一(村上)		
24800	二(圓融)		(古)
24900	三(一條)		
25000	四(文德)		(古)
25100	五(清和)		
25200	六(陽成)		(古)
25300	七(宇多)		
25400	八(醍醐)		(古)
25500	九(神武)		
25600	一(推古)		(古)
25700	二(天智)		
25800	三(天武)		(古)
25900	四(持統)		
26000	五(文武)		(古)
26100	六(元明)		
26200	七(元正)		(古)
26300	八(聖武)		
26400	九(朱雀)		(古)
26500	一(村上)		
26600	二(圓融)		(古)
26700	三(一條)		
26800	四(文德)		(古)
26900	五(清和)		
27000	六(陽成)		(古)
27100	七(宇多)		
27200	八(醍醐)		(古)
27300	九(神武)		
27400	一(推古)		(古)
27500	二(天智)		
27600	三(天武)		(古)
27700	四(持統)		
27800	五(文武)		(古)
27900	六(元明)		
28000	七(元正)		(古)
28100	八(聖武)		
28200	九(朱雀)		(古)
28300	一(村上)		
28400	二(圓融)		(古)
28500	三(一條)		
28600	四(文德)		(古)
28700	五(清和)		
28800	六(陽成)		(古)
28900	七(宇多)		
29000	八(醍醐)		(古)
29100	九(神武)		
29200	一(推古)		(古)
29300	二(天智)		
29400	三(天武)		(古)
29500	四(持統)		
29600	五(文武)		(古)
29700	六(元明)		
29800	七(元正)		(古)
29900	八(聖武)		
30000	九(朱雀)		(古)
30100	一(村上)		
30200	二(圓融)		(古)
30300	三(一條)		
30400	四(文德)		(古)
30500	五(清和)		
30600	六(陽成)		(古)
30700	七(宇多)		
30800	八(醍醐)		(古)
309			

1500	1400	1300	1200	1100	1000	900	800	700	600	500					
10(文徳) 16(清和) 18(陽成) 20(宇多) 21(醍醐)	20(朱雀) 21(村上) 22(圓融) 23(一條) 24(後一條) 25(後朱雀) 26(後冷泉)	27(白河) 28(堀河) 29(鳥羽) 30(崇徳)	31(近衛) 32(後白河) 33(高倉) 34(後鳥羽) 35(土御門) 36(順徳) 37(後堀河)	38(後深草) 39(龜山) 40(後宇多) 41(伏見) 42(花園) 43(醍醐) 44(後村上)	45(長慶) 46(後龜山) 47(後小松) 48(稱光) 49(後花園)	50(後土御門) 51(後柏原) 52(後奈良) 53(正親町)	54(後光明) 55(東山) 56(中御門) 57(櫻町) 58(桃園)	59(光格) 60(仁孝)	61(孝明) 62(明治)	63(大正) 64(今上)					
16(天安) 良房攝政	18(天智) 遺唐使を廢す	27(仁安) 清盛太政大臣	37(萬壽) 道長薨す	42(弘安) 元寇	50(元中) 後龜山天皇還幸	53(天正) 足利氏亡ぶ	54(延寶) 綱吉將軍となる	57(天明) 松平定信老中となる	58(享保) 吉宗將軍となる	59(同) 西洋書の禁を解く	62(慶應) 大政奉還	63(明治) 日清戦役起る	64(同) 日露戦役起る	65(同) 世界大戦起る	66(同) 媾和條約調印

(代時京東) 代近 (代時戸江) 世近 (代時町室・倉鎌) 古近 (代時安平) 古中
 代時の學文戸江 代時の學文方上 代時の行流歌連・創草學文劇 代時の學文話説・記軍 代時の興再歌和 代時の盛極語物 代時の隆興歌和 代時の盛

五吉論 六牛柳 七月抱 八彌阿 九造造	五柳川 六空松 七近三 八因宗 九鶴西	三阿頓 四親王 五宗良	七朝實 八行西 九充俊 通尾	言納少清? 只 之貫? 三	三外鳴 四子虛 五桐梧 六雪鳴 七夫左 八規子 九節是 寬三	五柳川 六空松 七近三 八因宗 九鶴西	三阿頓 四親王 五宗良	七朝實 八行西 九充俊 通尾	言納少清? 只 之貫? 三	三外鳴 四子虛 五桐梧 六雪鳴 七夫左 八規子 九節是 寬三	五柳川 六空松 七近三 八因宗 九鶴西	三阿頓 四親王 五宗良	七朝實 八行西 九充俊 通尾	言納少清? 只 之貫? 三
八外鳴 九子虛 一〇桐梧 一一雪鳴 一二夫左 一三規子 一四節是 一五寬三	一六有也 一七貫鬼 一八村燕 一九太充 二〇考支 二一庵蘆 二二成秋 二三義元 二四樹景 二五胤篤	二六徹正 二七好兼 二八俊了 二九宗 三〇彌阿 三一武守	三二成俊 三三信經 三四頼俊 三五圓慈 三六隆家 三七明長	三八言納少清? 只 三九之貫? 三 四〇眞道 四一忠好? 四二任公 四三母綱道?	四四外鳴 四五子虛 四六桐梧 四七雪鳴 四八夫左 四九規子 五〇節是 五一寬三	五二有也 五三貫鬼 五四村燕 五五太充 五六考支 五七庵蘆 五八成秋 五九義元 六〇樹景 六一胤篤	六二徹正 六三好兼 六四俊了 六五宗 六六彌阿 六七武守	六八成俊 六九信經 七〇頼俊 七一圓慈 七二隆家 七三明長	七四言納少清? 只 七五之貫? 三 七六眞道 七七忠好? 七八任公 七九母綱道?	八〇外鳴 八一子虛 八二桐梧 八三雪鳴 八四夫左 八五規子 八六節是 八七寬三	八八有也 八九貫鬼 九〇村燕 九一太充 九二考支 九三庵蘆 九四成秋 九五義元 九六樹景 九七胤篤	九八徹正 九九好兼 一〇〇俊了 一〇一宗 一〇二彌阿 一〇三武守	一〇四成俊 一〇五信經 一〇六頼俊 一〇七圓慈 一〇八隆家 一〇九明長	一一〇言納少清? 只 一一一之貫? 三 一一二眞道 一一三忠好? 一一四任公 一一五母綱道?

一、紀年は皇紀を用ひ、年號を附記する。而して皇紀千二百年以後は百年毎に縦線を劃した。
 二、作家欄の横線はその存命の期間を示し、數字はその生歿の年の皇紀を示す。但し判明しないものは點線を用ひ、?符を附した。

	作品				事項	外國
	詩歌	物語・小説	戯曲	隨筆・日記・その他		
二(天平勝寶三)懷風藻 ?萬葉集	三(和銅五)古事記			六(推古三)十七條憲法 七(養老四)日本書紀 八(天平四)出雲風土記	九(應神一五)阿直岐來朝 一〇(履仲四)諸國に史をおく	一七 釋迦 一八 孔子 一九 ソクラテス
三(神樂歌)(催馬樂) 七(弘仁五)凌雲新集 八(天長四)經國集	空(大同三)古語拾遺 ?日本靈異記		三(寶龜三)歌經標式 ?文鏡秘府論	詩賦この頃から作られる 老(文武元)現存宣命の最古のものはこの年のものである 三(和銅六)風土記撰進の勅下る	六(唐興る)	
六(延喜五)古今集	竹取物語 伊勢物語		三(寶龜三)歌經標式 ?文鏡秘府論	二(天長五)歌集勅撰のことこの年に終る ?この頃詩文が盛になつた 七(弘仁五)詩集勅撰のことこの年に始る ?この頃既に片假名が行はれてゐた	一七 王維 一八 李白 一九 杜甫	
一(天曆五)後撰集 ?拾遺集	宇津保物語 落窪物語 源氏物語		七(延長五)延喜式 ?土佐日記 枕草子 和泉式部日記 紫式部日記	二(天曆五)和歌所を梨壺におく ?自敘傳體の日記おこる 六(寛弘五)源氏物語の一部既に流布す	二〇 白樂天	
哭(應徳三)後拾遺集 六(大治三)金葉集	御津の濱松 榮華物語 大鏡 今昔物語集		?更級日記	?歴史物語興り、説話文學亦盛になる ?この頃和歌や、新味をおぶ	二一 歐陽明 二二 蘇東坡	
二(仁平元)詞花集 ?梁塵秘抄 四(文治三)千載集 六(元久三)新古今集 七(貞永元)新勅撰集	?とりかへばや 宇治拾遺物語 保元物語 平家物語 源平盛衰記 唐物語		七(建曆三)方丈記 八(永久三)愚管抄 ?海道記 ?東關紀行	六(建仁元)和歌所を二條殿におく ?軍記物語の起つたのはこの頃か	二二 朱熹	
	三(建長四)十訓抄 四(同 六)古今著聞集 ?堤中納言物語		?十六夜日記	?この頃から歌道門閥の争起る	二三 文天祥	
			九(延元四)神皇正統記		二四 ダンテ	

昭和八年七月二十五日 印刷
昭和八年七月二十九日 發行
昭和八年十二月五日 修正再版印刷
昭和八年十二月十日 修正再版發行

新制國文學史

定價 金六十錢

國文學史



著者 藤井乙男

發行者兼 株式會社三省堂
東京市神田區神保町一丁目一番地

代表者 龜井寅雄

印刷所 株式會社三省堂蒲田工場
東京市蒲田區出雲町一〇一番地

發行所

株式會社三省堂
東京市神田區神保町一丁目一番地
振替口座東京三二五五五
株式會社三省堂
大阪市西區阿波座下通二ノ六
振替口座大阪八一三〇〇

〔本製田蒲〕

發行

（一）...

...

...

...

...

...



33
639

広島大学図書
2000038639
